



YAPOO, THE HUMAN-CATTLE
Egawa Tatsuya / Numa Shozo

家畜 ヤポ 四

かちく
じん

Y
A
P
O
O

作画 江川達也
原作 沼正三

BIRZ
COMICS

BIRZ
COMICS
家
か
畜
ちく
人
じん
ヤ
ポ
ー
四
原作 江川達也
沼正三
発行 幻冬舎
コミックス

ISBN4-344-80451-1
C9979 ¥590E
雑誌 54243-32
定価：本体590円＋税
発行＝幻冬舎コミックス
発売＝幻冬舎





ヴァス・ウィルド・アオス・イーム
彼は何になるだろうか？

YAPPOO, THE HUMAN CATTLE



BIRZ
COMIC

家畜人ヤプ

1

正川達也

編訳
創元社
コミック

YAPPOO

YABOO, THE HUMAN CATTLE
Egawa Takuya × Nima Shozo

家畜

かちく
じん

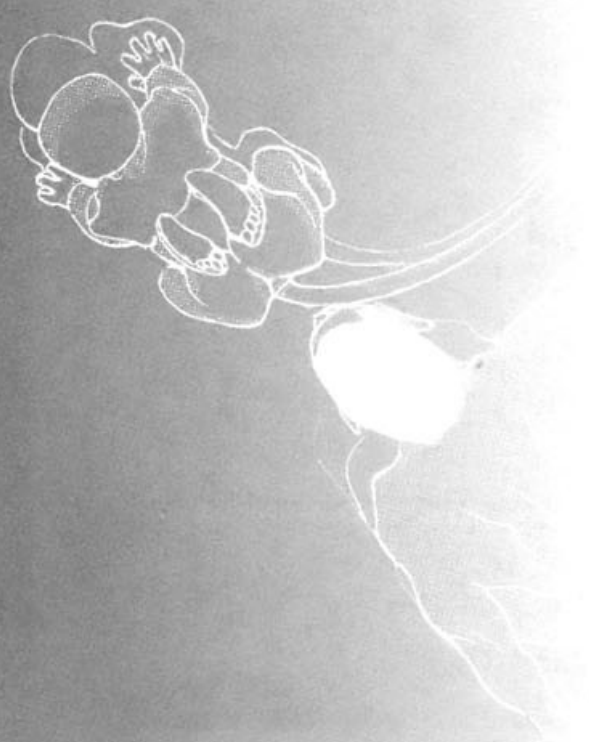
ヤブ

Y
A
P
O
O

四

作画
原作

江川達也
沼正三



YAPOO, THE HUMAN CATTLE 4 CONTENTS

第八章 二千年後の地球へ

第一話 ————— 3

第二話 ————— 39

第三話 ————— 75

第九章 別々になつて

第一話 ————— 108

第二話 ————— 147

一時間
あまり前

タウヌス山麓で

蝶の採集を
していた
時に

山中に
円盤状の
物体が
落下するのを

目撃し

少年らしい
好奇心に
燃えて

この時
思わず
立ち止まって

前方の
空を
注視した

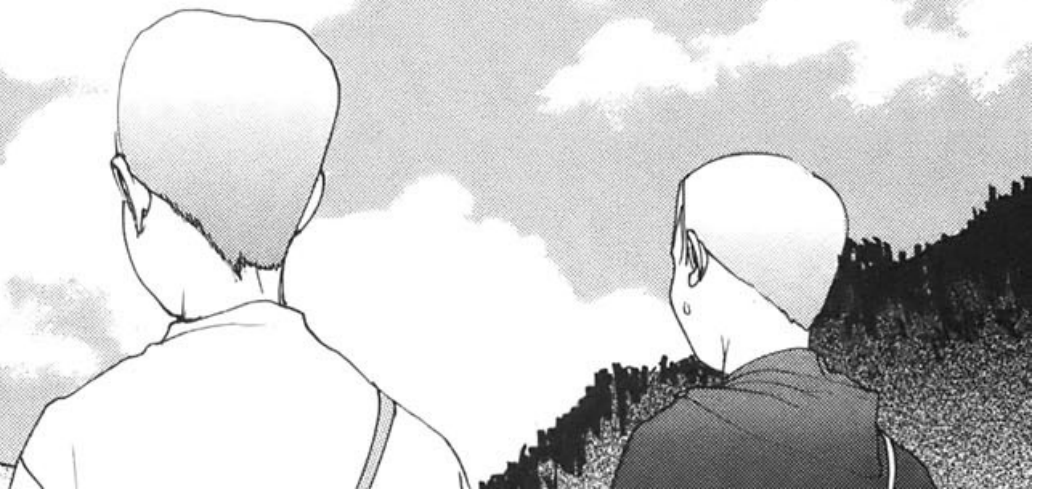
さっそく山道を
登って来ていた

二人の
中学生は

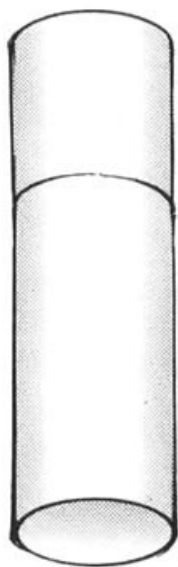
忽然と
まったく
いきなり
わいて
出たように

大きな
円筒形の
物体が
空に
浮かんで
いた

直径
三十メートルの
円形底面に
高さ
百メートルの
完全な
円筒体



第八章 二千年後の地球へ
——第一話——



日本人なら
茶筒を
連想する
だろう

窓も
何もない
オレンジ色に
輝く物体が

地面に
対して
垂直に
静止して
いた



あつ

円筒だ

オロロンの
時と
同じだ

さっきのは
やっぱり
UFO
だったんだぜ



円盤を伴う
円筒が
出現し



一九五二年十月



南仏
オロロン市に

あとに
「天使の髪エンゼルヘアの毛」
と称よばれる



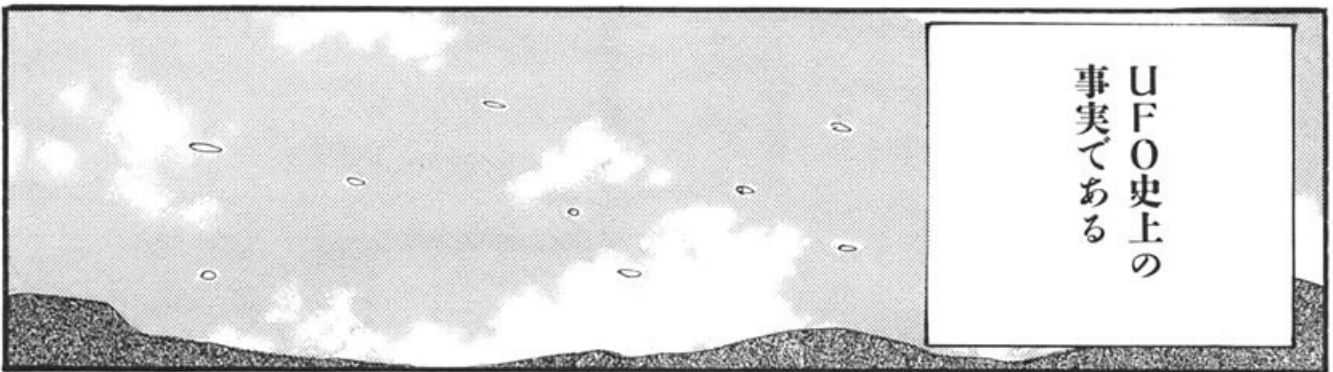
不思議な
蒸発繊維を

残して
去ったことは

「空飛ぶ円盤」に
関心を持つ人なら
知らぬ
者はない



UFO史上の
事実である



二少年は
ますます
昂奮して

早くその
直下まで
到達しようと
した



まだ
あるような
直覚が
働いた



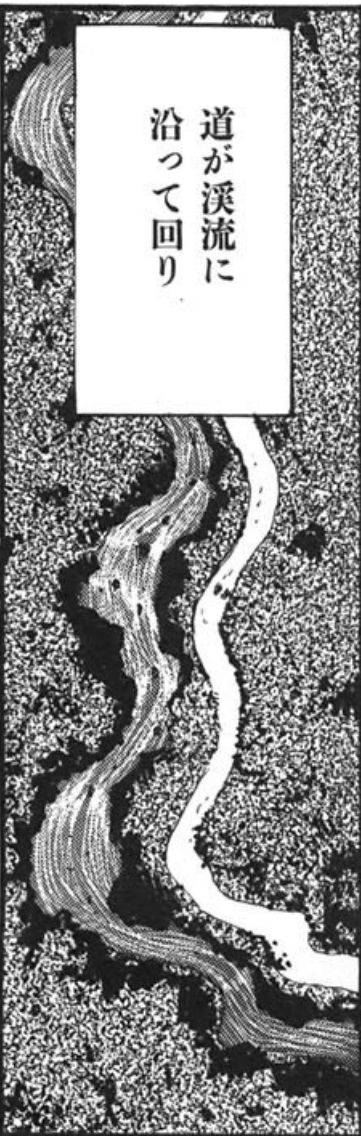
円筒体の
静止した
下の地点に



さつき
見かけた
円盤型
UFOが



道が溪流に
沿って回り



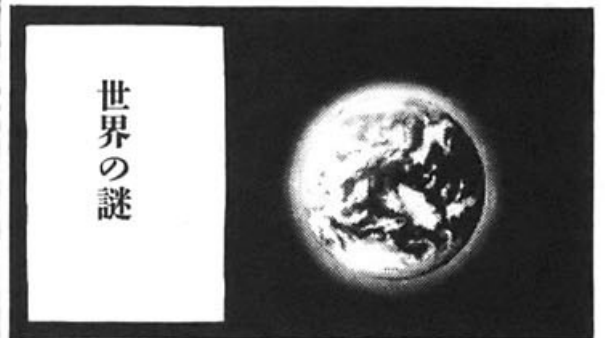
知らず知らず
彼らは駆足に
なった



未知の物体



世界の謎



中には
きつと
宇宙人が
.....





悠然と
円筒型
UFOが
静止していた



こちらは
円盤艇の
操縦室の
中

急に
ブザーが
鳴った

ポーリーンが
スイッチを
入れると

ステレオ
立体受像台に

姉に
向って

ドリスの
半身像が
現われて

いった



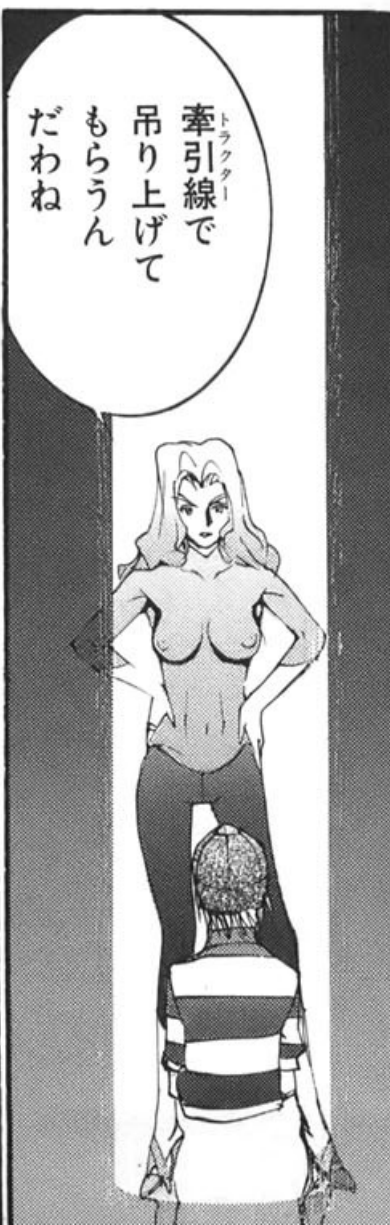
上って
来れない？

壊れてる
ようだけど

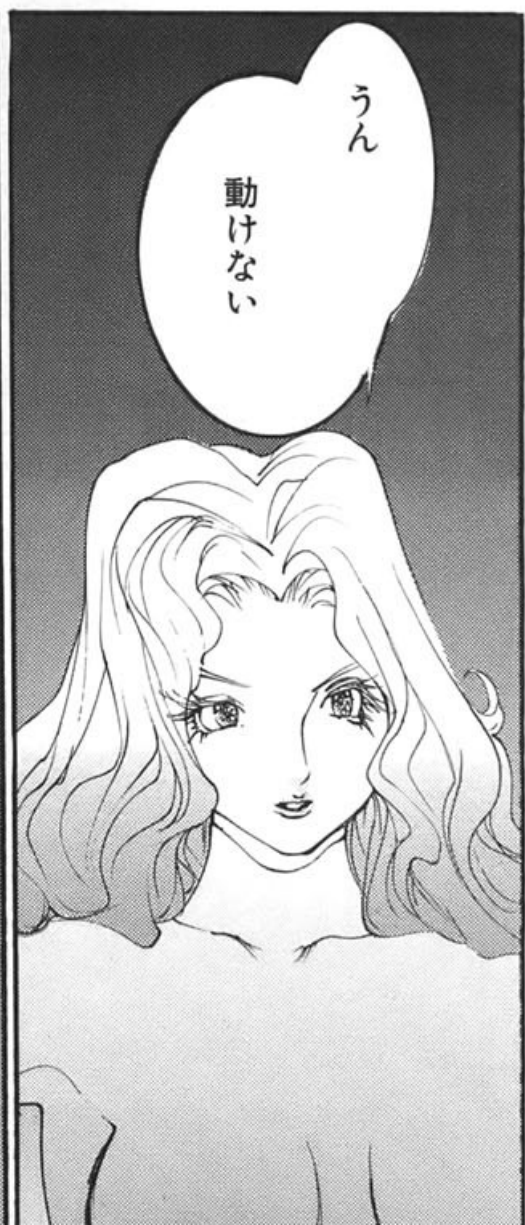


わかった

今青光線の
用意させる
から



牽引線トラクターで
吊り上げて
もらうん
だわね



うん
動けない

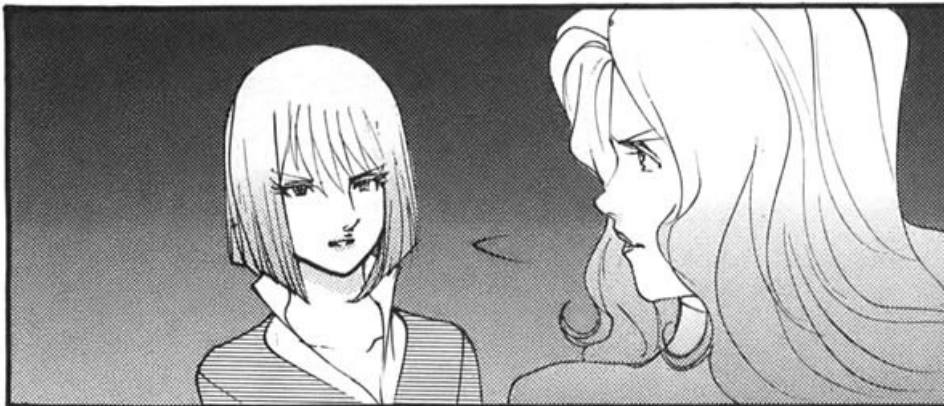


像が消えた

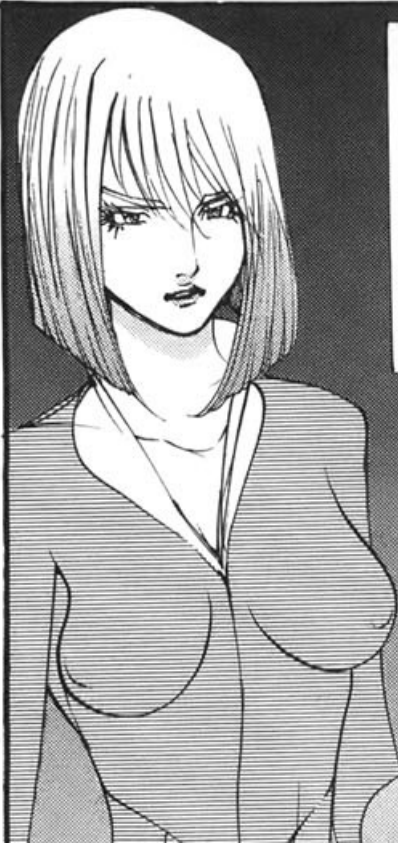
あわただしい
会話をして



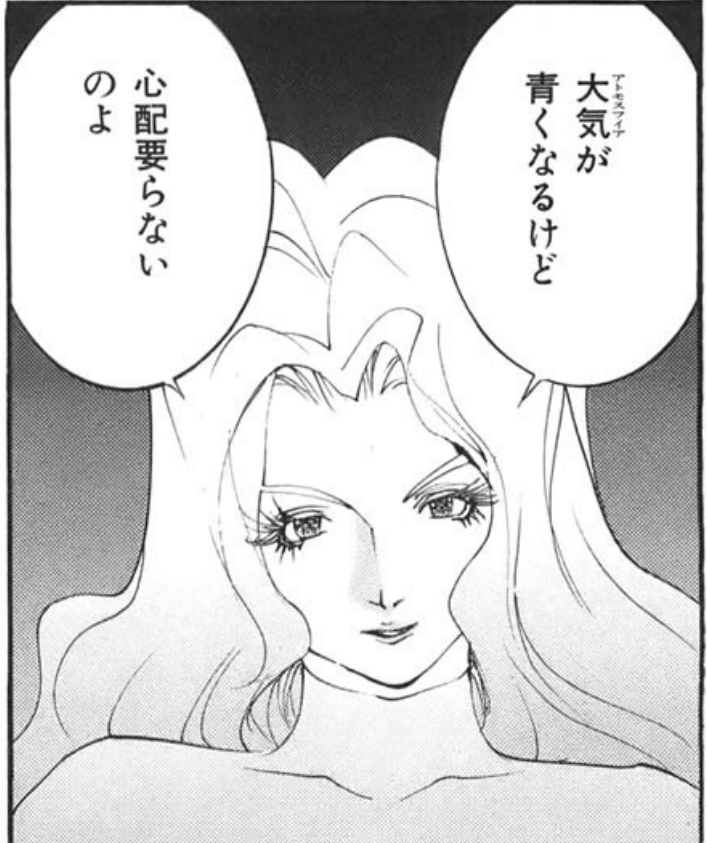
ちよつと
待っててね



ポーリーンは
クララを顧みて



いい終って
間もなく



大気が
青くなるけど

心配要らない
のよ



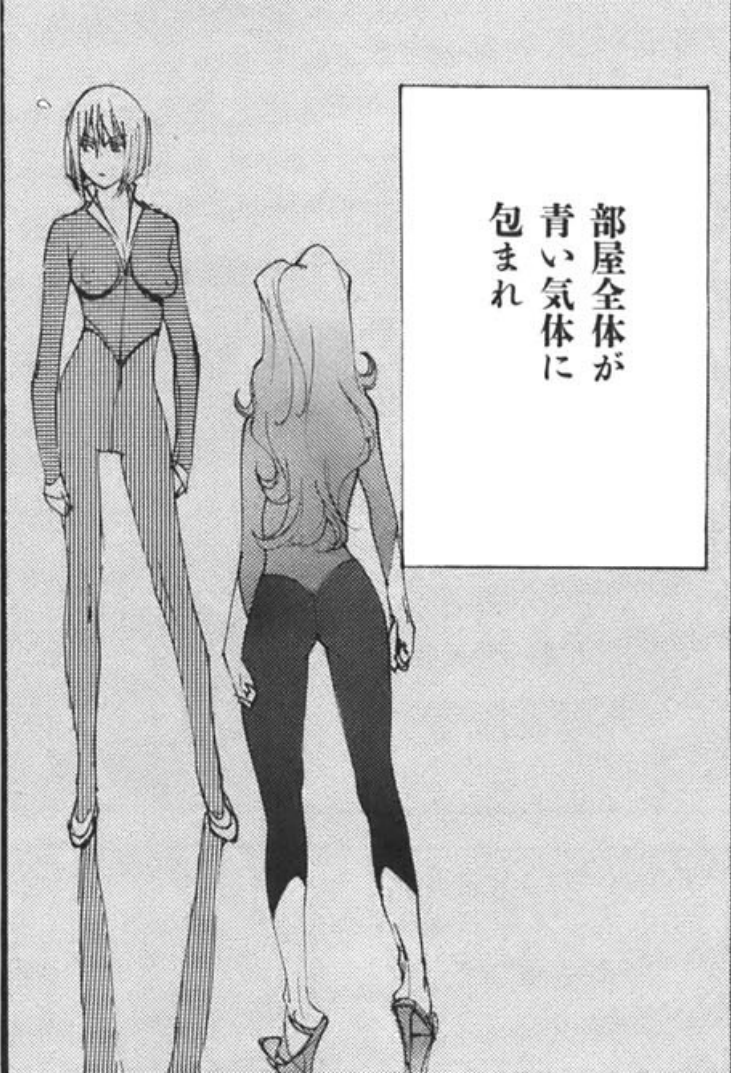
まるで
窓のある
あたりで



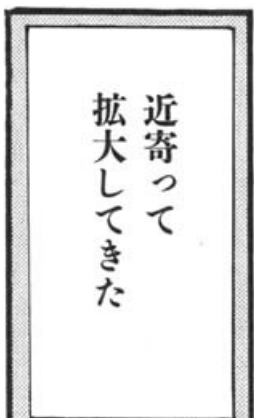
夕暮を
感じるかの



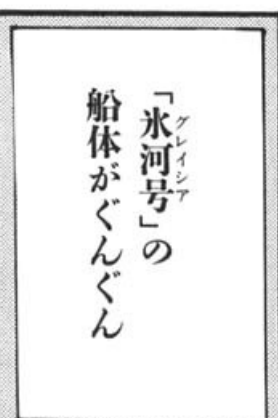
思いがすると
同時に



部屋全体が
青い気体に
包まれ



近寄って
拡大してきた



「^{アレイシア}氷河号」の
船体がぐんぐん



エレベーターの
ような上昇感と
ともに



卓上の
立体リーダーに
示されている

ところで…
ね
クララ嬢さん

あなた
貴女のことを
皆にどう
いおうか…

ポーリーンは
少々
心もと
なさそうな
様子で

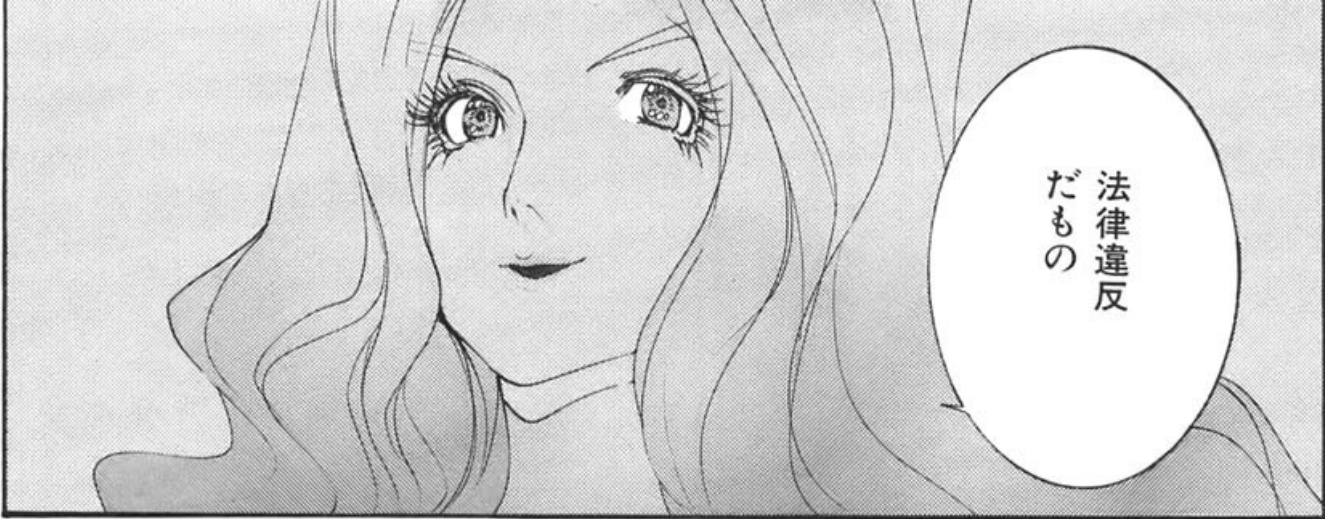
そりゃ
ゆっくり
事を

わけて
説得すれば
別だけど

前史時代人だと
わかったら

貴女を
乗せることを
承知しないと
思うの


すぐには
承知しっこ
ないわ




法律違反
だもの




貴女も
イースの
人だけど




だから
妾^{めかけ}
こうしたらと
思うの




タイムドライブ
航時遊航中に
妾^{めかけ}みたい
に墜落したか




それとも
故意に
無断着陸
したか



とにかく



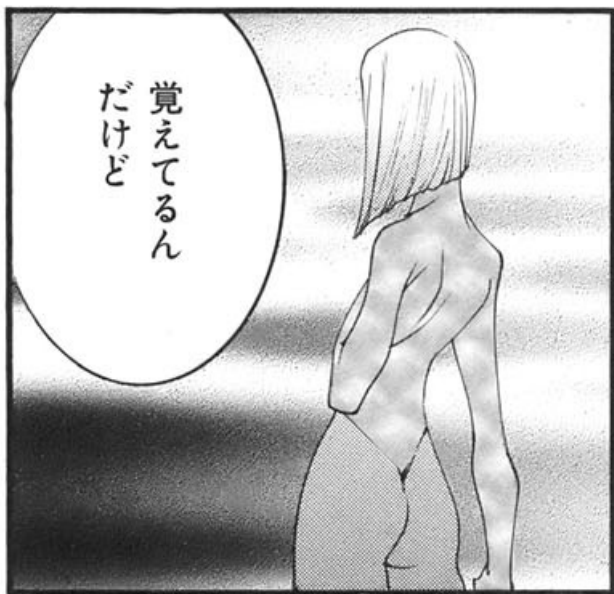
この球面に
降りた



ところが
何かの事故で
航時機^{タイムマシン}が
壊れて

帰れなく
なると同時に

その事故の
衝撃で





捕獲して
あった



その事故の
直前に



ヤプーが忠実に
貴女に仕えて
世話をしていた



貴女に救われた



……そこへ



妾が墜落して



妾は
一見して

貴女を
イース人と
認知したし



臆げながら



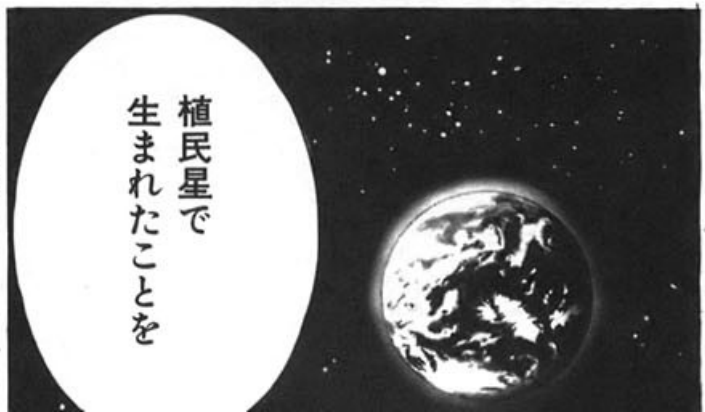
貴女も
ディスク
円盤を見て




思い出した



自分が
イースの
どこかの



植民星で
生まれたことを



それで
妾が貴女を
連れ戻ることに
した



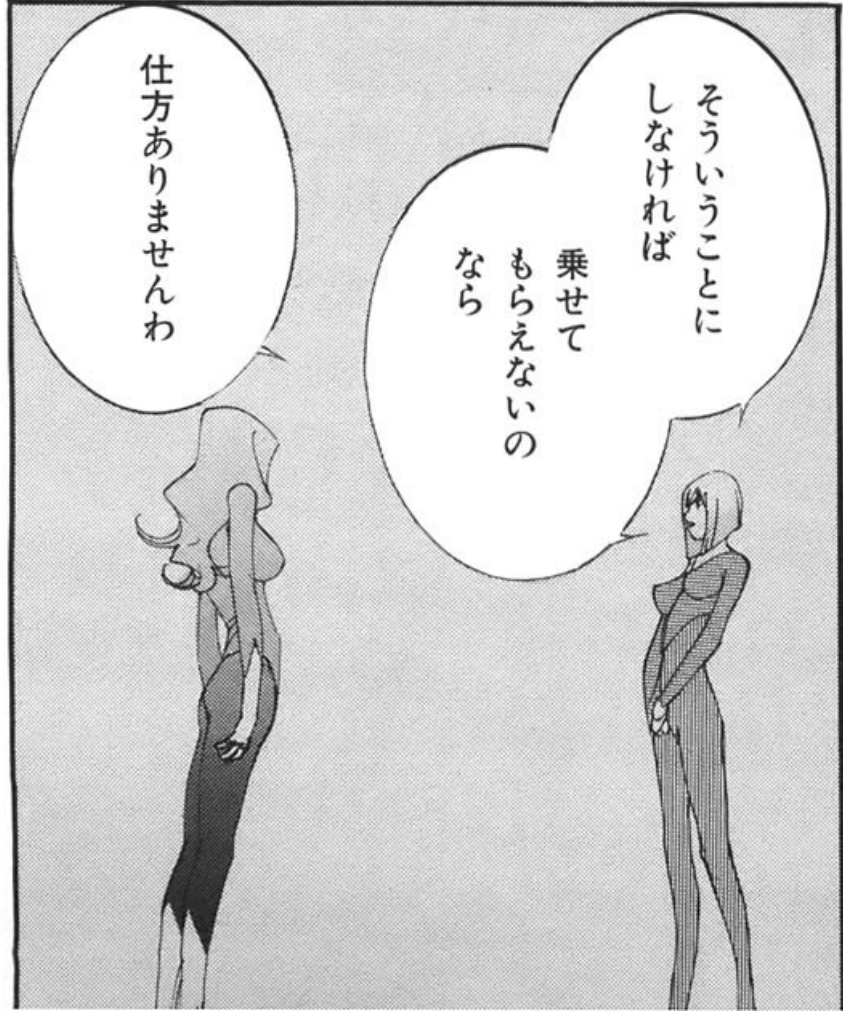
……どうかしら



このお芝居？



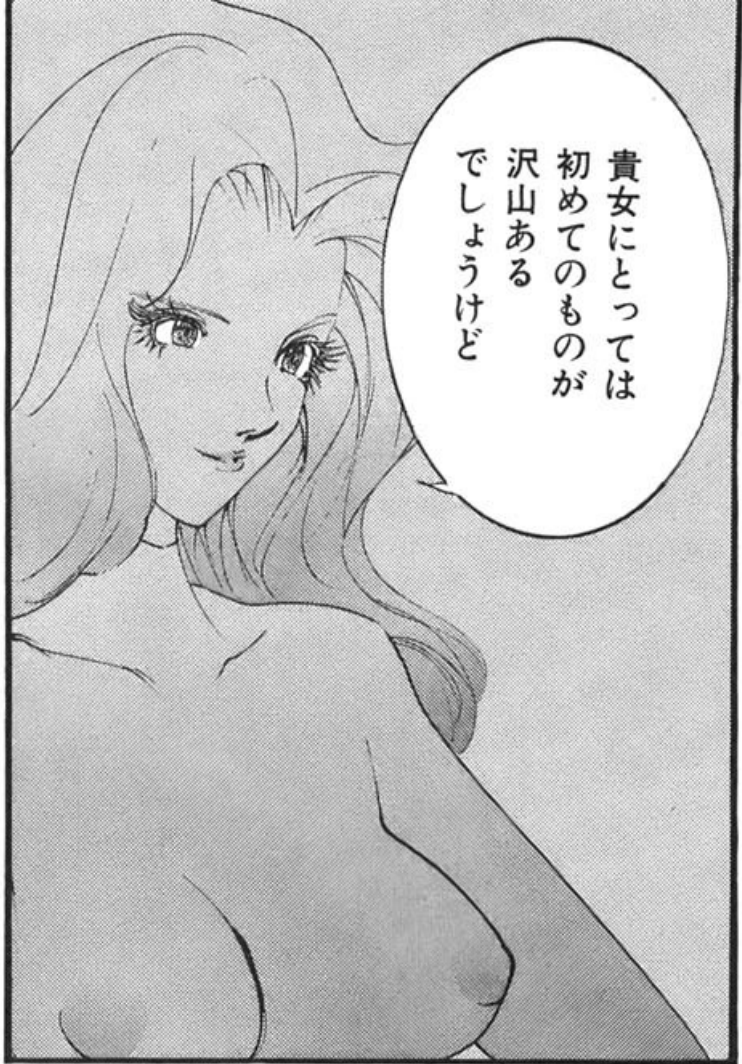
わかりました



そういうことに
しなければ

乗せて
もらえないの
なら

仕方ありませんわ

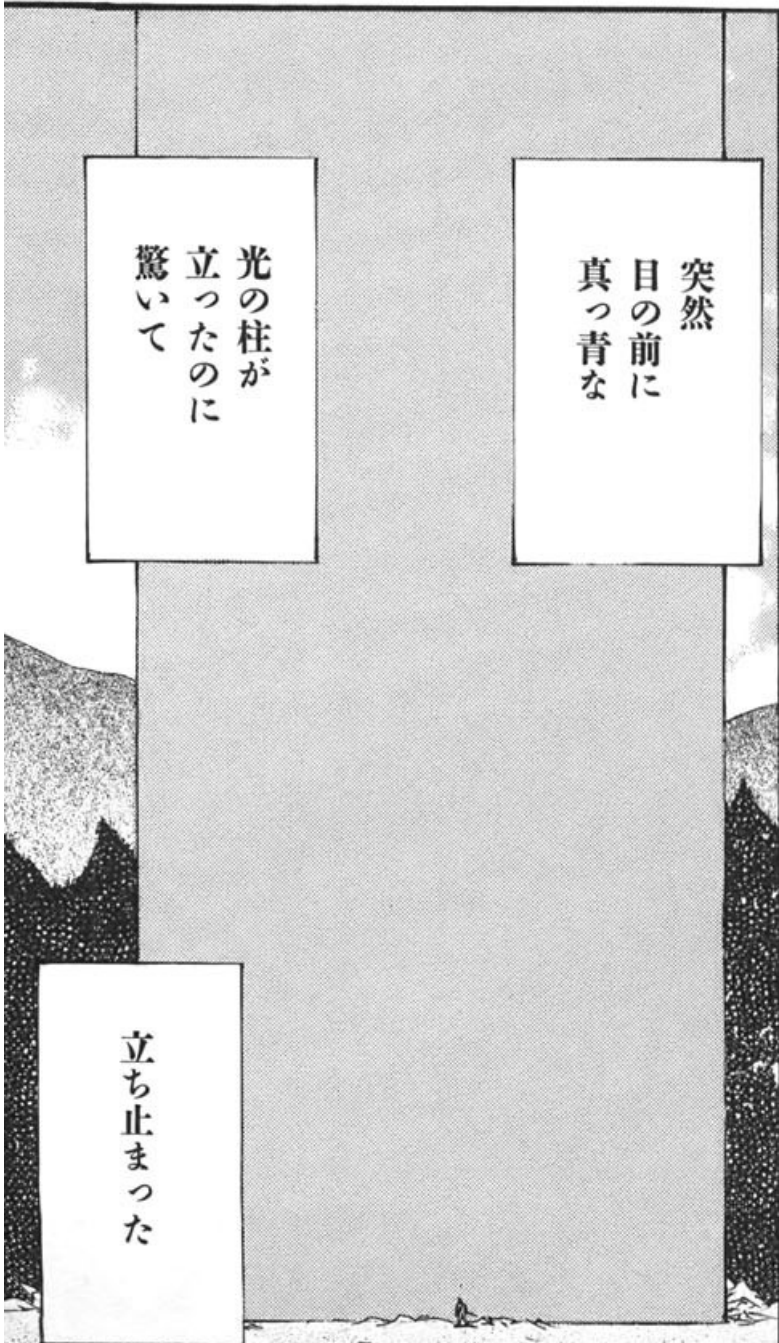




円盤のすぐ
そばまで
来ていた
一少年は



馳せ寄って



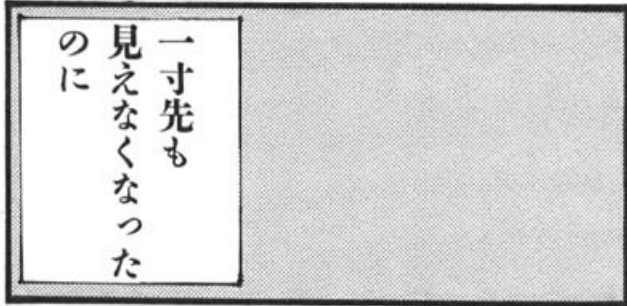
光の柱が
立ったのに
驚いて

突然
目の前に
真っ青な

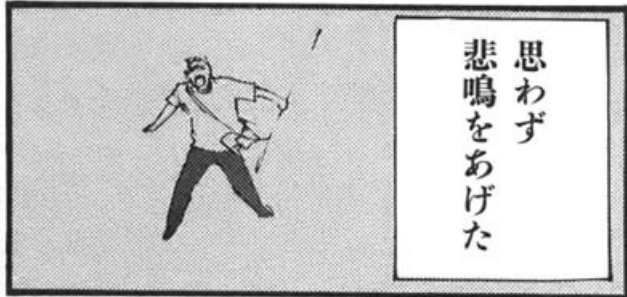
立ち止まった



にわか空間が
濃青色になって



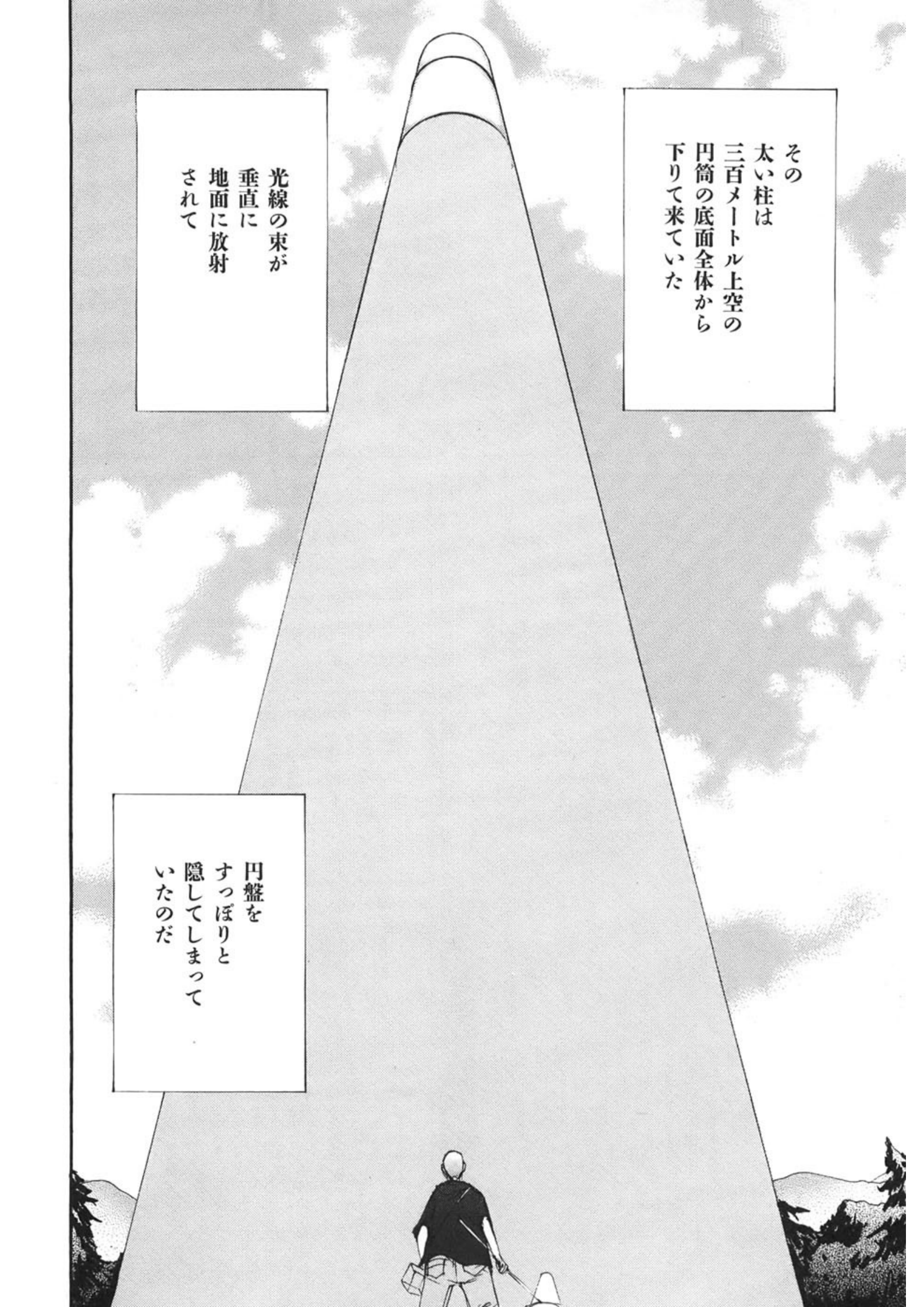
一寸先も
見えなくなった
のに



思わず
悲鳴をあげた



あとに
続いていた
一人は



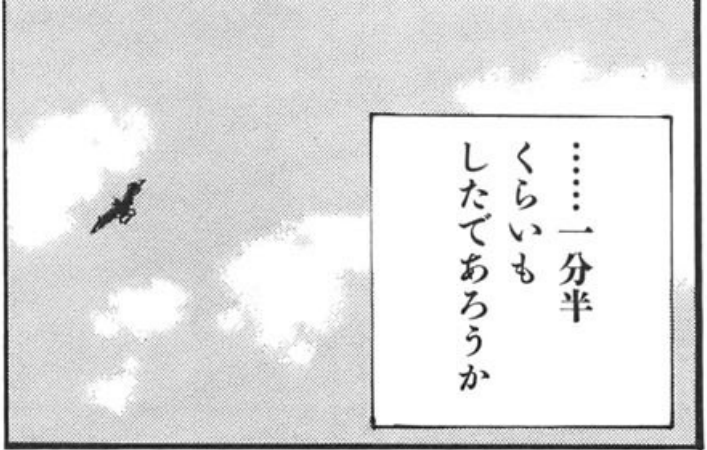
その
太い柱は
三百メートル上空の
円筒の底面全体から
下りて来ていた

光線の束が
垂直に
地面に放射
されて

円盤を
すっぽりと
隠してしまっ
たのだ



驚くべし
円盤は見えなく
なっていた



……一分半
くらいも
したであろうか



上昇して
行ったよ

周りは
真っ青で

何も見えな
かったが

手探りで
UFOの
端に触れた

それは
上に動いて
行った…



光柱の中にいた
一人は上空を
指さした

見上げると
真ん丸な
円筒型UFOの
下面に同心円状の
黒い部分があつて

急速に
丸く縮むのが
見えたが

たちまち
黒点と化して
それは消えた

カメラの
絞りと同じ
構造じゃ
ないかしら

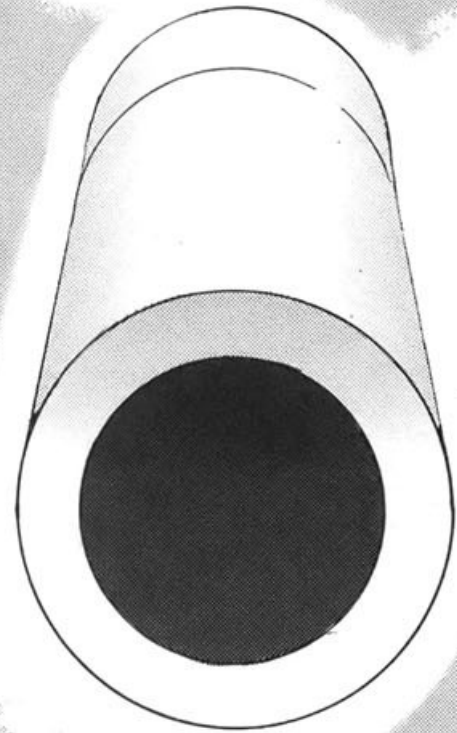
それから
閉じたの
だろうね


うん
穴があいて
UFOを収め

UFOの
上昇を僕らから
隠すため……

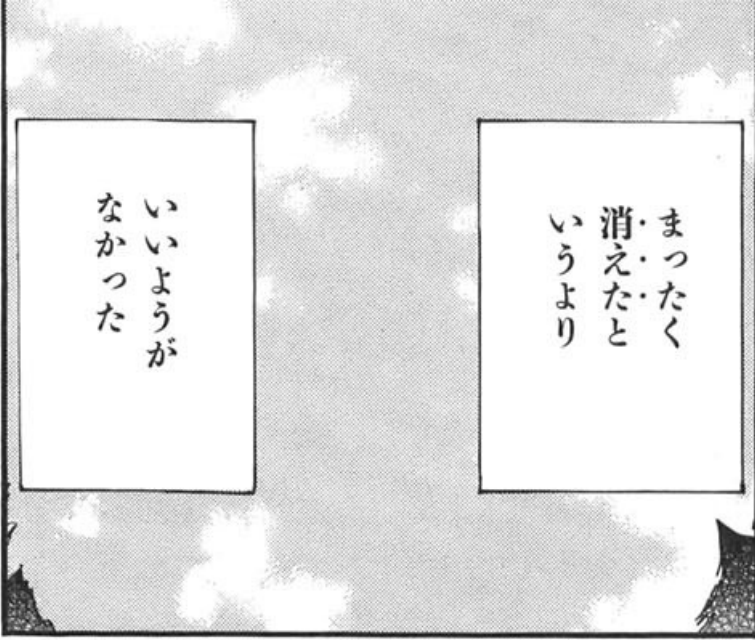
今の青い光は
何だろうか？

あッ






やっ
消えた!



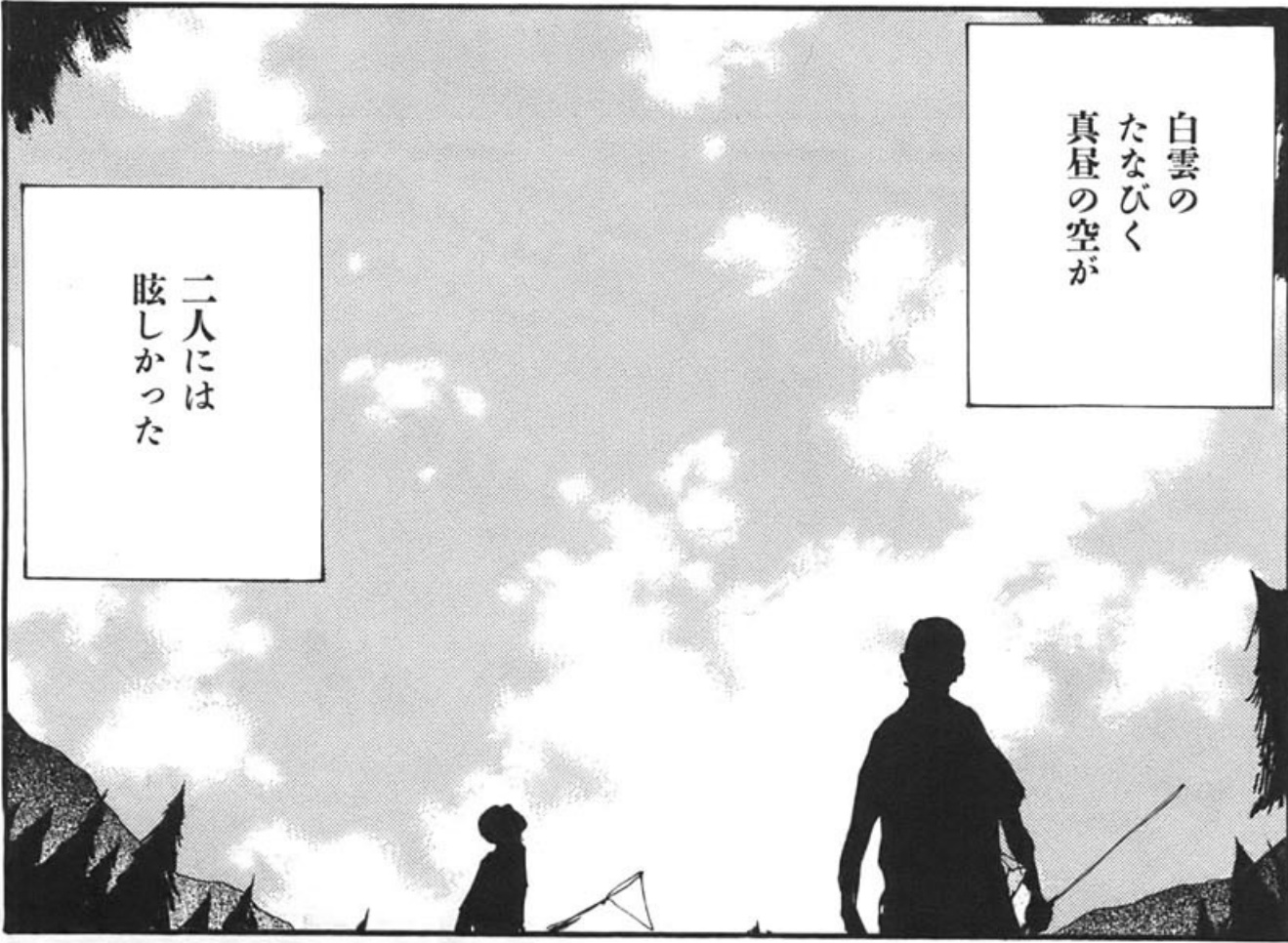
まったく
消えた
というより

いいようが
なかった



円筒型UFOは
見上げていた
二人の目の前で

忽然と
消滅して
しまったのだ



白雲の
たなびく
真昼の空が

二人には
眩しかった



呆然と佇立する
二少年の顔を



蜘蛛糸の
ように



ふんわりした
青い糸筋が
なぶった



見回すと
それらの
奇妙なものが

何本も四囲に
漂っていたので
ある



エンゼル・ヘアだ
やっぱり!

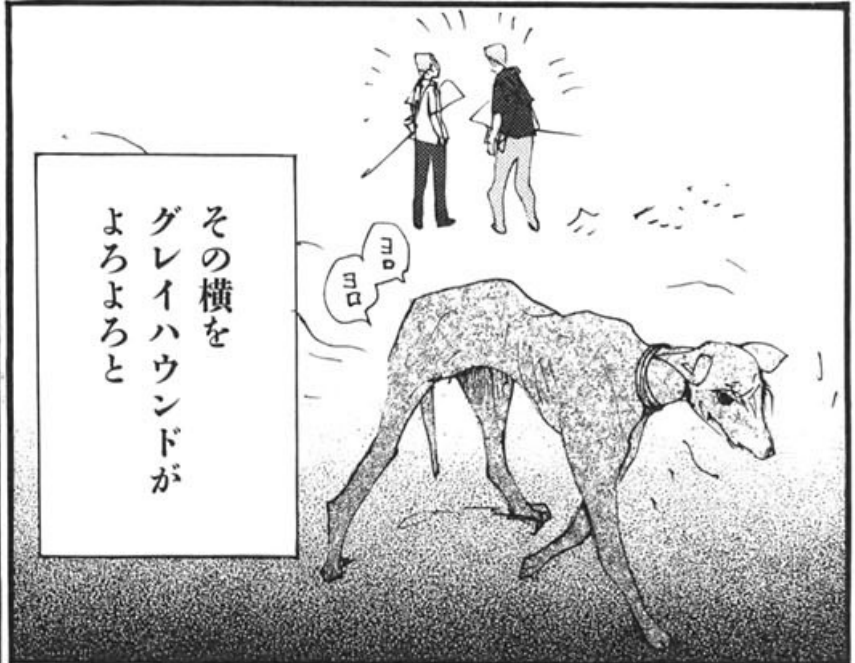
宇宙船
だったんだね

宇宙人に
会いたかった
なア

通り抜けて
ゆくのに
気づかな
かった



夢中で
語り合う
二人は

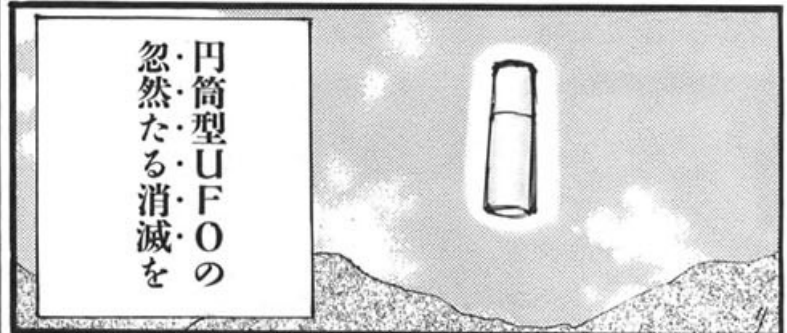


その横を
グレイハウンドが
よろよると

多くの人は
二少年の言葉を
超音速飛行の
見聞を誇張した
表現であると
見た



後になって
彼らが



円筒型UFOの
忽然たる消滅を

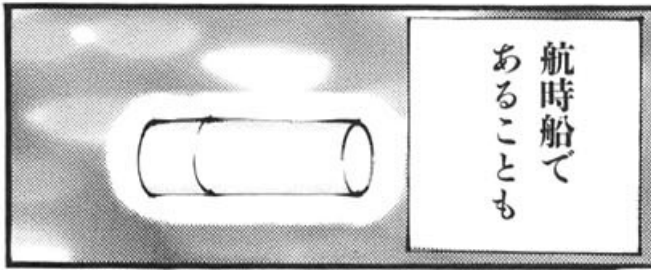


繰り返し
証言した時には

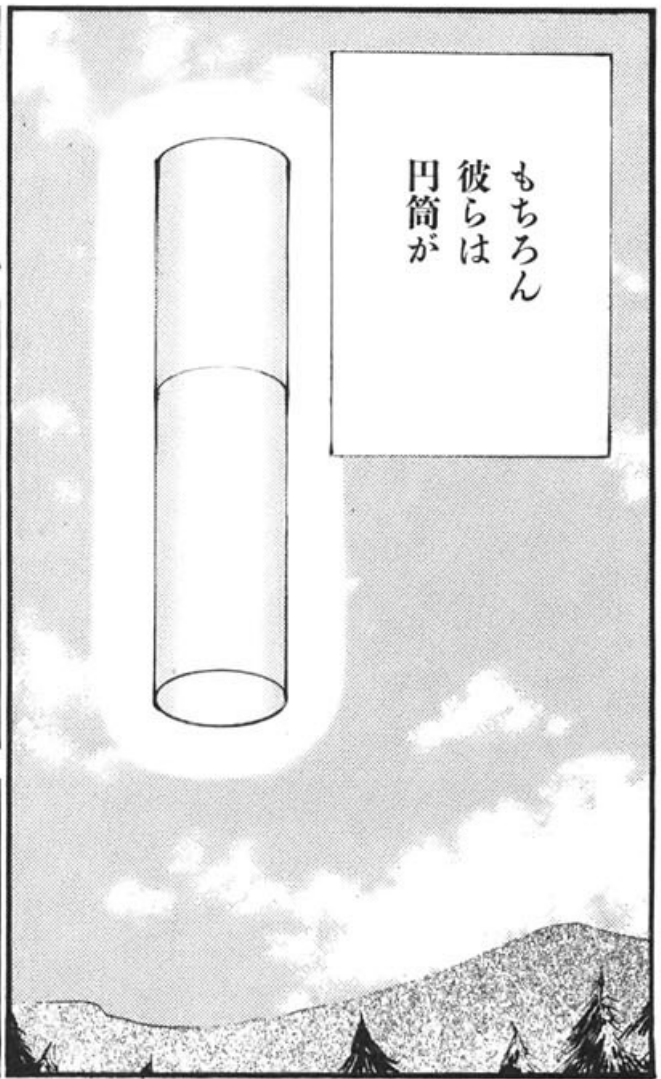


それが
不満だった

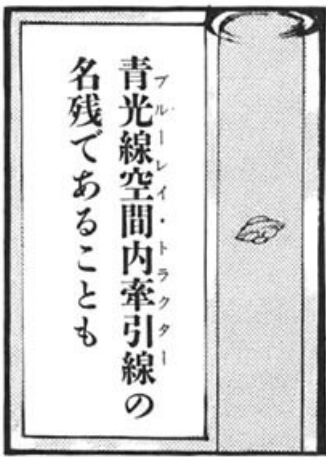
彼らには



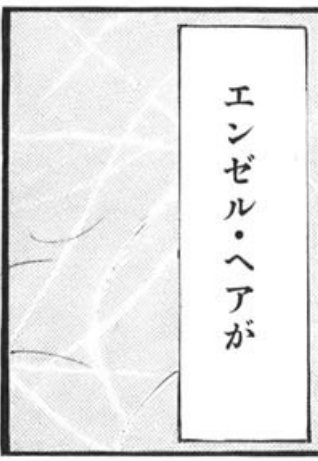
航時船で
あることも



もちろん
彼らは
円筒が



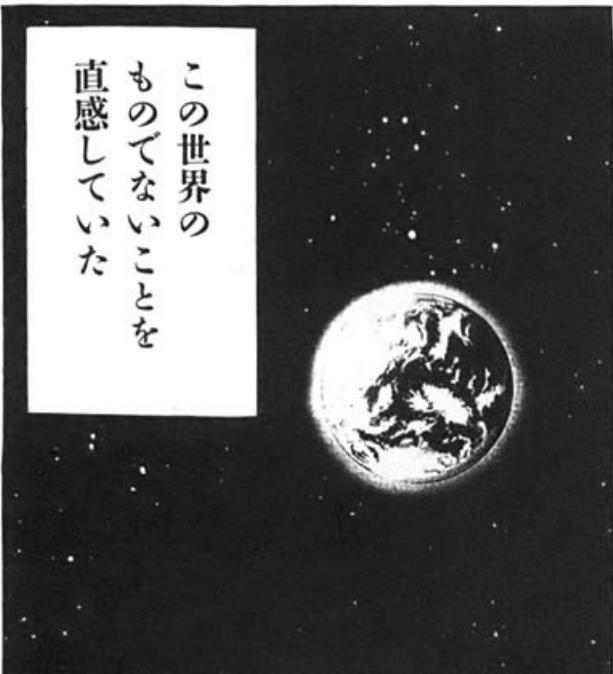
ブルーレイ・トラックの
青光線空間内牽引線の
名残であることも



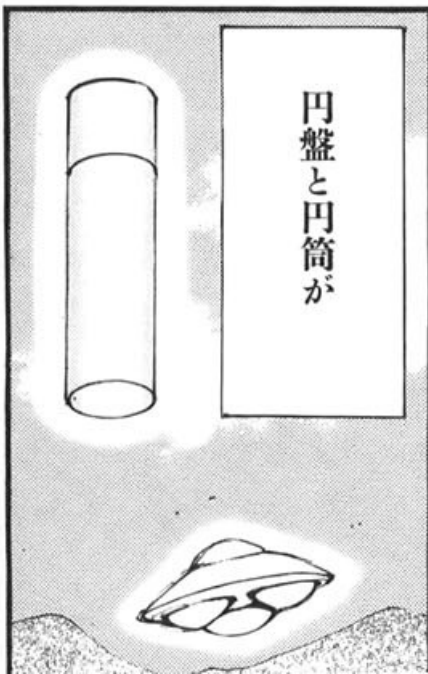
エンゼル・ヘアが



ちつとも
知らなかった



この世界の
ものでないことを
直感していた



円盤と円筒が



しかし
彼らは

89

だから
かれらの報告に
もとづいて



りんいちろう
麟一郎の衣服が
発見された
ことから

宇宙船説が
一転して



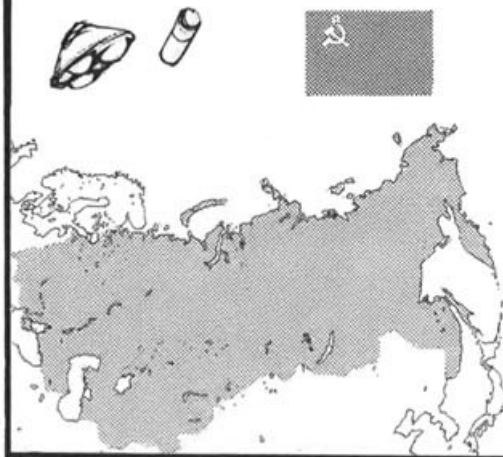
現場を
搜索した
結果



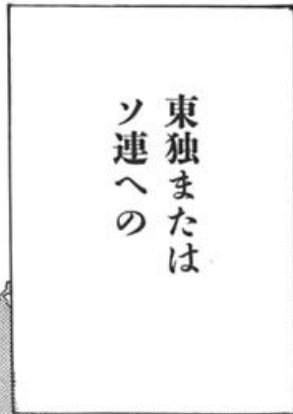
二匹の馬の
死体や



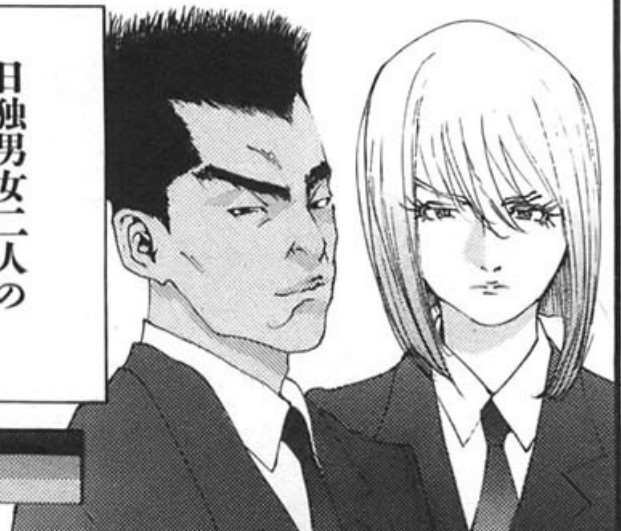
ソ連の
秘密兵器説
となり



東独または
ソ連への



日独男女二人の
不可解な失踪は



逃避行か
誘拐であると
報道された
後にも



この二少年だけは
自分たちが
宇宙船を見たことを
確信していた



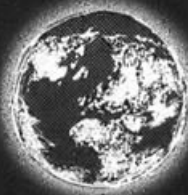
そしてそれは
正しかったと
いわねばならない

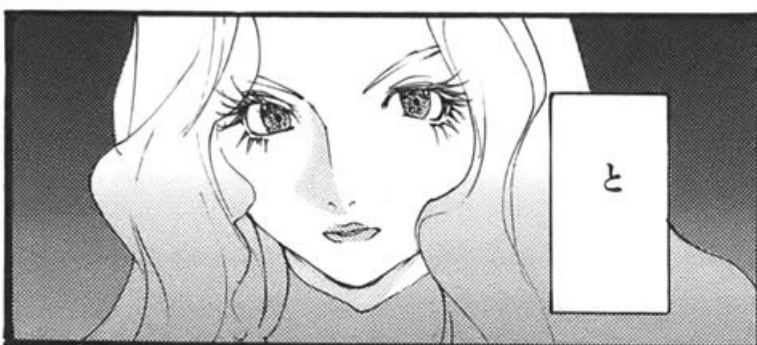
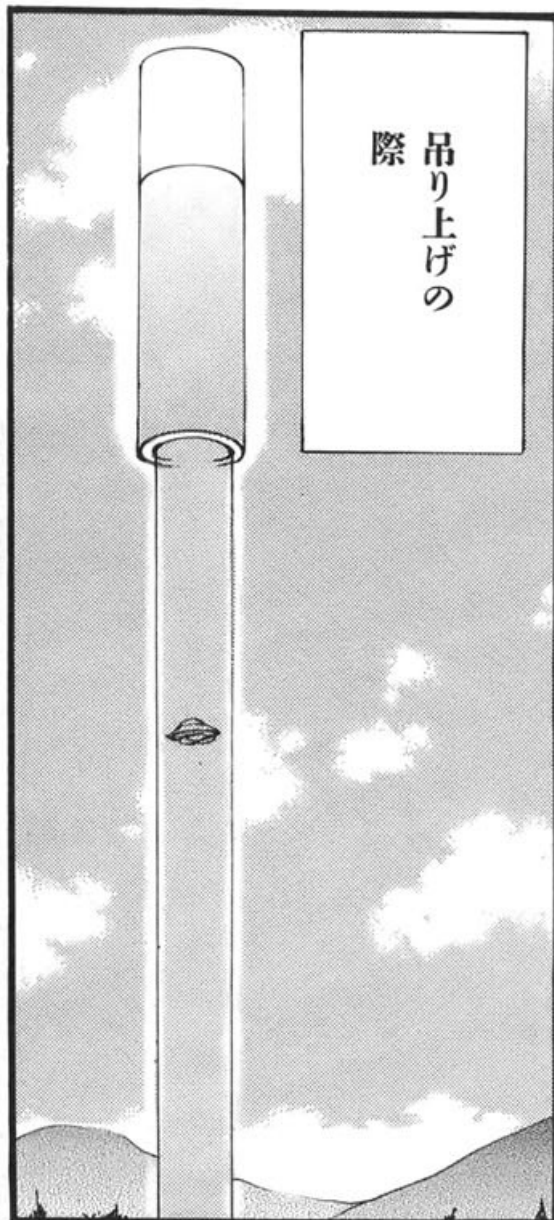
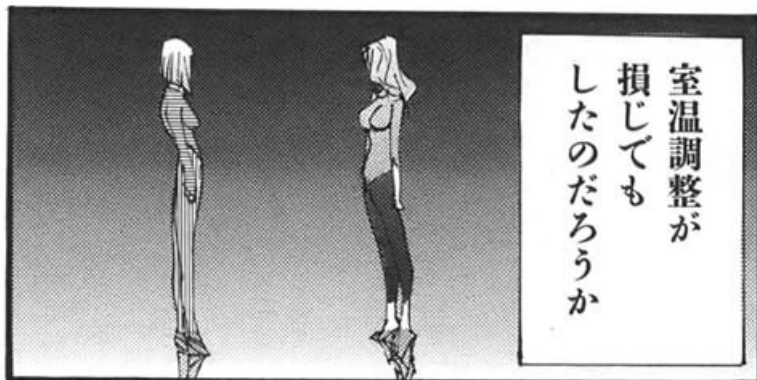
彼らの
想像したような
宇宙人てこそ
なかったが

その
UFOの中に
いたのは

確かに
この二〇世紀の
世界に属する

人々では
なかったの
だから






ドリスで
ある



姉より
背が高く

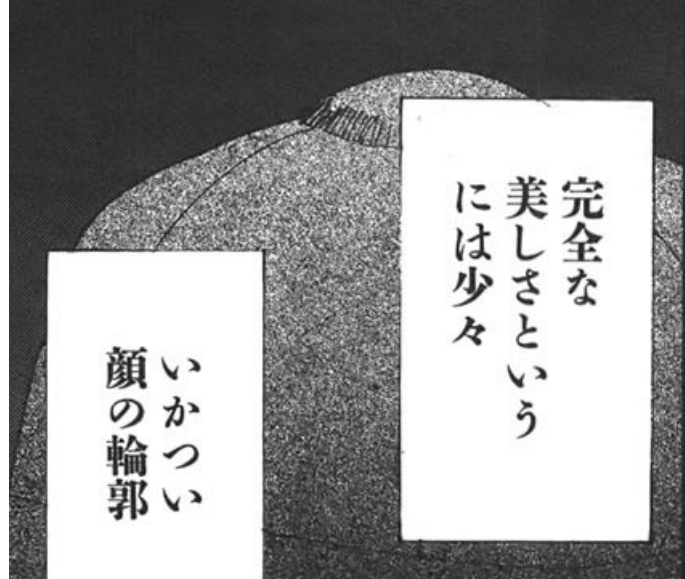


百八十センチ
以上あろう




ふさふさした
金髪を

おおい
隠せず




完全な
美しさという
には少々

いかつい
顔の輪郭




軽快に
チョコンと
かぶりこなした
ポロ帽の底（さき）の
下に




ほとんど
黒と思われる
ほどの

淡い青色の
つぶらな目



表情も
精悍だが



赤い唇は
可愛らしい

横に太目の
縞のはいった

ポロ・シャツが
胸の隆起を
かたく
押えていた

クララが
一時間前に
受像機で見た
時と



同じ服装で
あった



ポロ練習着の
着替えの
暇もなしに

「^{グレイシア}氷河号」に
乗り込んだという
わけであろう

さつきは
見えなかった
下半身は





長い両脚を
ジョツパズ風の
乗馬ズボンに
包み

ブーツ
長靴を
履き

右靴の
胴に鞭を
差し込んで

柄が上に
見えていた



洗靴奴の
涙で
洗う



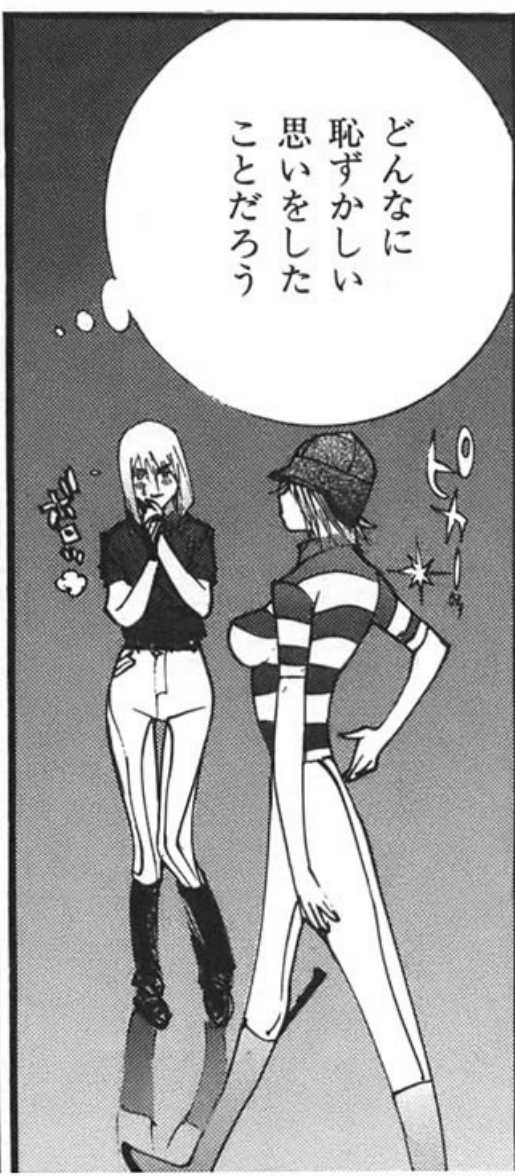
皮革は
薄紅色に

底光りする
見事なもので



ベガスレザ
天馬皮革
などとは
知らぬ
クララにも





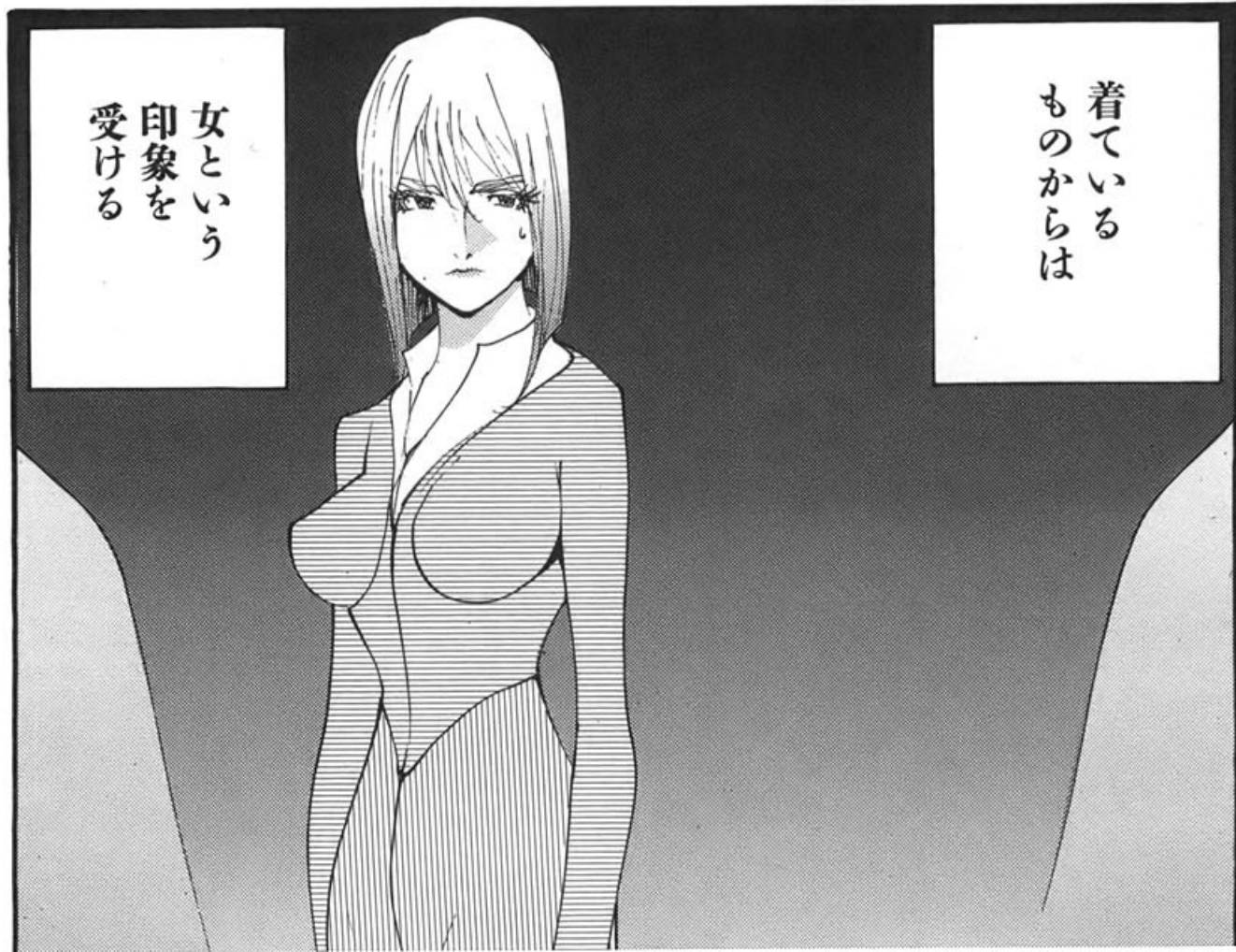
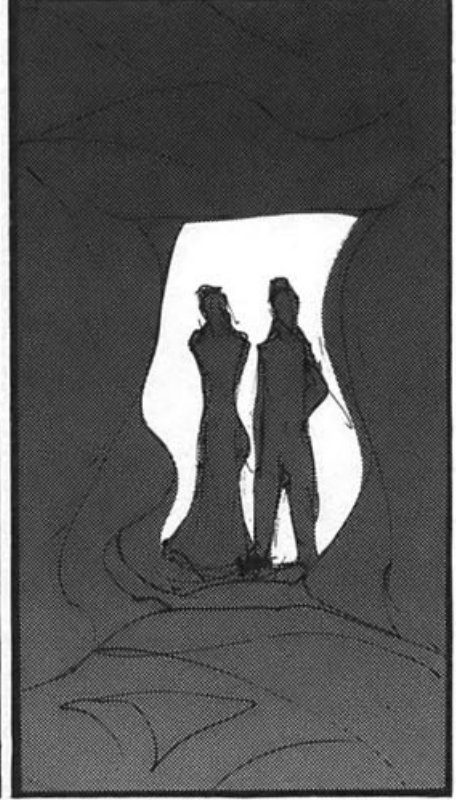


男か
女か

続いて
二人
はいつて来た



クララは
思わず
戸惑った



女という
印象を
受ける

着ている
ものからは

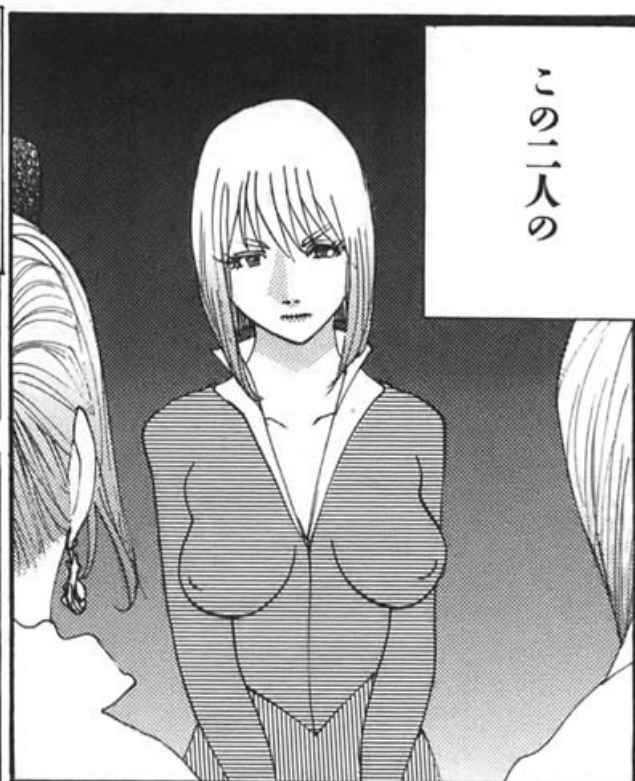
ドリスは



マニキュアを
していないのに



この二人の



爪は

どちらも
派手な色の



エナメルを
塗られている




一人は
キモノに似た



前合わせの
ロング・ドレスを
着ているが

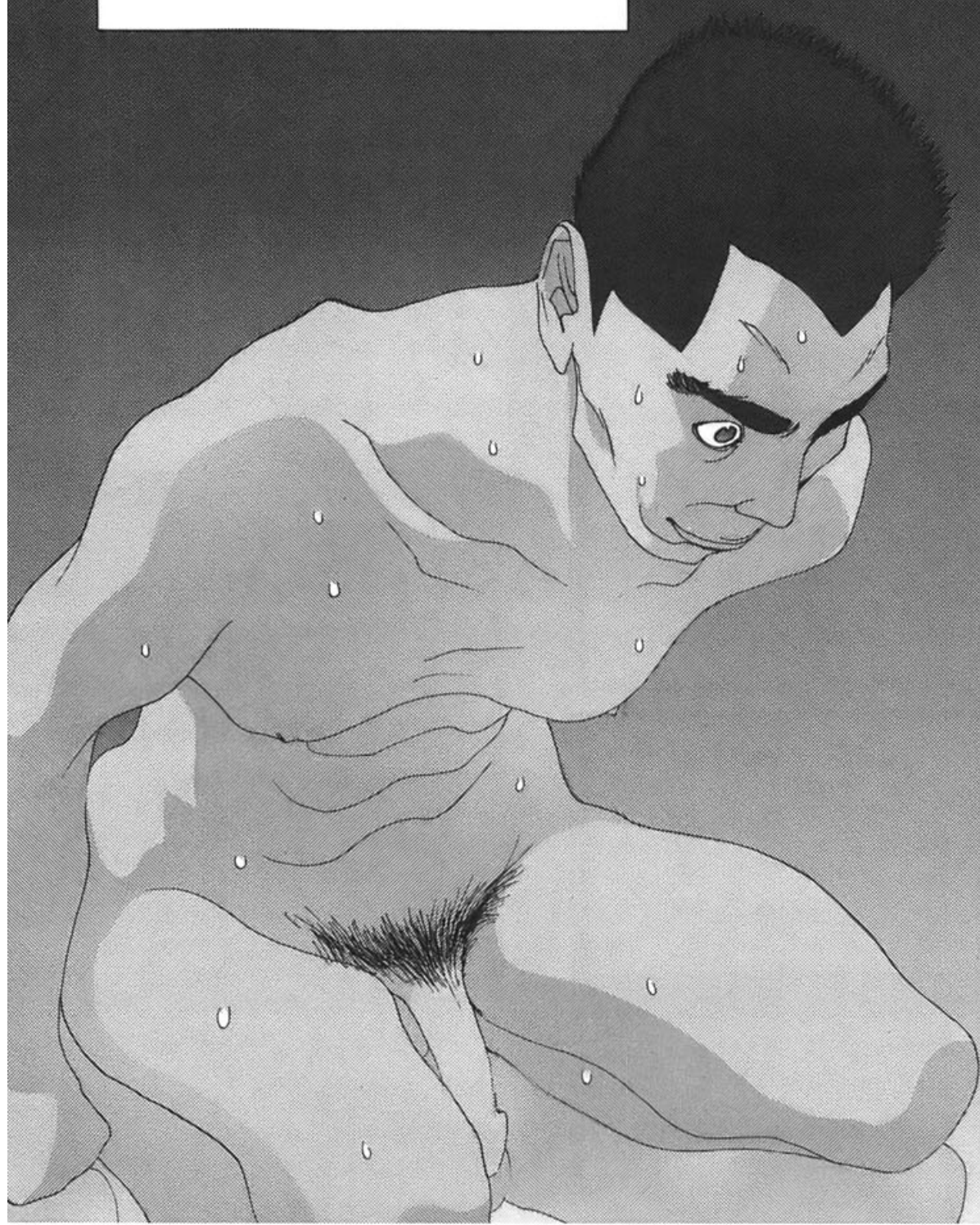
床に
達するほどの
長いスカートに
花模様があり





床を向いたままの
隣一郎の視界の
すみに
これが映った時

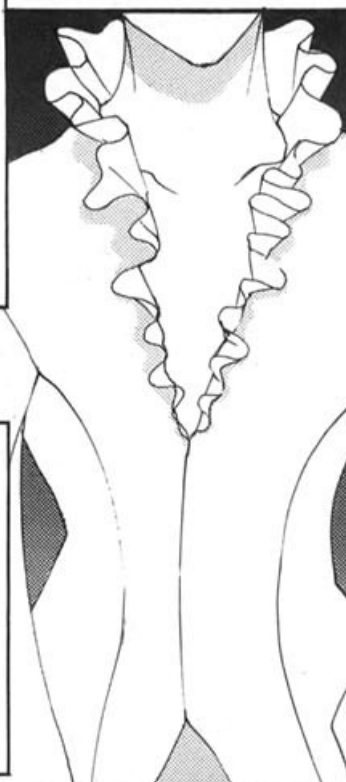
彼はキモノを着た
日本婦人と
錯覚したくらい
だった



もう一人は
下はズボンだが
派手な色だし



上半身に
まよっているのも
二〇世紀人の
通念からすれば

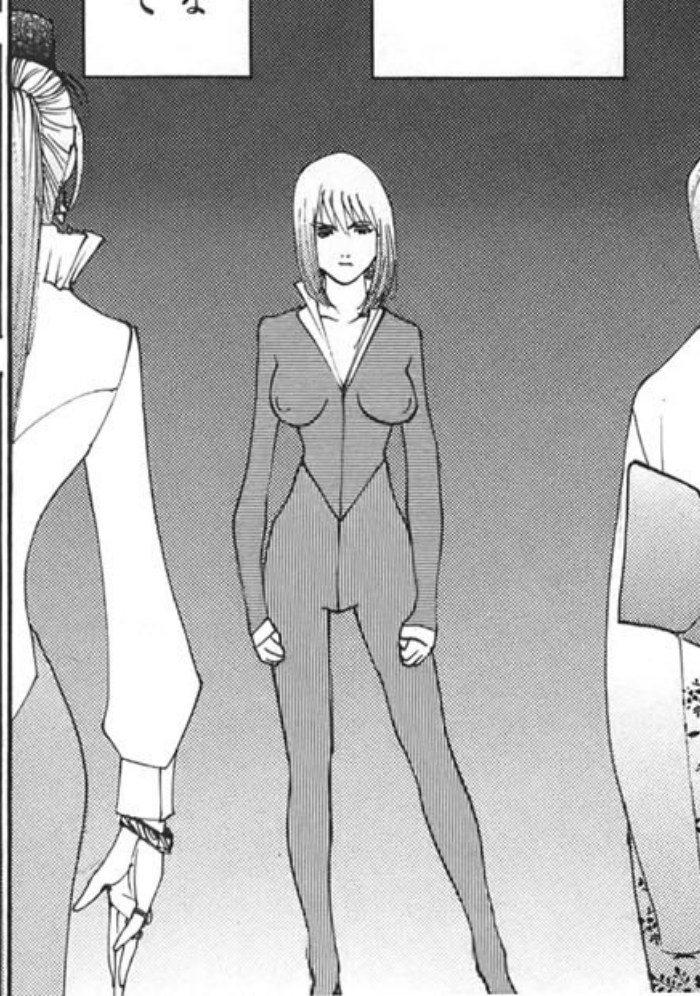


婦人用
ブラウスとしか
思えぬもので

ドレッシーな
感じが

クララが
借着している
服の

スポーティーな
簡素さと比べて



はるかに
婦人服らしい



前者は
金髪を**べんぼ**の
ように編んで

顔の両側に
垂らし



後者は
濃い亜麻色の
髪を伸ばして
後頭部で
一縛りした
だけであつたが
頭の上に
トーク帽風の
小型の帽子を
載つけた
粹な姿で
ある

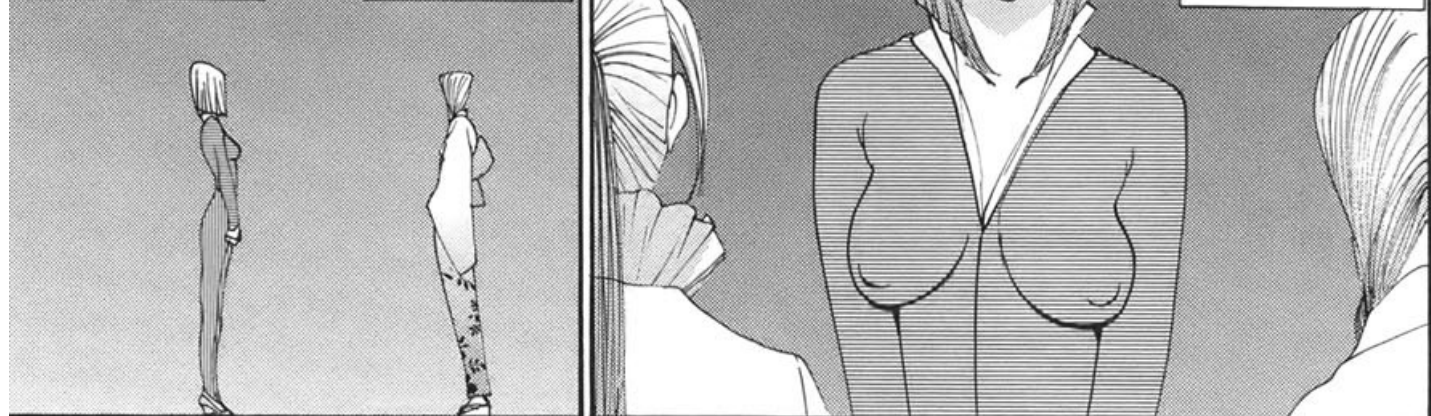


服装や髪型が
婦人を
思わせるにも
かわらぬ

顔や
体の感じは
男性的だった

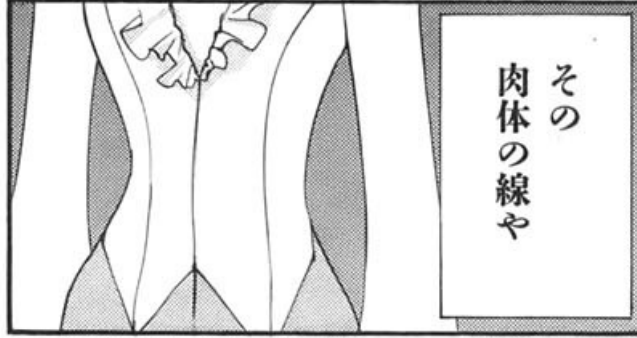
キモノ姿の
ほうは
クララより

少し
背が低い
が



ズボン姿の
ほうは
百八十五センチも
ありそう

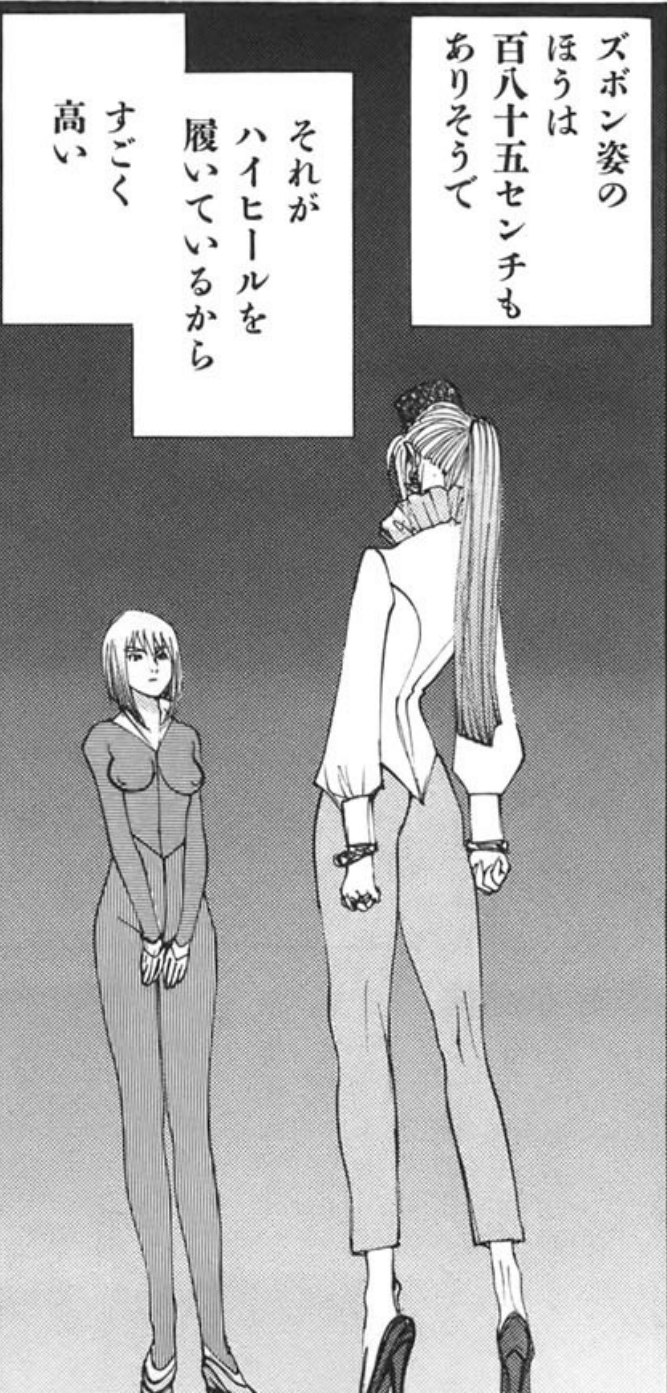
それが
ハイヒールを
履いているから
すこく
高い



その
肉体の線や

衣装の下に
うかがわれる
たくましい
筋肉は

明らかに
男性のものに
違いなかった



ズボンの
股のあたりも
むっくりと

ふくらんで
いる



顔も
整っていた

金髪のはうは
一見して

ポーリーンや
ドリスの同胞と
わかる

細く濃い眉
長い睫毛

肌は玉貝か
乳色の
琥珀のようて

髭も
ないのだが

格好よい
とがった鼻

引き締まった
口元の薄紅色の
唇

やはり
男の顔て
ある

亜麻色の
髪をした
ほうは

単に
美男子という
点では

前者に
劣るかも
しれないが

それだけ
個性的な
顔立ちで

しかも
若さに
あふれている

濃い
多少迫り気味の眉

大きな
灰色の明るい
目

驚の嘴の
ような
鋭い鼻

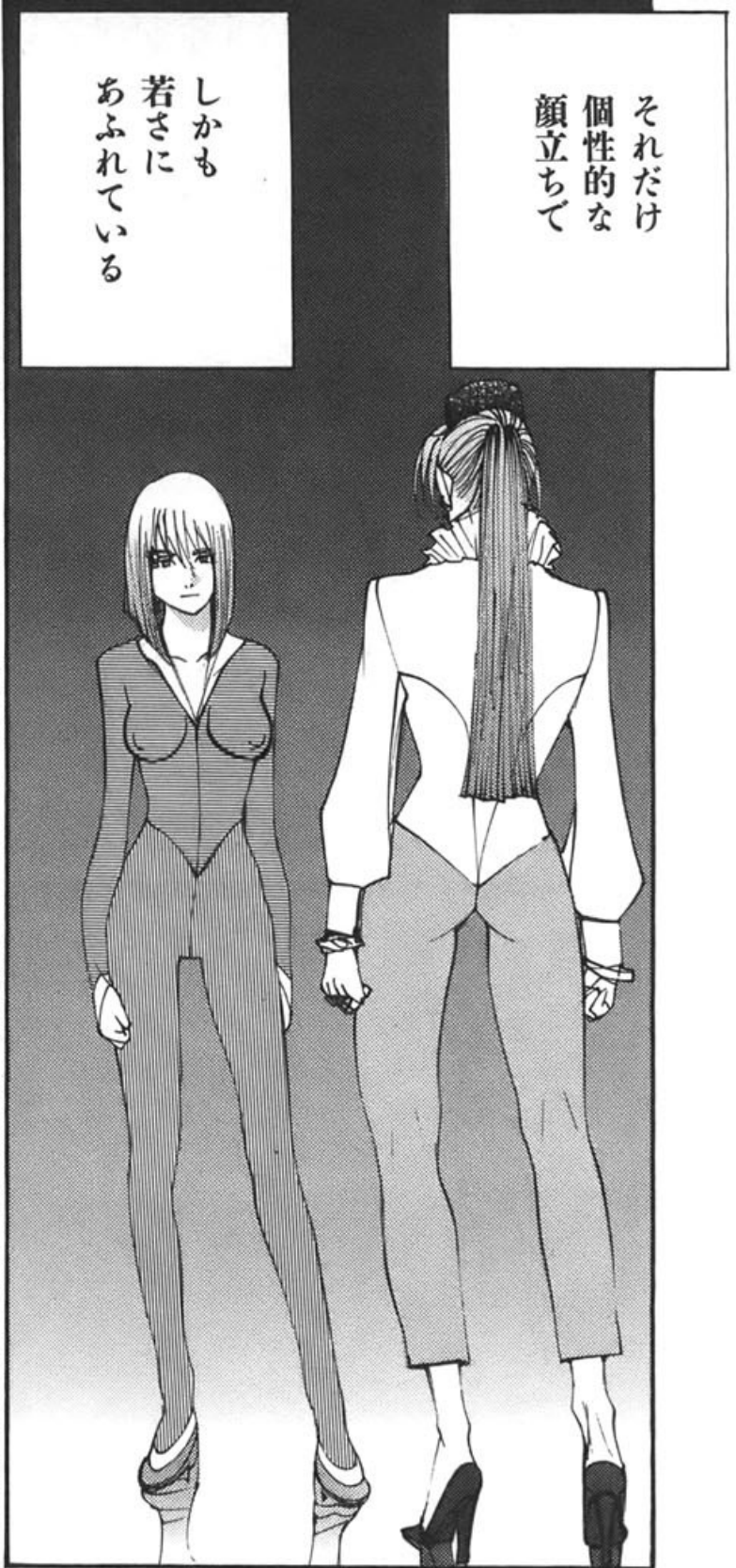
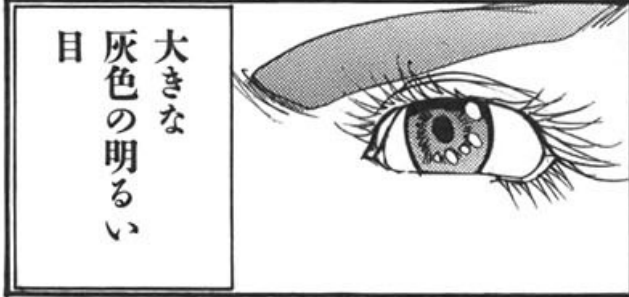
日に焼けて
赤らんだ
肌

やはり
美青年と
いえよう

前者には
服装に
ふさわしい

女性的な
物腰が
あったが

後者は
そうではない



もつとも
軽く
微笑んでいる
表情の
柔らかさは

クララの
目には
男よりも

女の
ものに
見えた



年は
どちらも

二十代には
違くないが

後者の
ほうが若いて
あろう



男か女か



男の
服装の
奇妙さを
風俗の
違いとして
受け取って
しまえば

それほど
倒錯的な
感じでは
なかった

半男半女の
ように



肉体的な
変態では
ないから



態度こそ
物優しいが

体は
とことんまで

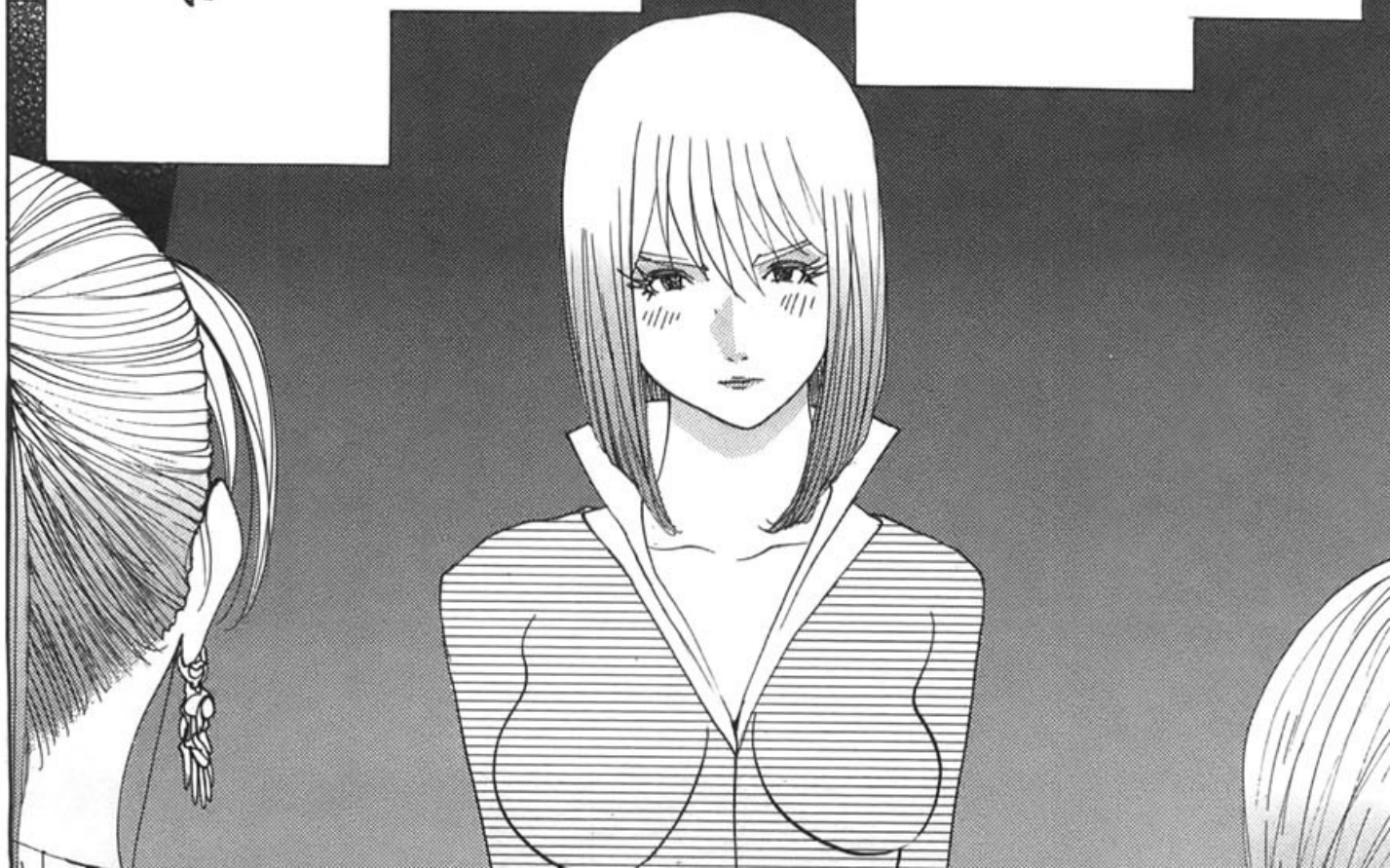
男性なのだ

男も男

クララは
こんな
魅力的な

男性が
二人もそろって
いるのに

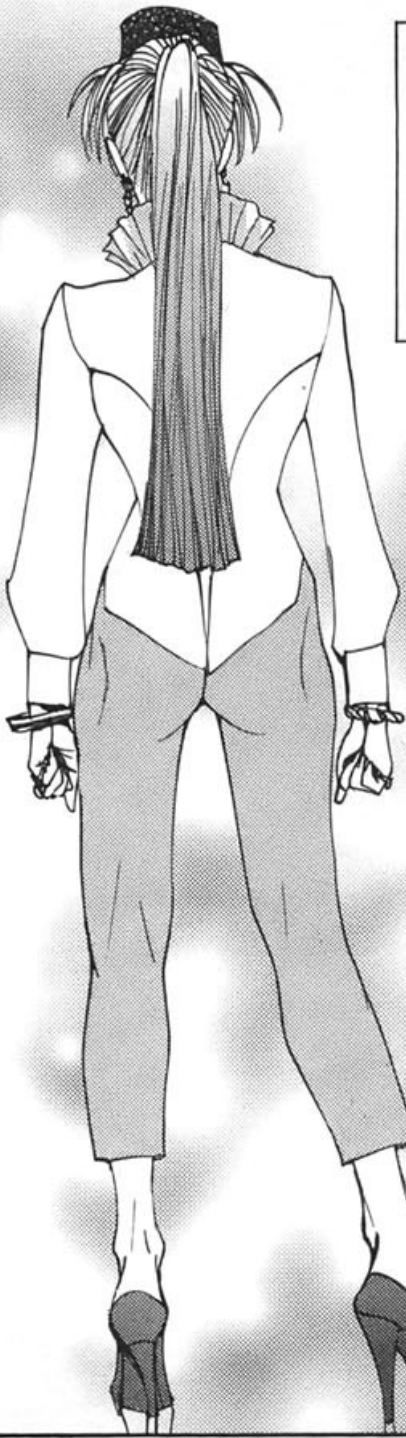
出会った
ことがない



ことに
年若な男の
態度には



それだけ
この男のほうに
気をひかれた



前者に
比べて



女性的な
ところが
少なく

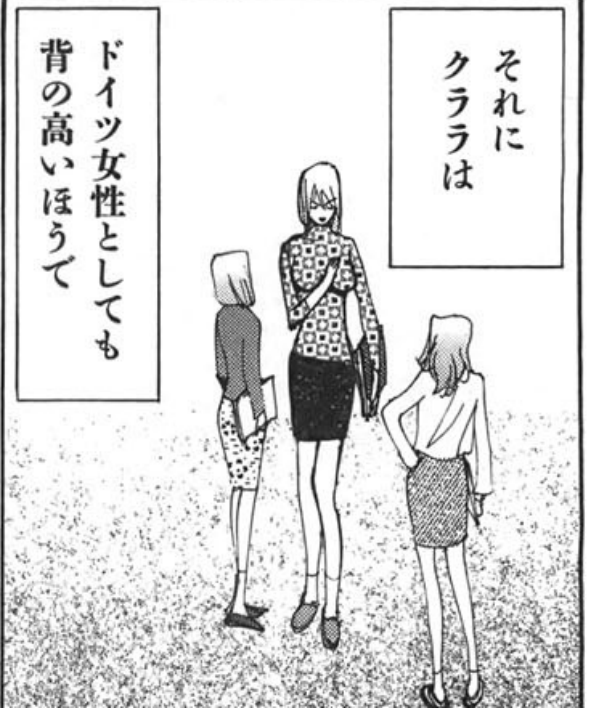


二〇世紀の
婦人である
クララは



それに
クララは

ドイツ女性としても
背の高いほうで



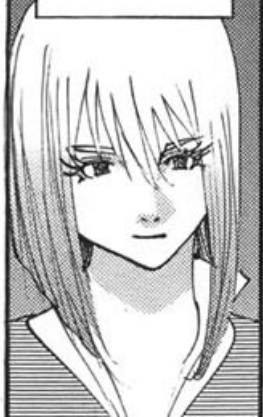
高過ぎる
ことに
コンプレックスを
持っていたが



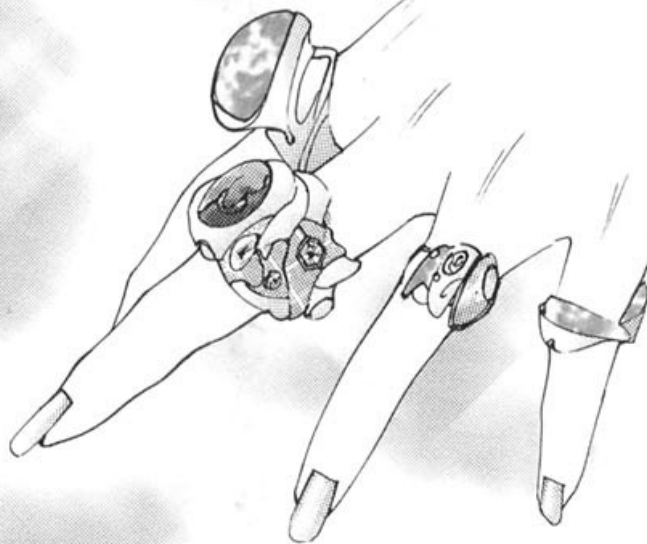
ポーリーンも
ドリスも
大きいのに



心が
安らいだ



男女
それぞれに
指輪をして



見事な
宝石を
つけている

ただ
男二人が
腕輪



女は
していない

ポロ服装の
せいだろうか？



一人は
耳飾りまで
してるのに



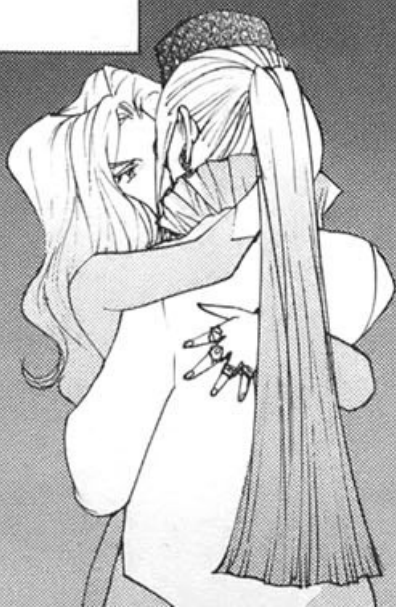
三人は
こもごも



ポーリーンを
抱擁し



キス
接吻して
祝辞を
述べたが



そのたびに
それぞれ
よい匂いが

クララの
鼻を打った

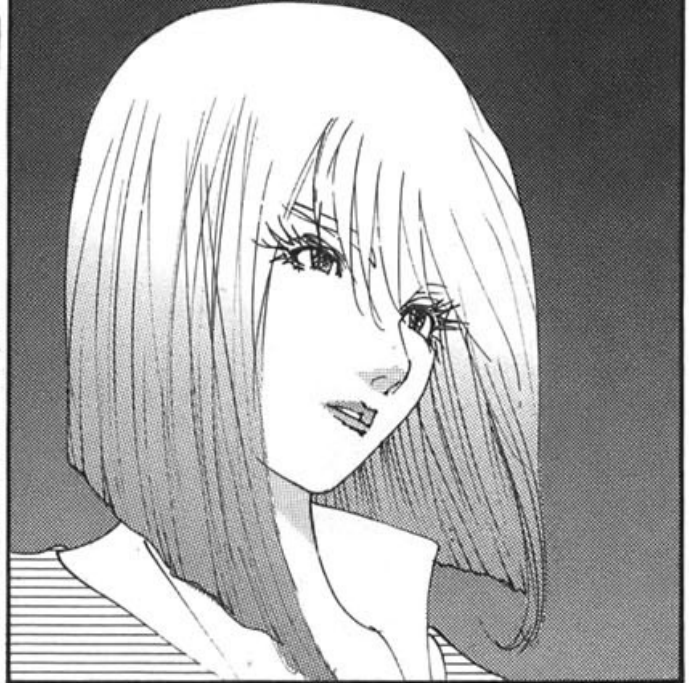
一人一人が
違う香水を



使っているの
だろうか？



それとも
体臭
だろうか？



だが
あまり
不思議そうな
顔は禁物



イス人と
いうことに



ポーリーンは
三人を
一まとめに

次々と
紹介した



なってるの
だから……



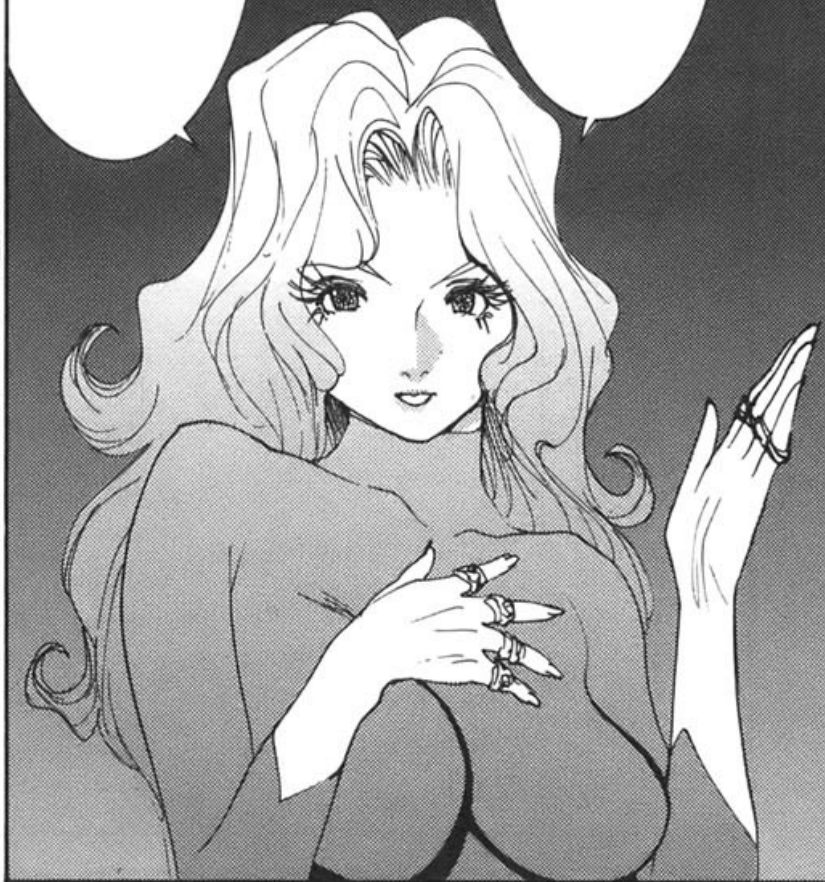
クララ嬢さん

ご紹介
しますわ

こちら
妹の

嬢ミスドリス・ジャンセン

まだ
ティーンエイジャー
十代娘よ



スポーツ狂で
ポロの正選手

次の
オリンピック
では

※
五種競技の
金賞を取るんだって
がんばっている人よ



※ 二〇世紀オリンピックで近代五種といわれたものに当る

その横が
兄のセシル



※ 昔の英語では伯爵はearlであり女伯爵はcountessであったが今では女がアール、男がカウントと逆になっている

結婚して

今は

※アール
伯爵

メアリ・ドレイパアの
忠実なる夫君ハズ

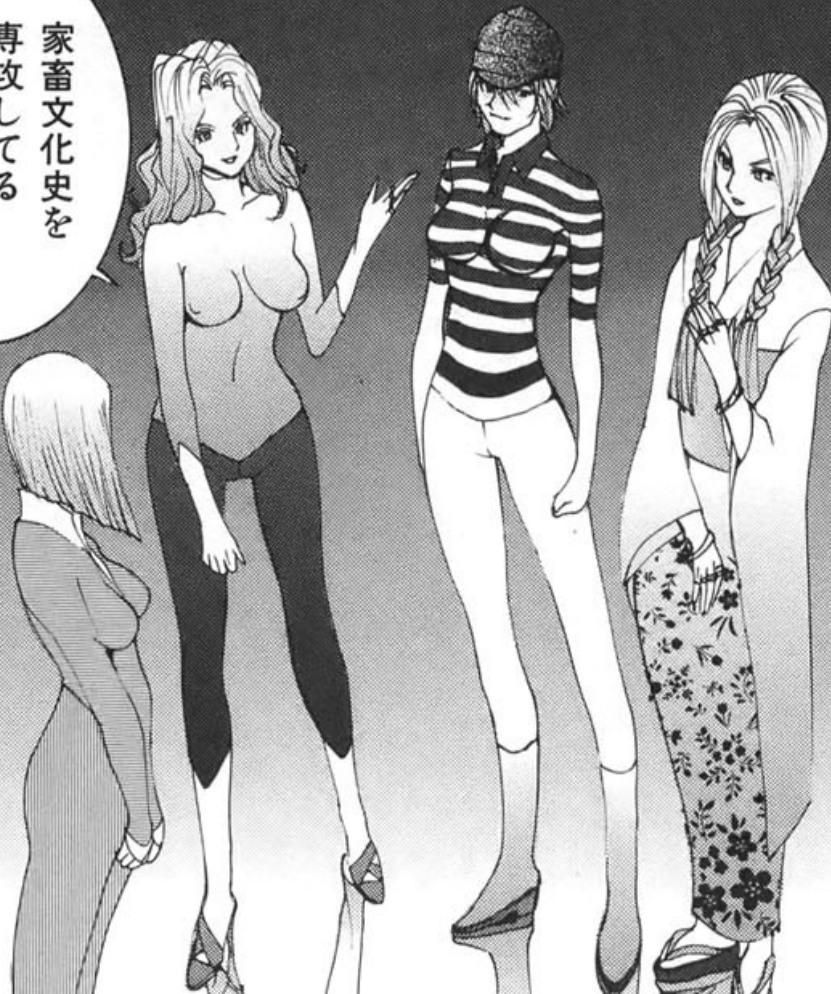
家畜文化史を

専攻してる

学者よ

古代語も

強い



ご主人の
卿^{シイ}ドレイペアは
国軍中堅幹部で



卿^{シイ}ジャーゲンの
参謀

※2 インタープラネタリウム・ウォアゲーム
惑星間戦争競技会の
カルー代表軍にも
選ばれたことのある人

※1 宇宙帝国中央軍司令官・地球都督大将・公爵セオドラ・ジャーニンガムの通称。後章で詳述する

ドレイペア伯爵家も
古い家柄だわ

そっちが

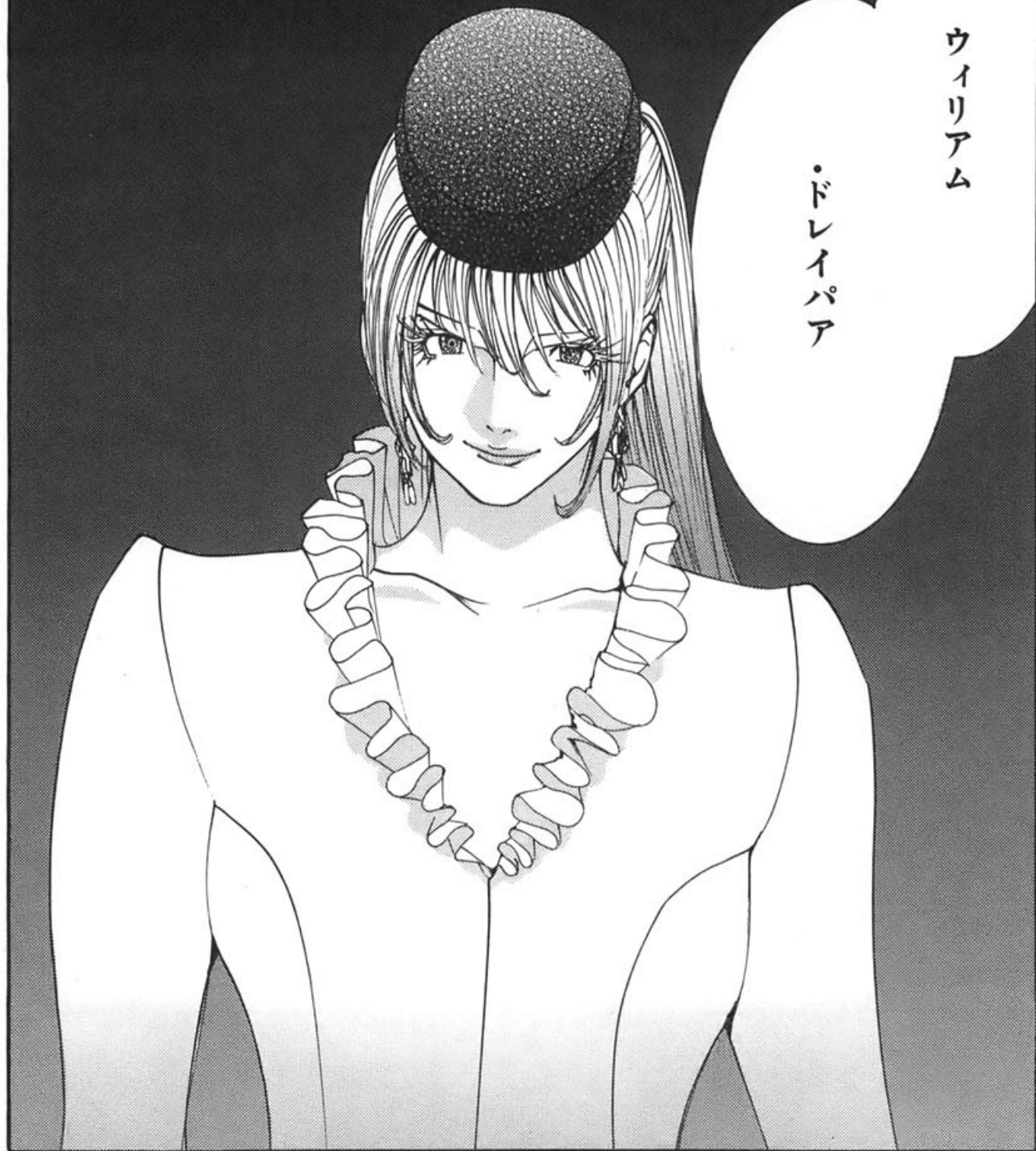
卿^{シイ}ドレイペアの
弟^{オス}の郎

……それから

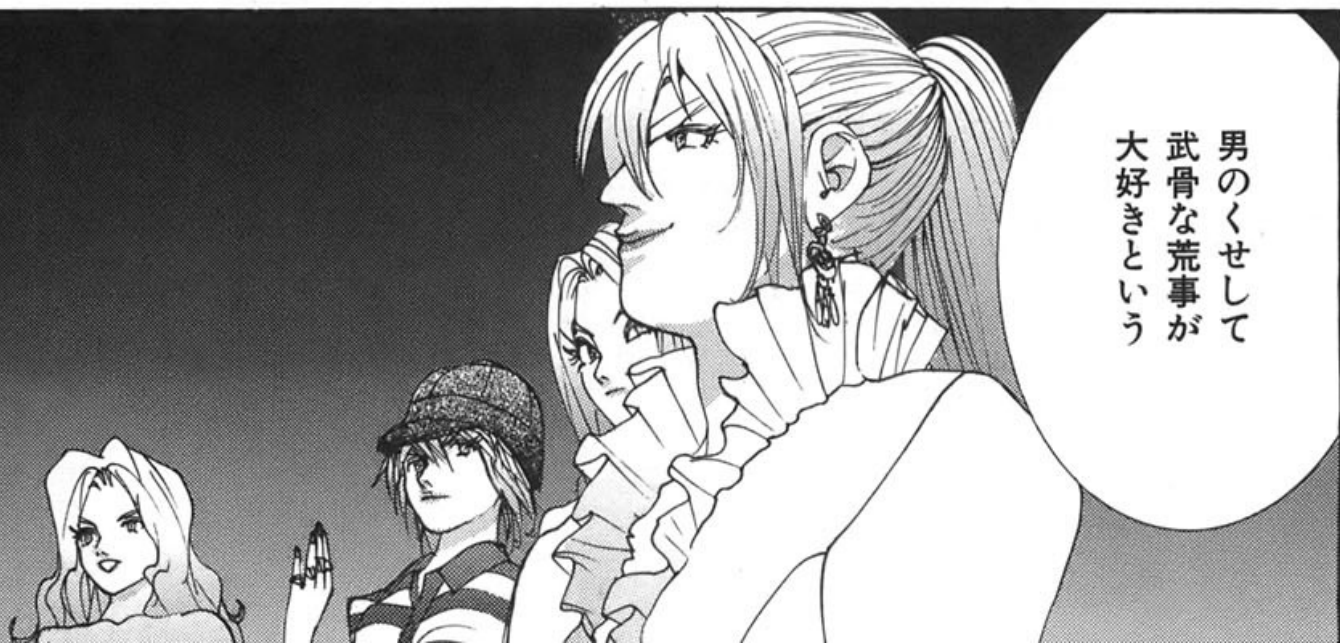
※2 各惑星が対抗してヤブーの兵隊を戦闘させ、戦争技術の優劣を争う競技

ウイリアム

・ドレイパア



男のくせして
武骨な荒事が
大好きという



アベルデー
ン切つての
おてんば青年よ

ピ
トル
黄金虫ラリーの
A級ライセンスを
持つてる

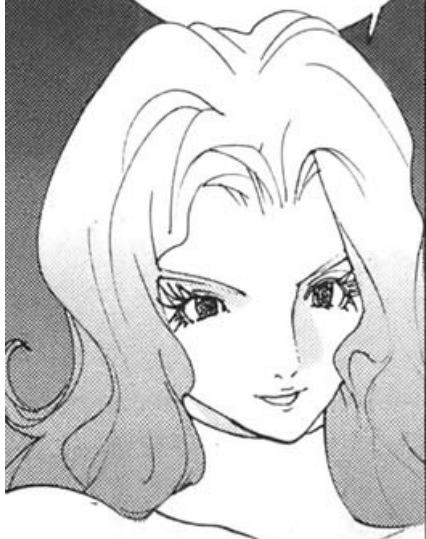


……こちらは
嬢クララ

今日
危ないところを

この方に救って
いただいたの

姓のことは
あとで
いうわ

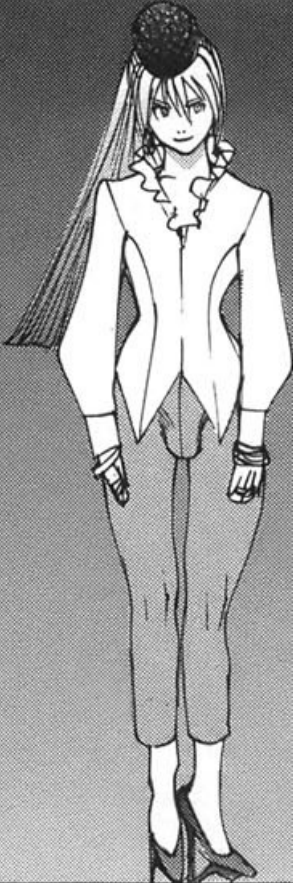


ウィリアムを
称ぶのに
つけられた



オース
郎OSSは
既婚男子に
対する

男子の童貞が
重んぜられる
ようになって
からの
新語である



ミス
夫君と
區別して



未婚男子の
姓名に
冠せられる
ことばで



もちろん
女権制確立後



女子の
嬢



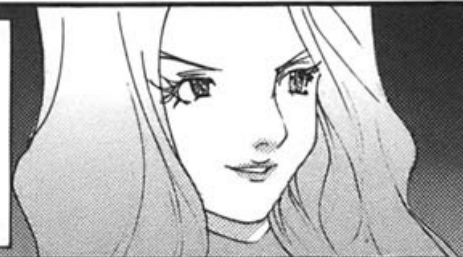
二〇世紀の

嬢

夫人に当たる
區別は



昔からの
婦も



男子の
郎

夫君である



慣習で
用いられて
いるが



爵位を
離れて
いえば



男は
セシル・ドレイパア
と

女の姓を
名乗る



メアリ・
ドレイパア嬢と
セシル・
ジャンセン郎が
結婚して



婦アンド夫君
メアリ・ドレイパア
となる



婦と夫君とが
昔の
氏と夫人に

婦 ミセス

夫 ミスター

氏 ミスター

夫人 ミセス

相当
するのである



クララは



一人



一人と



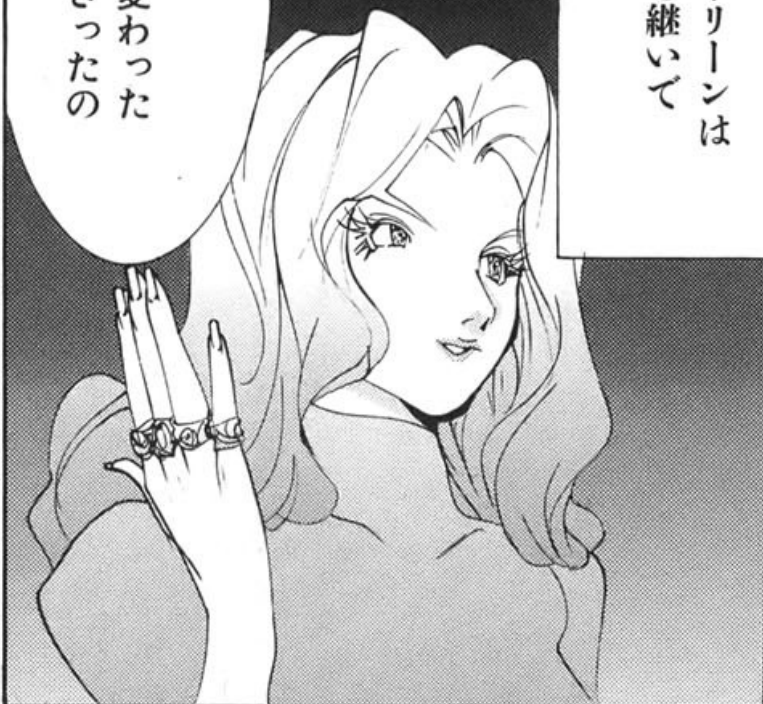
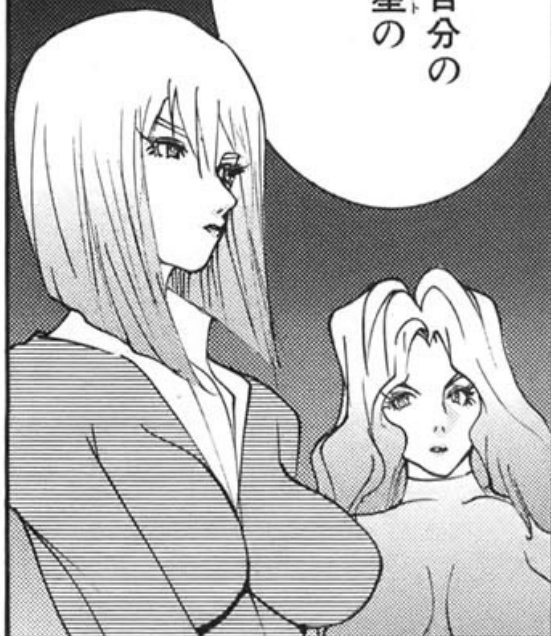
握手した



ポーリーンは
語を継いで

こちら
とても変わった
体験なさったの

そのため
今でもご自分の
姓や生国星の
記憶が
なくてね



三人は
異口同音に
叫んだ



えッ
記憶が
ない？



ポーリーンは
手短かに
事の経緯を
説明した



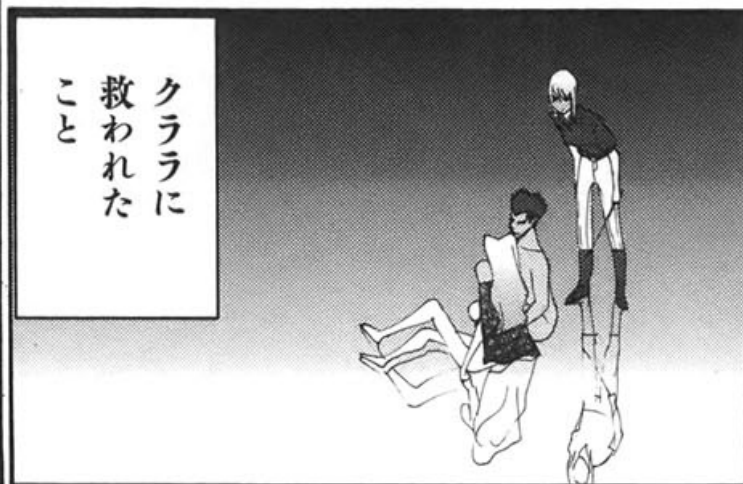
墜落のこと



ヤプーを
連れて
いたので



クララに
救われた
こと



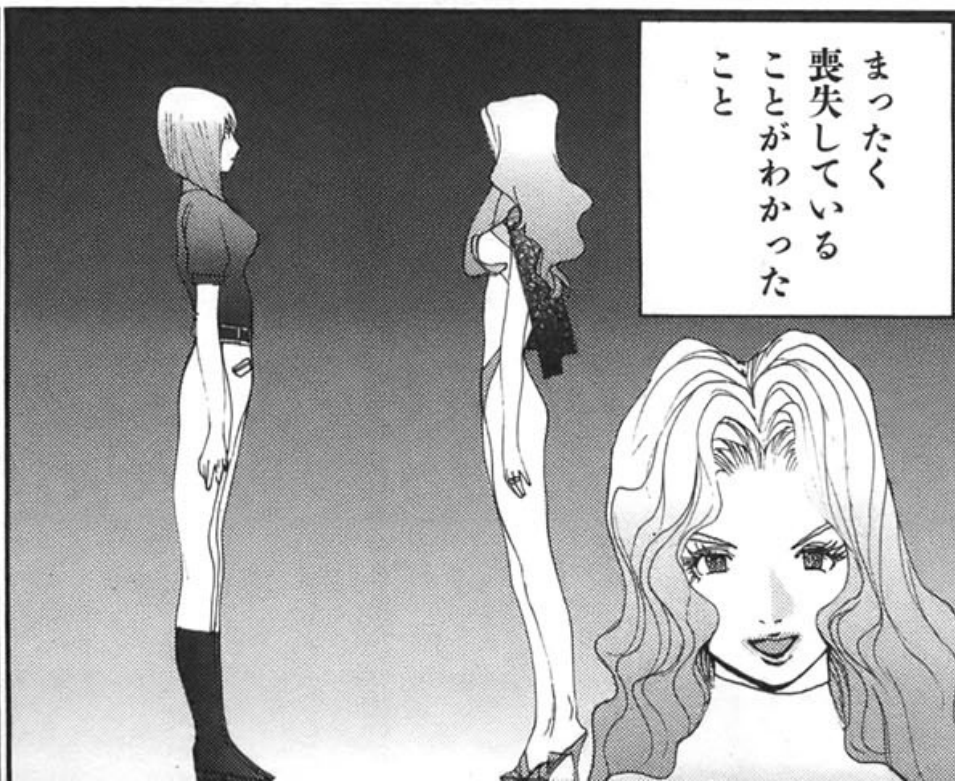
イース人と
知って
話したところ



相手は
過去の記憶を



まったく
喪失している
ことがわかった
こと

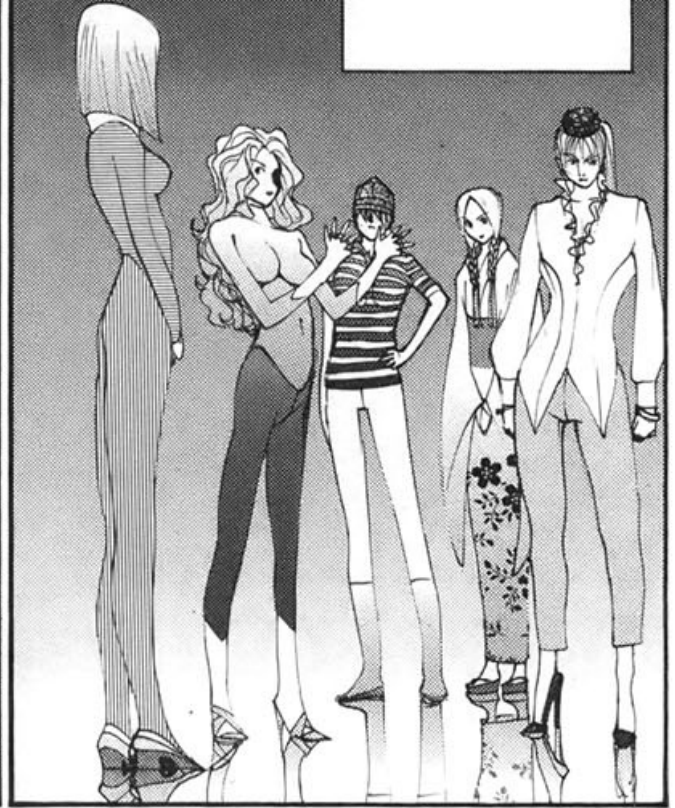
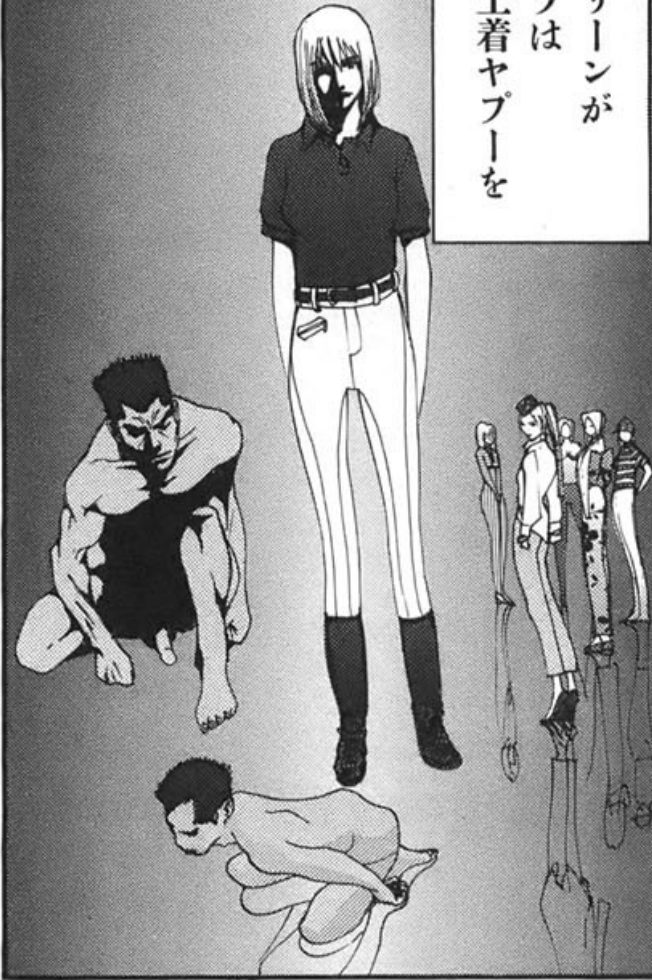


ニューマが
ヤプーを
咬んだこと



…先ほど
打ち合せた
とおりの
ことであつた

ポーリーンが
クララは
この土着ヤプーを



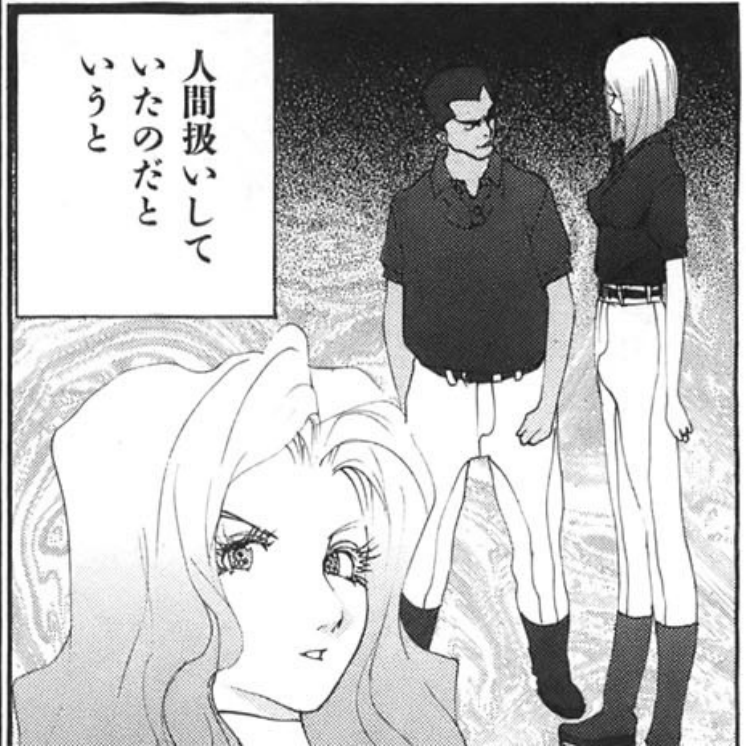
ヤプーと
思わず



三人は
吃驚し



人間扱いして
いたのだと
いうと



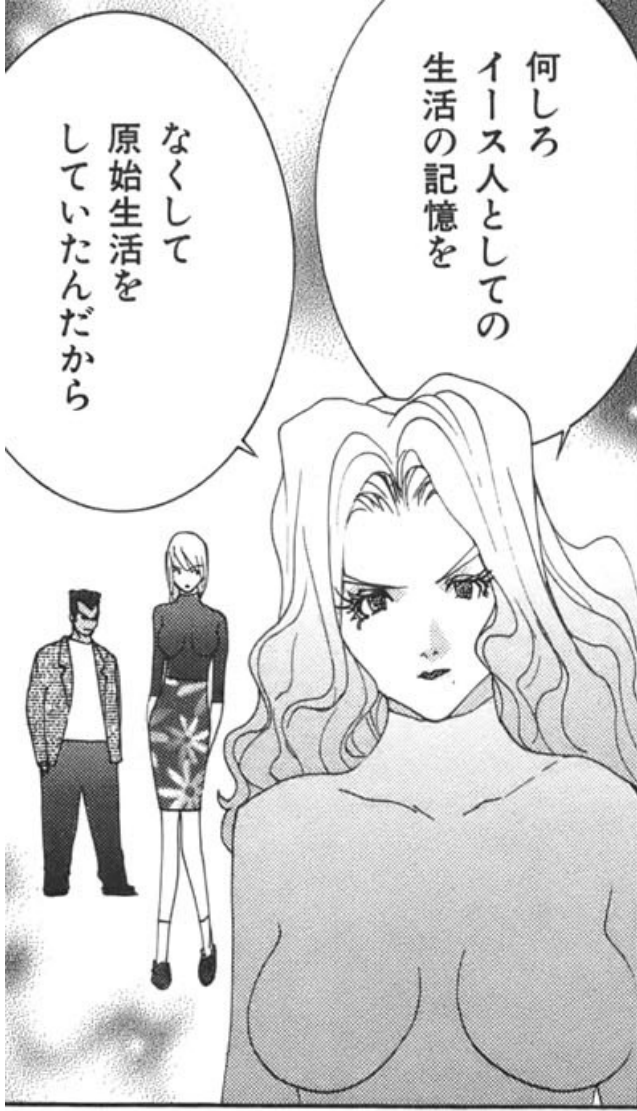
無遠慮な
ドリスなどは
失笑して



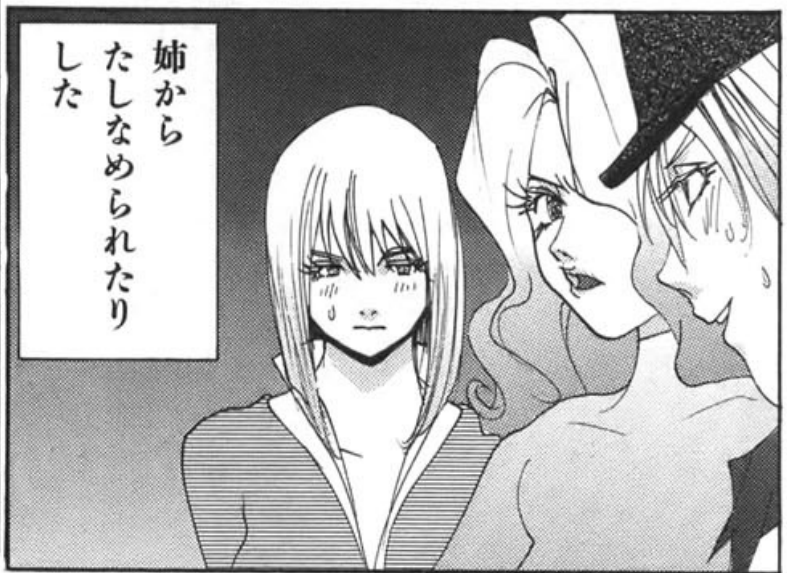
55

何しろ
イース人としての
生活の記憶を

なくして
原始生活を
していたんだから



姉から
たしなめられたり
した



そのつもりで
彼女の
身にもなって
あげなくちゃ

ポーリーンは
大声でそう
いったあと

今度は
クララに
聞こえぬほどの

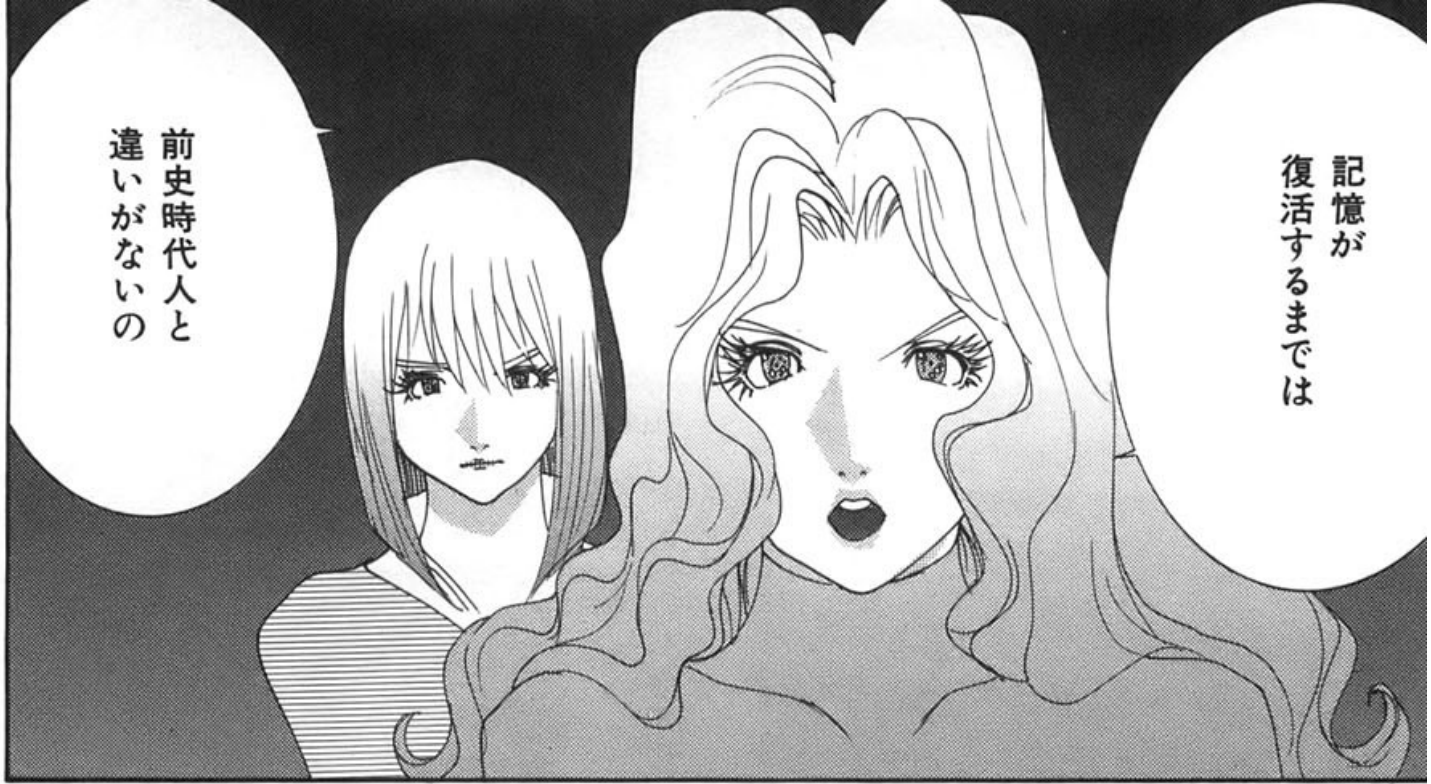


低声で
三人に
ささやいた



記憶が
復活するまでは

前史時代人と
違いがないの



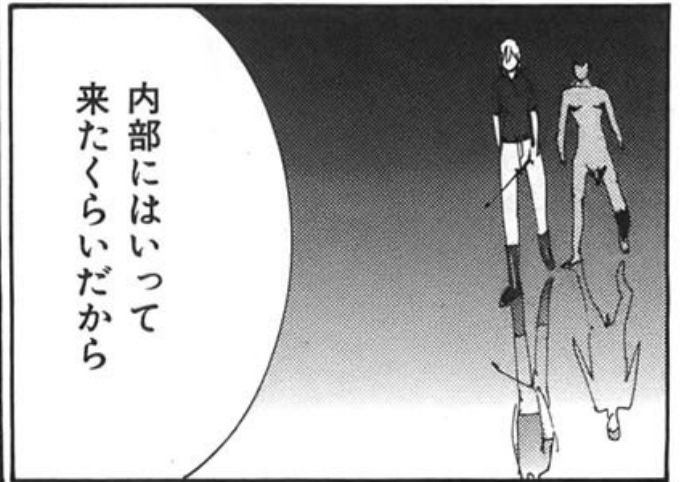
でも
円盤を見て



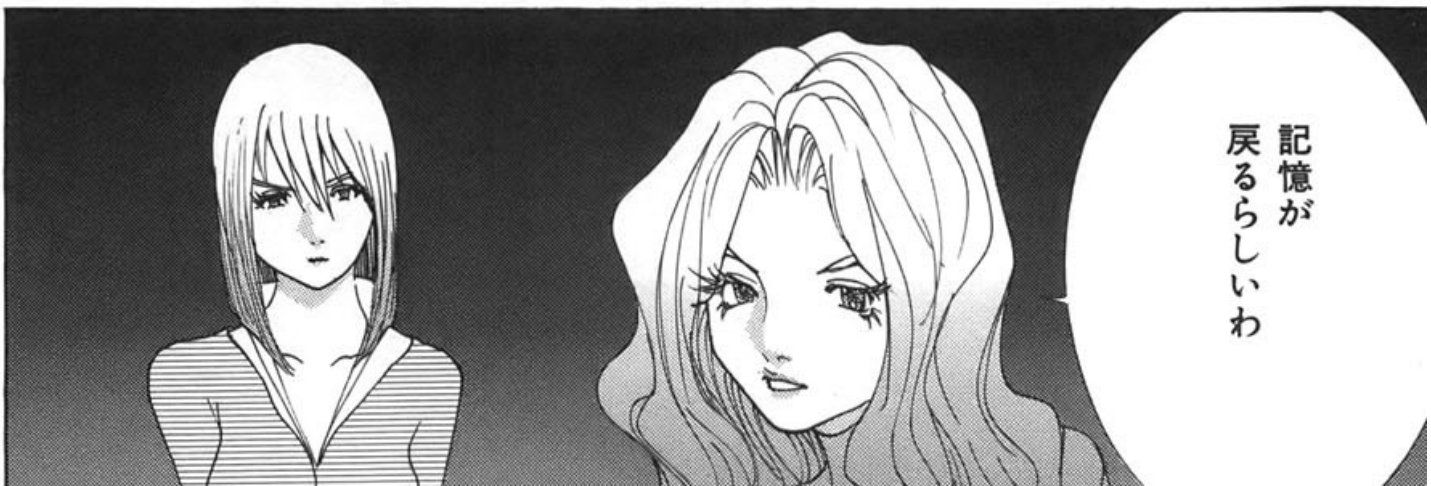
目で見
耳で聞けば



内部にはいって
来たくらいだから

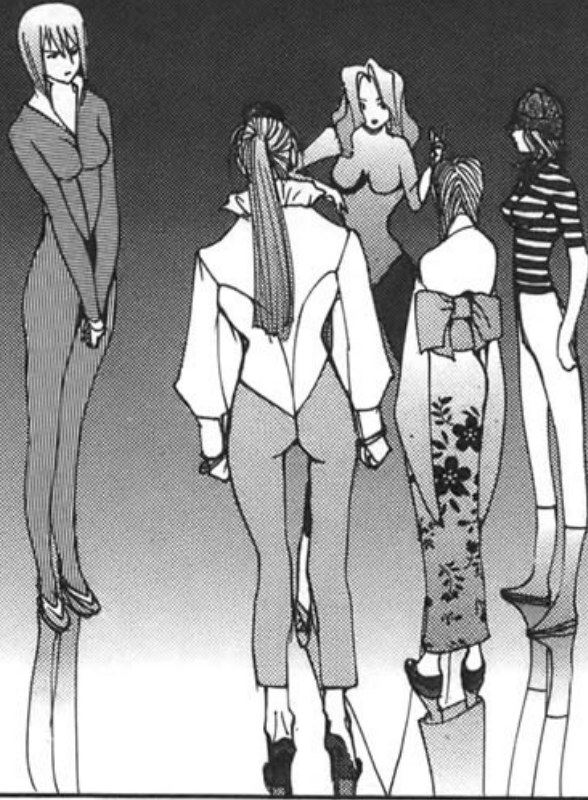


記憶が
戻るらしいわ



とにかく
彼女の
反応ぶりが

少々
おかしくても
笑っちゃだめよ



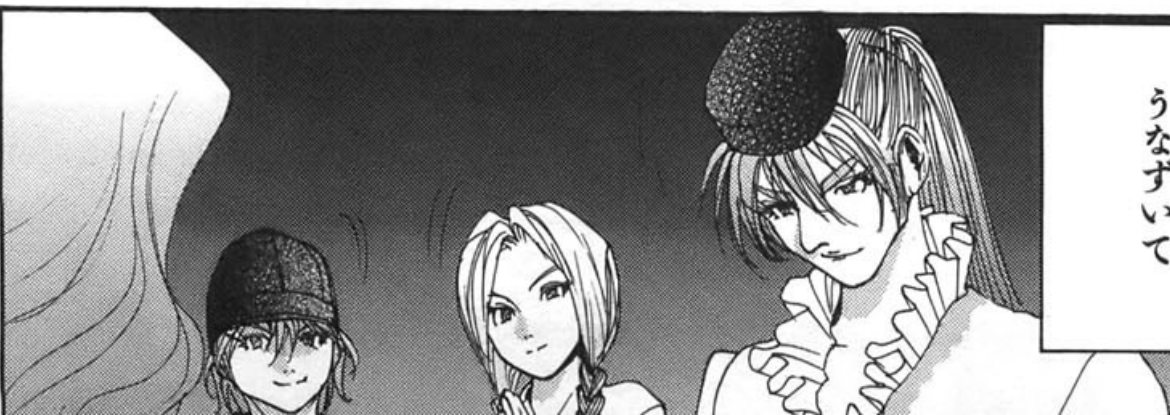
彼女も
記憶の回復に
一生懸命
なんだから…

植民地貴族には
違いがないの

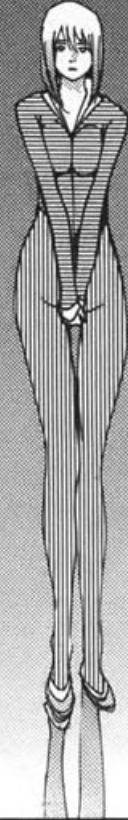
とにかく
平民じゃ
ないわ



三人は
うなずいて



クララに
対し



記憶の回復に
できるだけ
お手伝いをしましょう

と
申し出た



彼らは
彼女に不躰な
視線を浴びせたり
することは

決して
なかったが



部屋の
一すみに

裸のまま
四つん這い
になっている



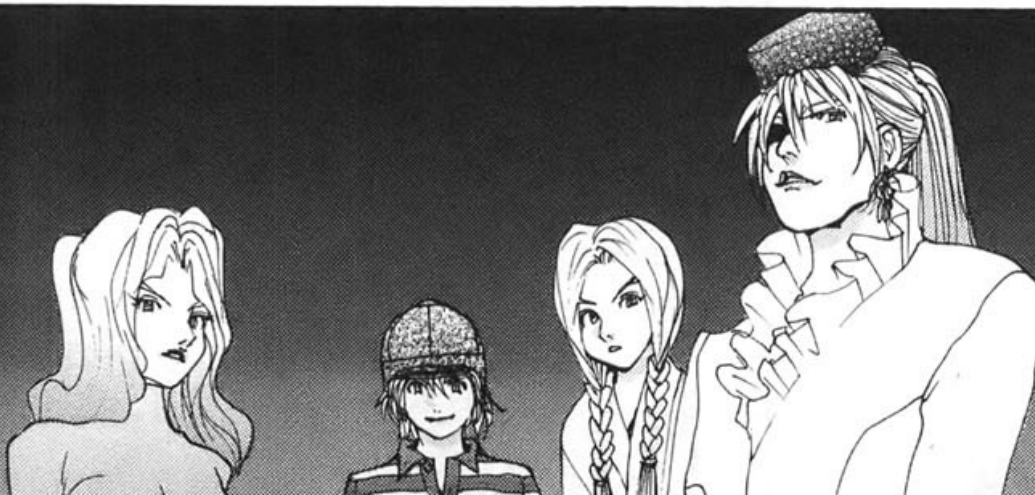
放浪の
女主人に
仕えたという



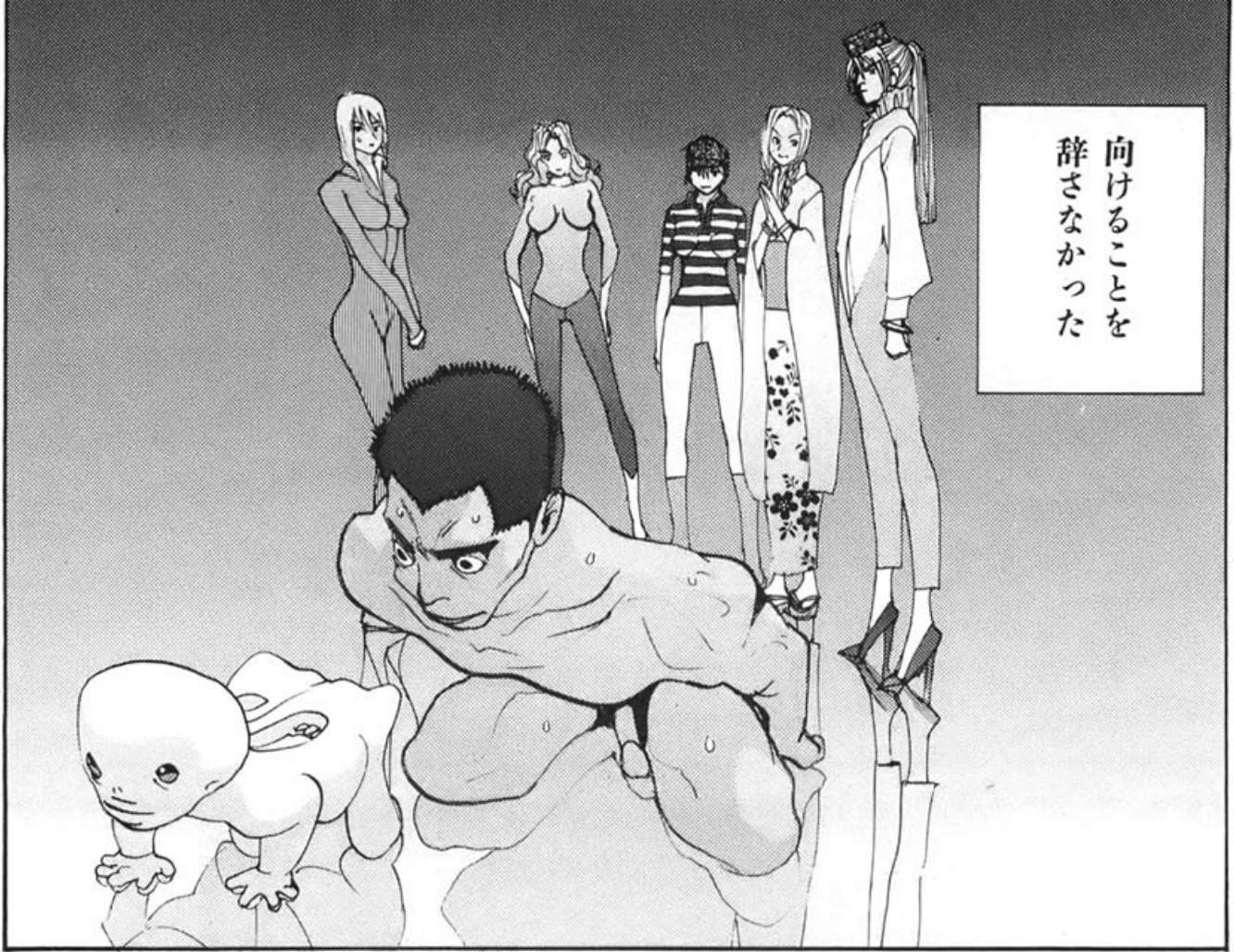
土着ヤプーに
対しては



好奇心に
満ちた
視線を

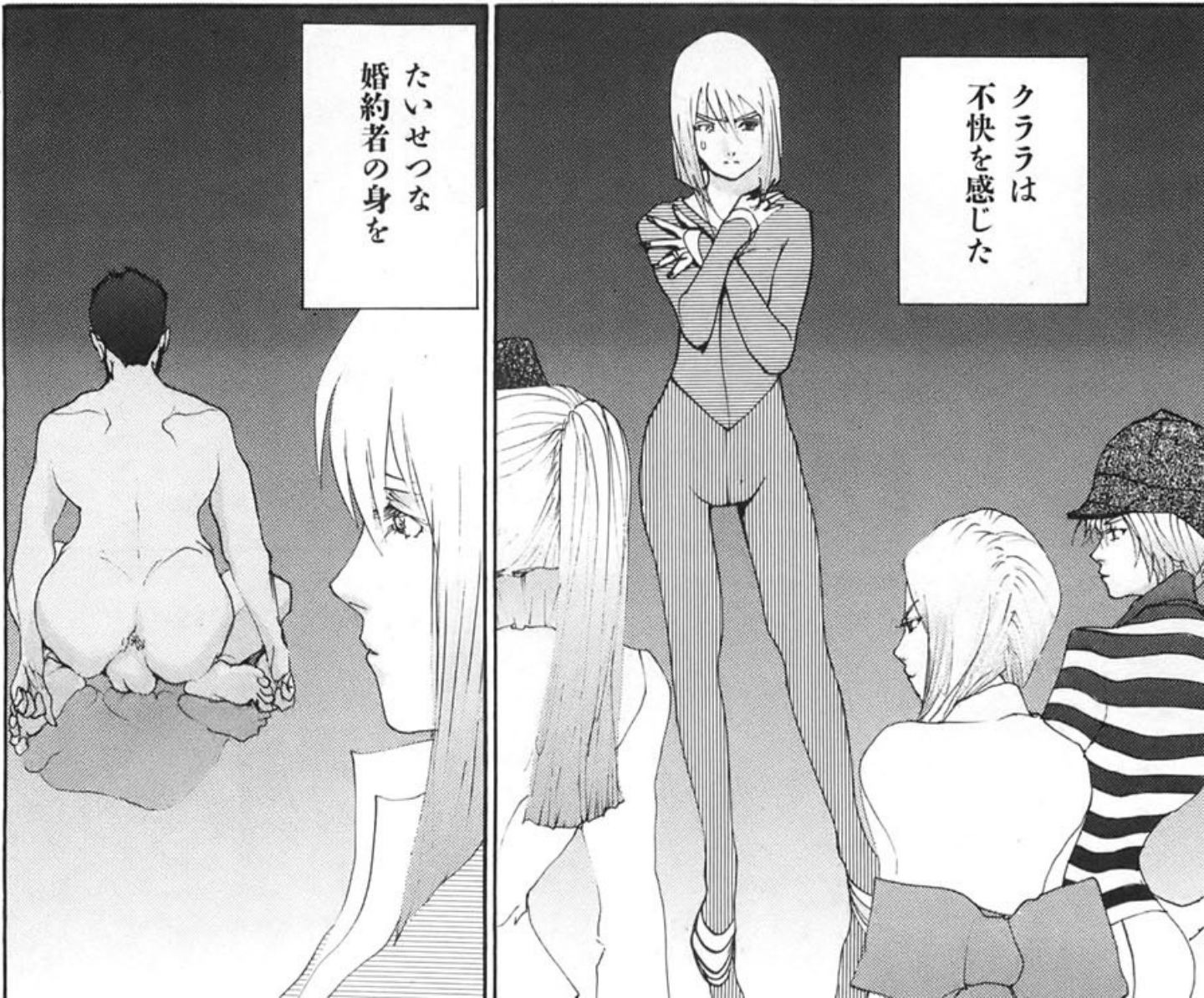


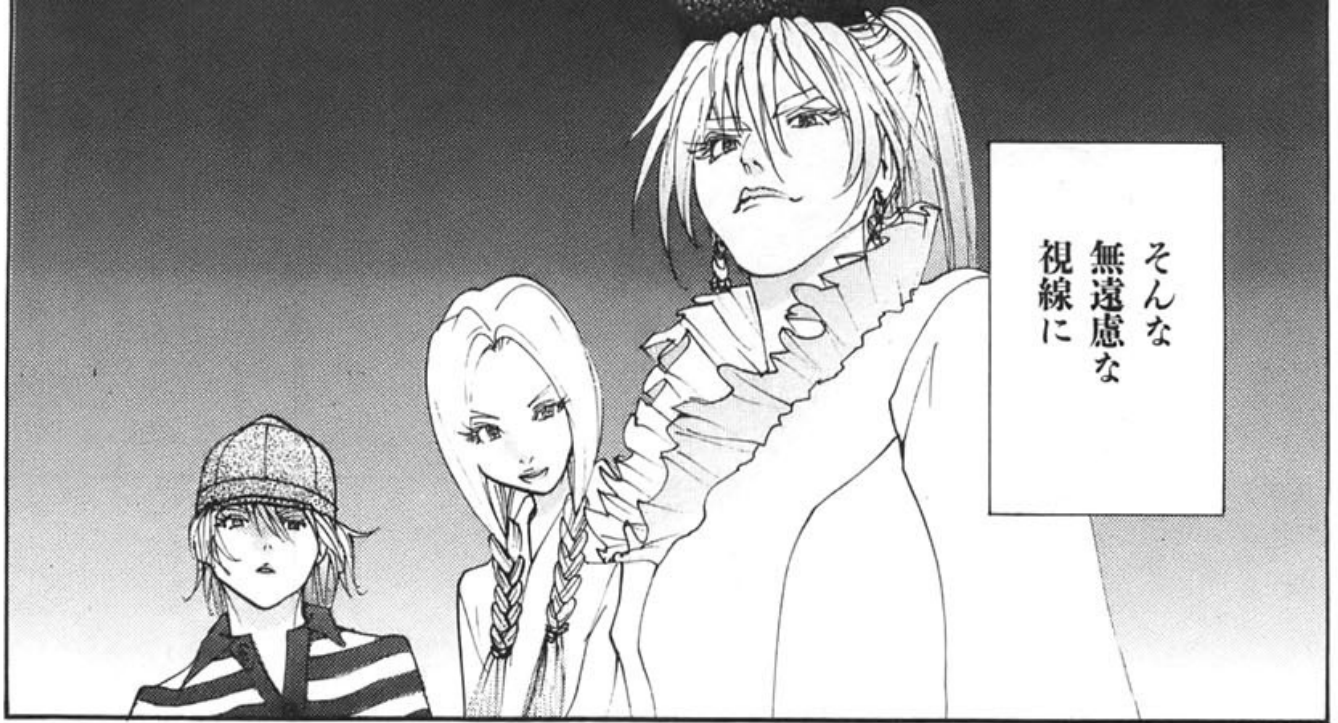
向けることを
辞さなかつた



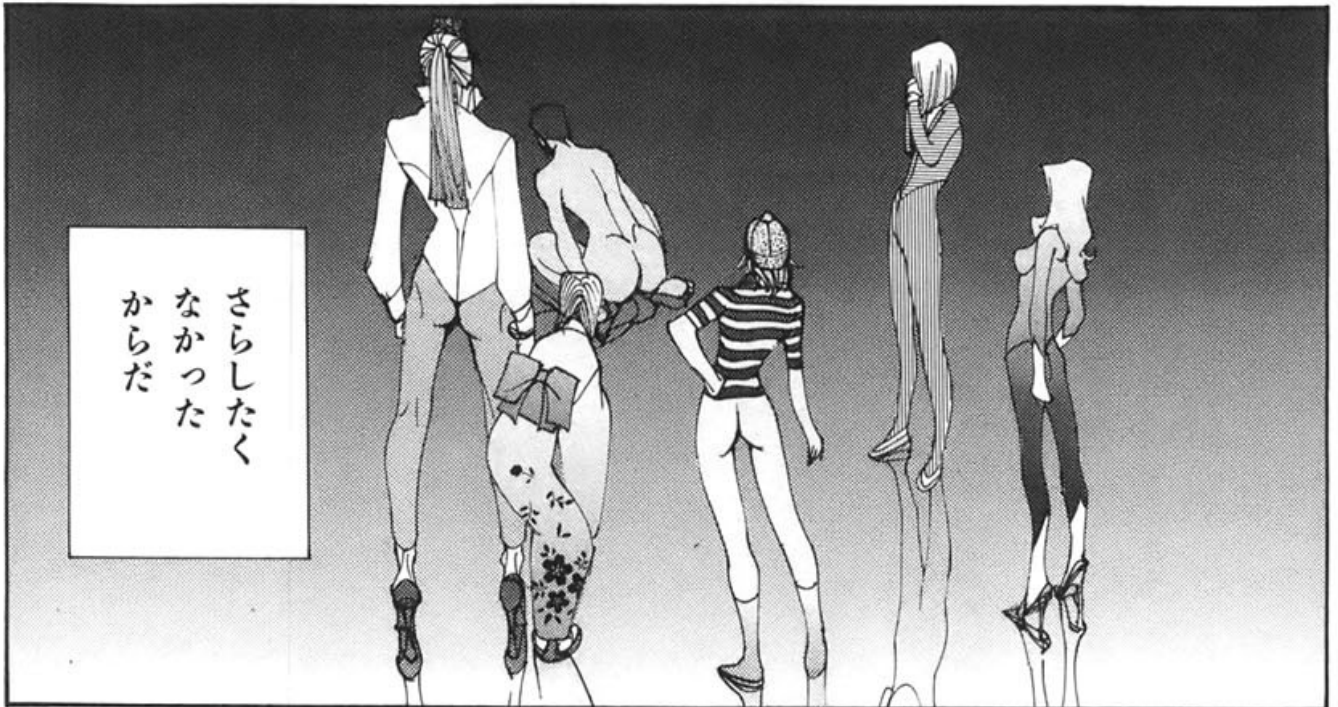
たいせつな
婚約者の身を

クララは
不快を感じた

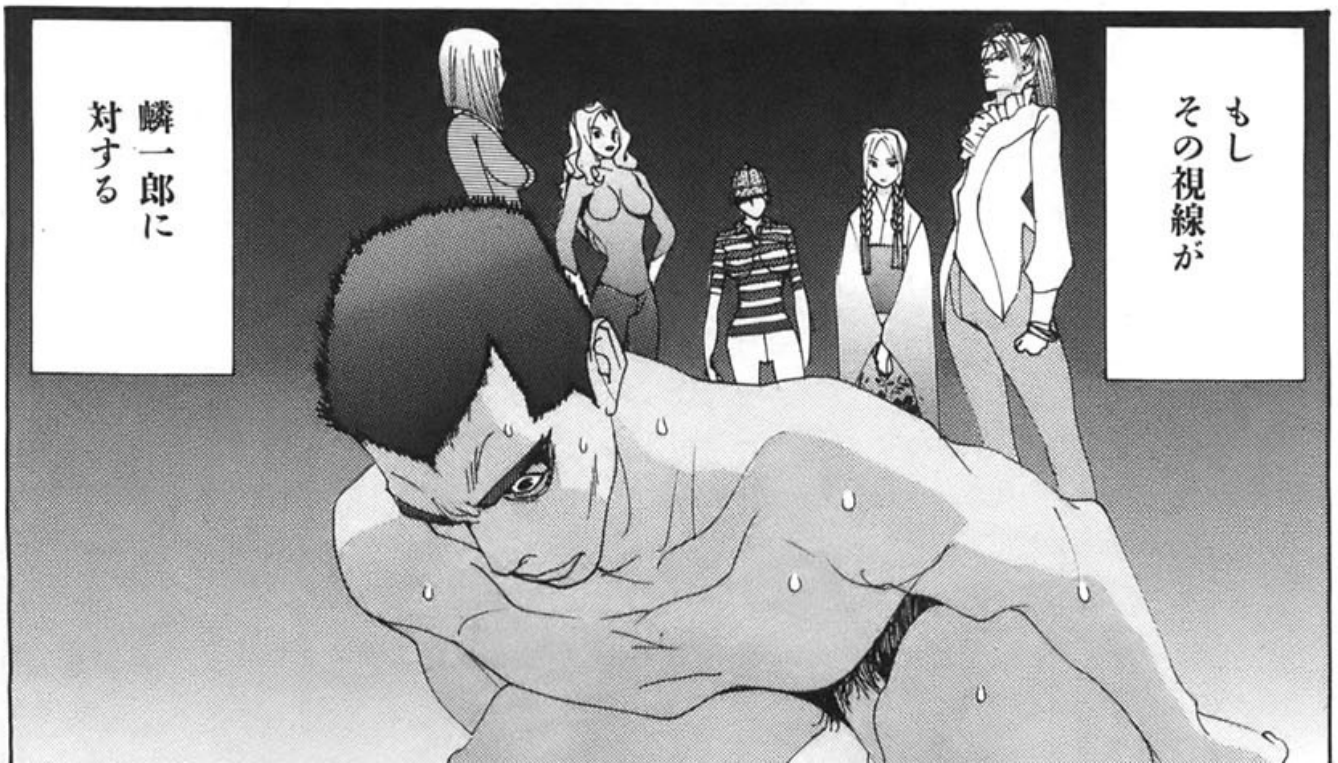




そんな
無遠慮な
視線に



さらしたく
なかつた
からだ



隣一郎に
対する

もし
その視線が

敵愾心を



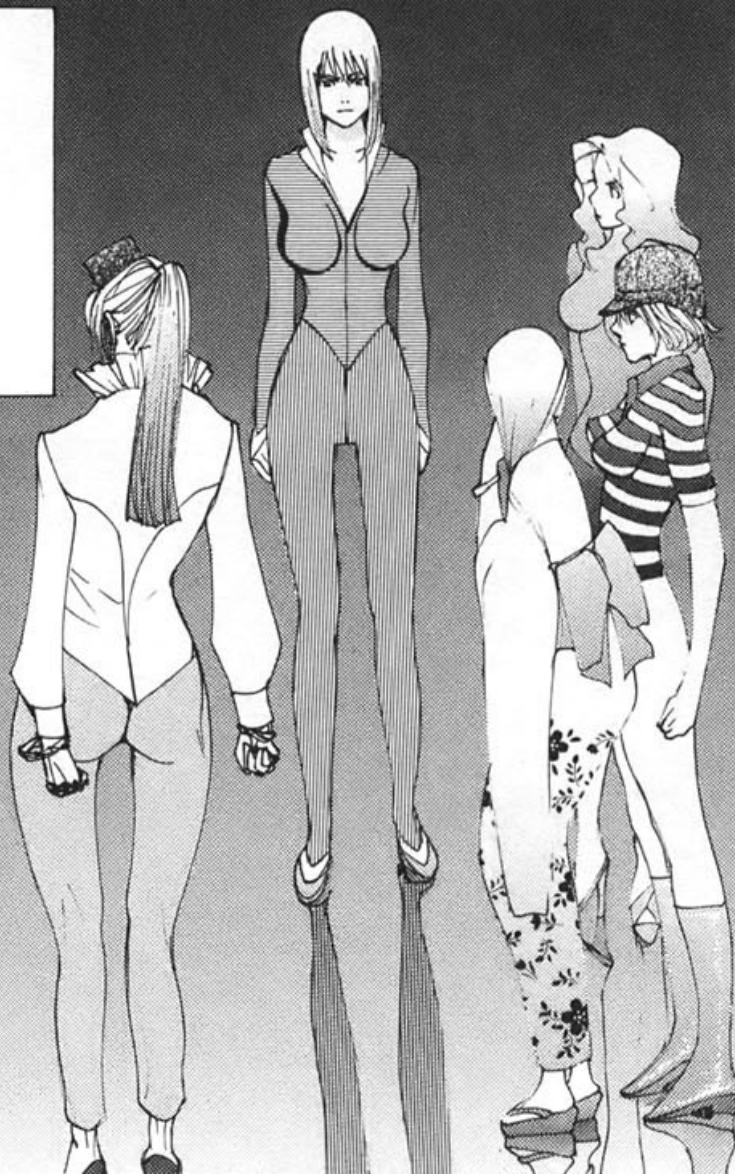
感じさせる
ものだったら



否定的評価を



彼女は
なおのこと
それに

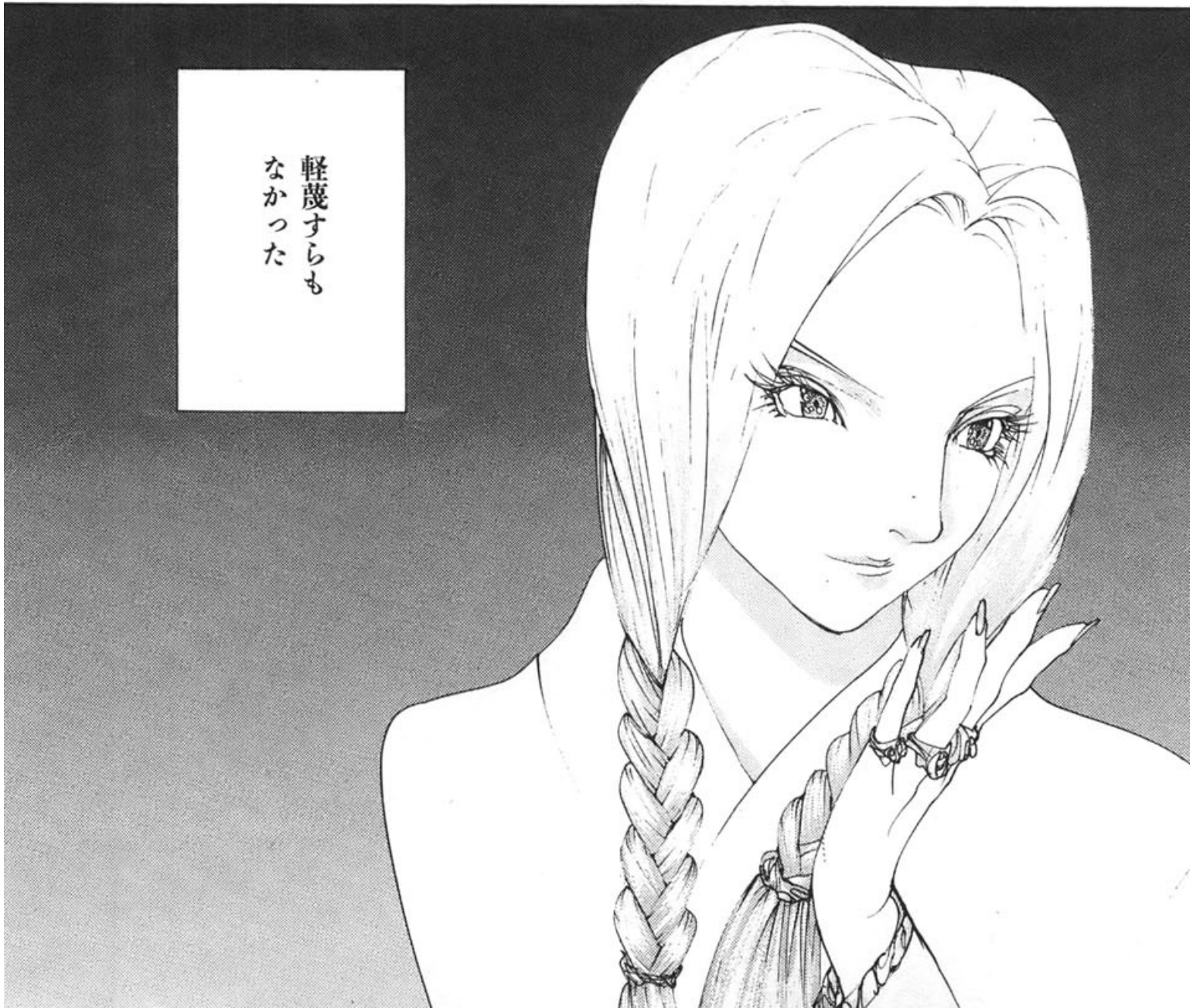


反発
していたかも
知れない

彼女が
なおのこと
それに



しかし
彼らの目には
そんなものは
なかった



軽蔑すらも
なかった



彼らの
示したものは
ただ純粹な
好奇心だけだった



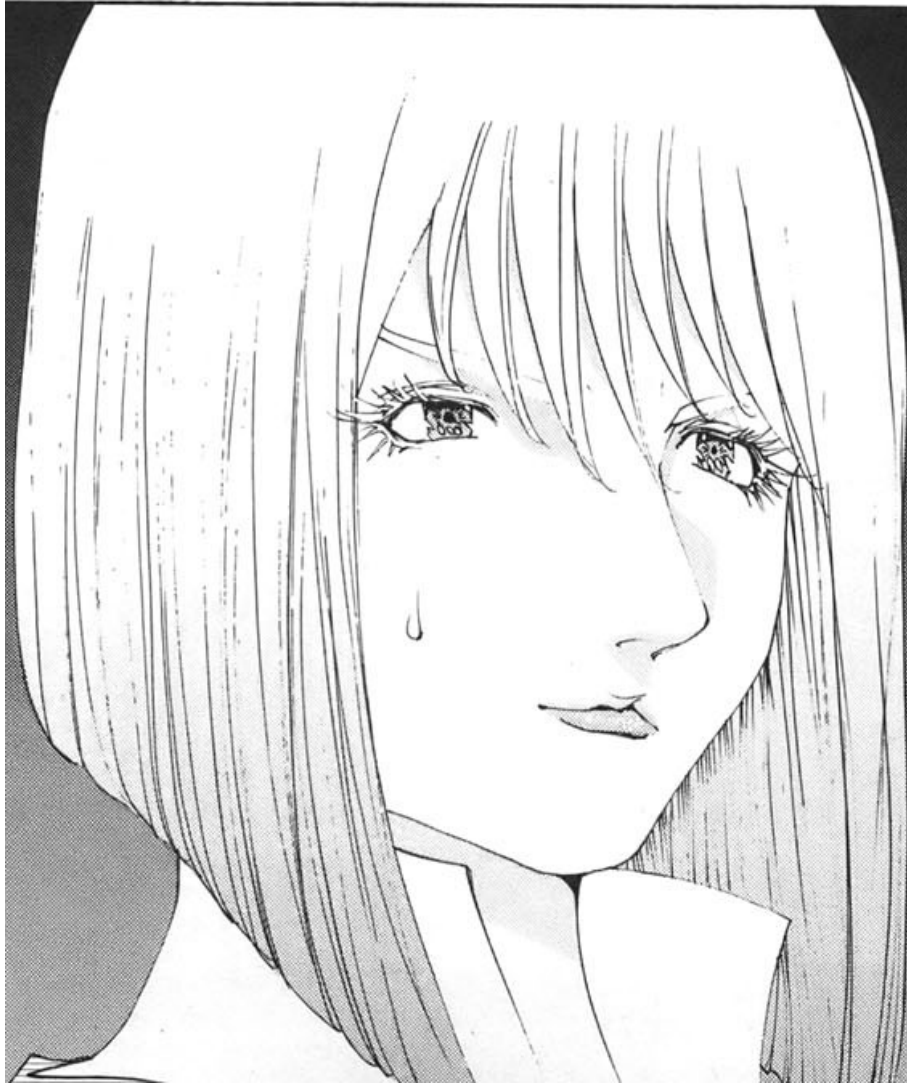
厩舎で
新しい馬を
見る時に

彼女が
示すような
目つきで

彼らは
鱗一郎を
見ていた



それが彼女を
だんだん
不安にした

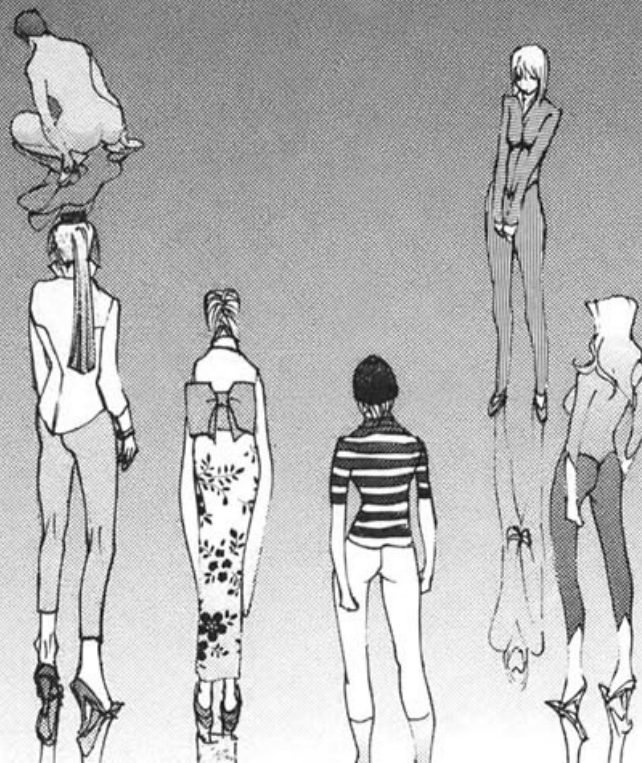


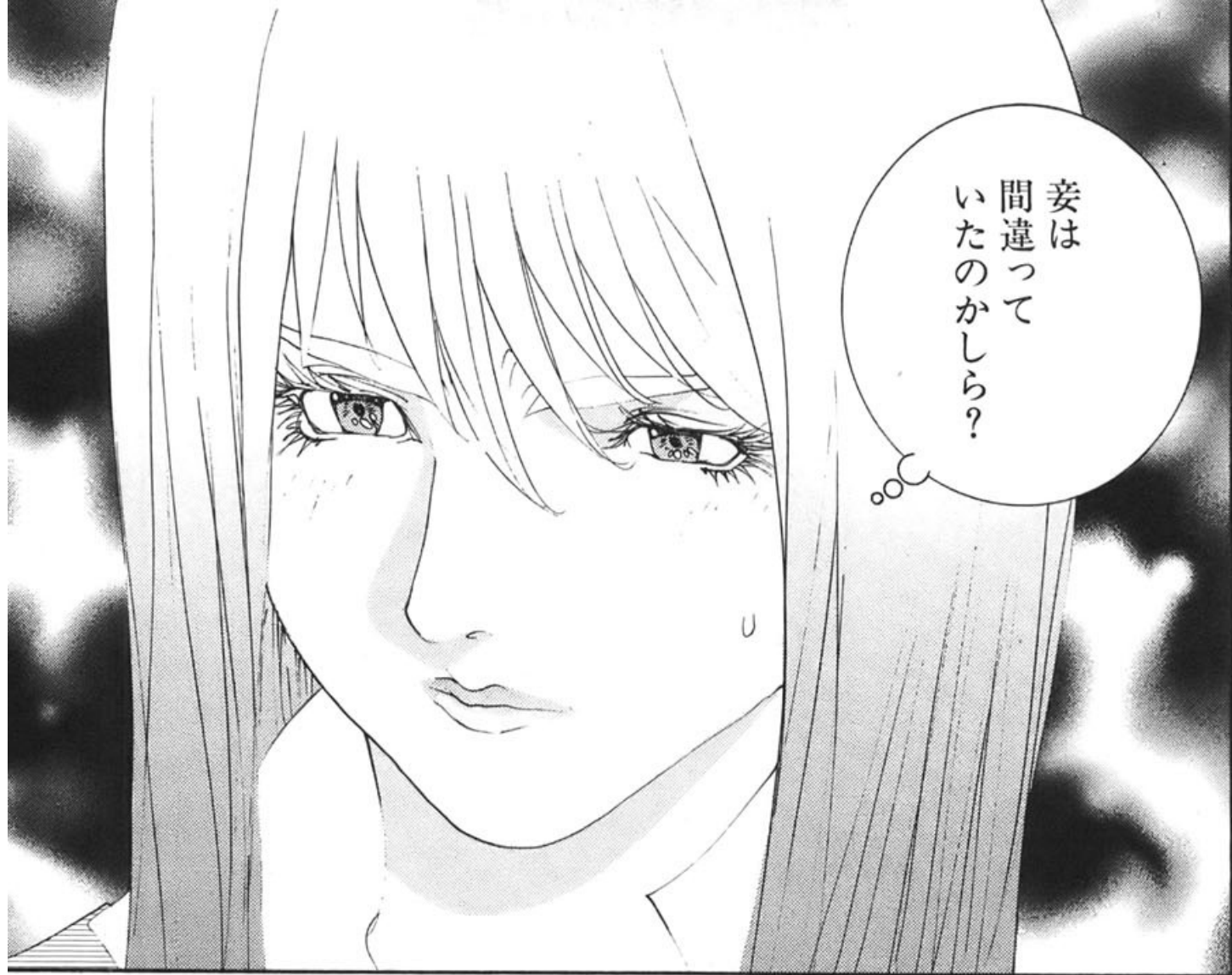
さつき
ポーリーンの
口から聞いた
日本語のことが

コッチジャナイ
オ客様ノ
ゴ用ナンダヨ

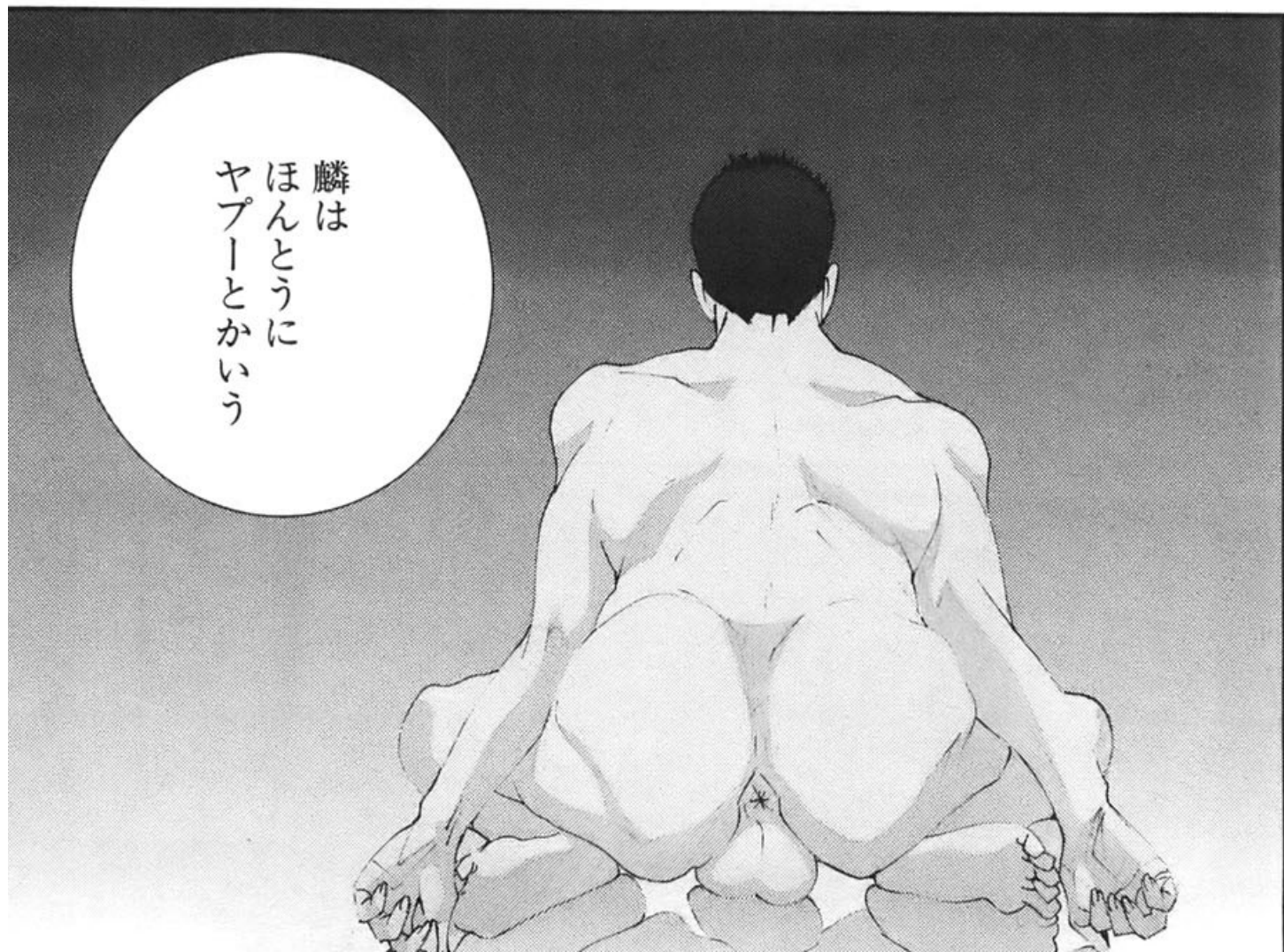


ふと
思い出された



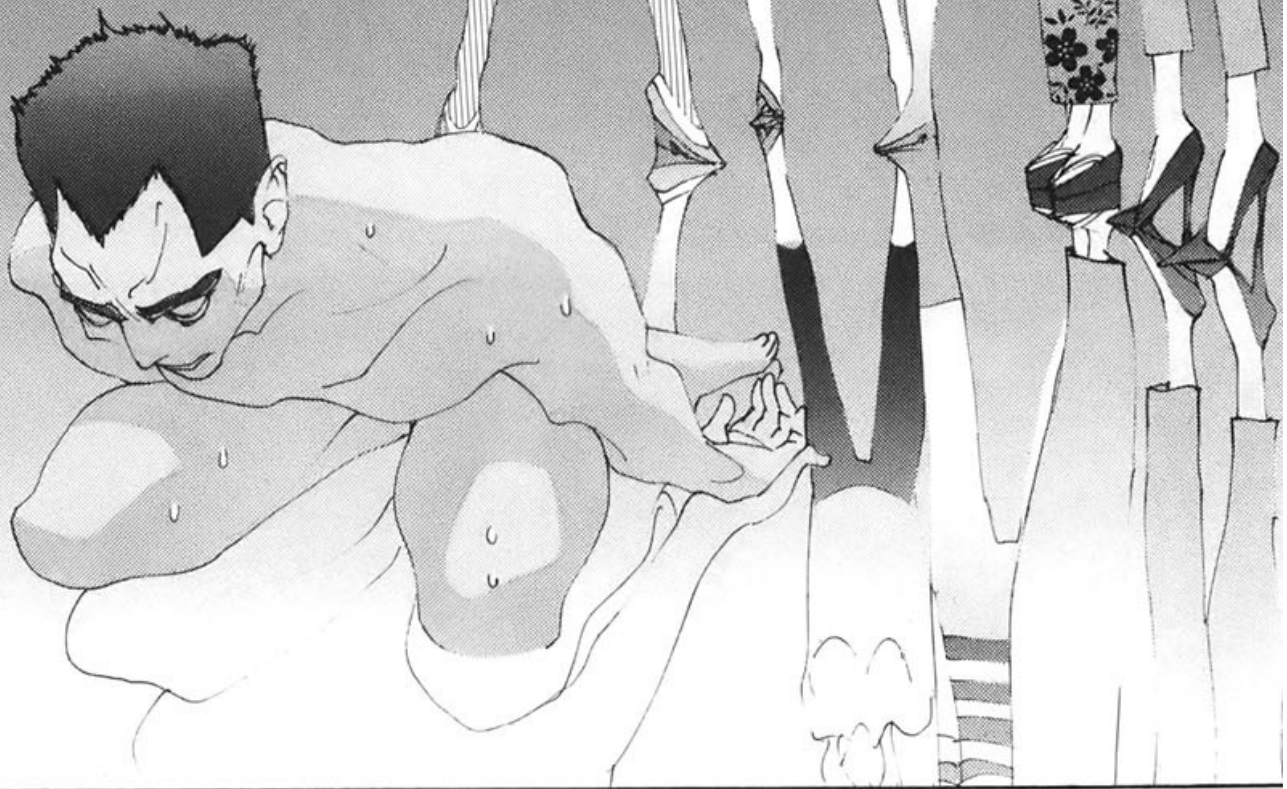


妾は
間違っ
いたの
かしら？



麟は
ほんとうに
ヤブーとかいう

ブツイド・メンシユ
似而非人間
なのかしら？



そういう
疑いが

初めて
クララの心に
きざしたのだった

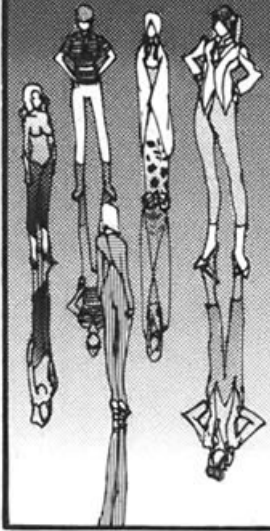


さ

着くまで
一時間
あるわ

上階の
船室のほうに
行きましょう

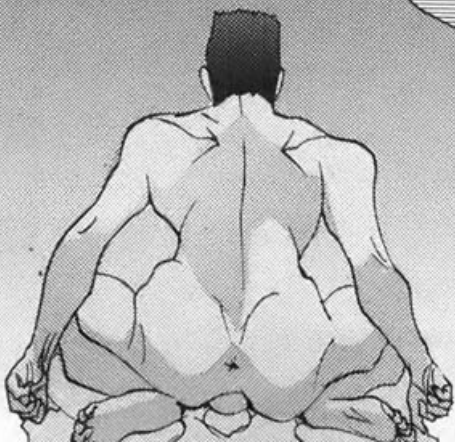
互いの
紹介の終わった
ところで



ドリスがいった

妾^{めかけ}は麟を……

この
ヤプーを離れる
わけには
いきませんわ



丈夫な時なら
ともかく

全身麻痺状態に
あるので……

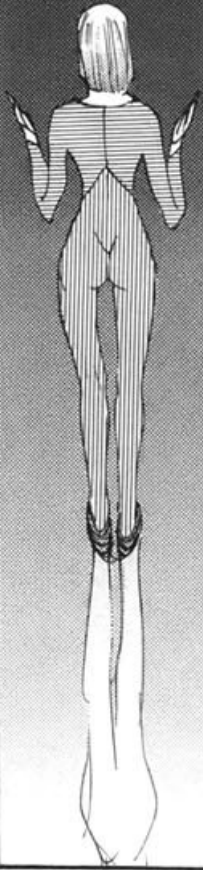
第八章 二千年後の地球へ
——第三話——



今度こそ
瀬部氏^{ミズベ}とは
いえない

記憶喪失を
装うとはいえ
イース人に
なりすまそうと
いう手前

心ならずも
隣一郎を
ヤプー呼ばわりは
したが

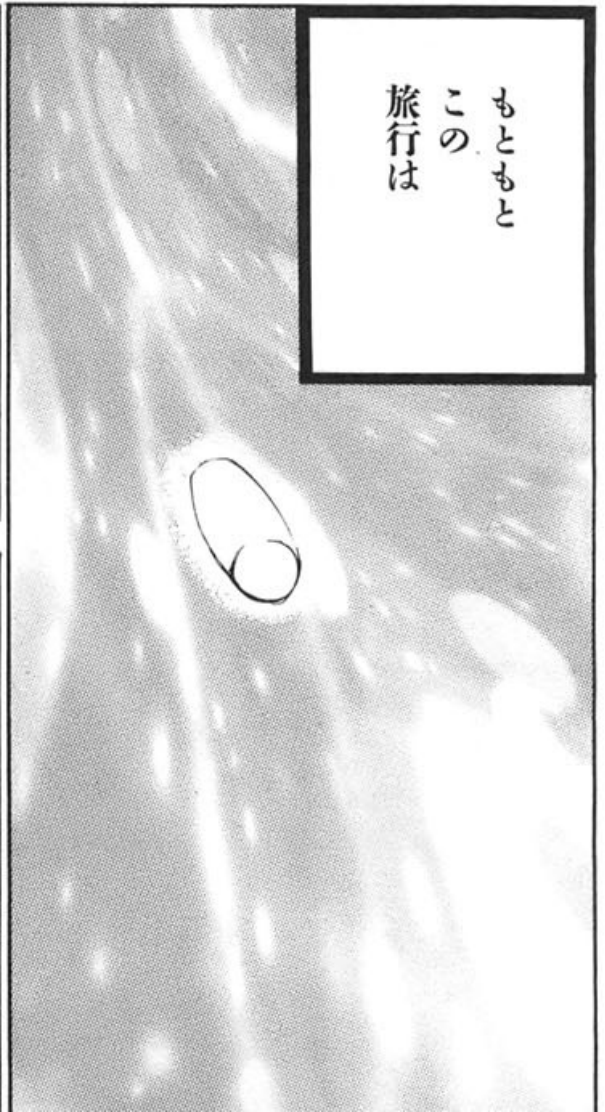


もともと
この
旅行は

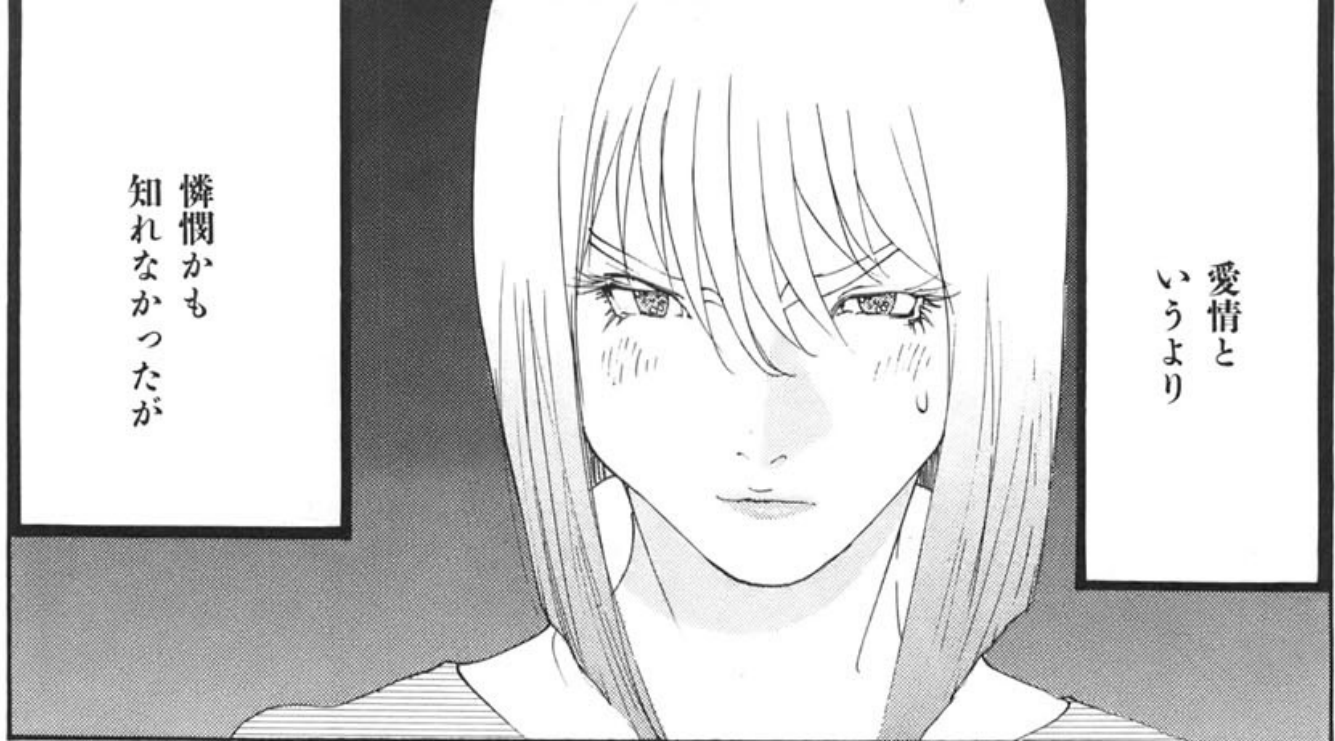
彼の麻痺を
本復させるのが
目的だったことを



彼女は
忘れて
いない

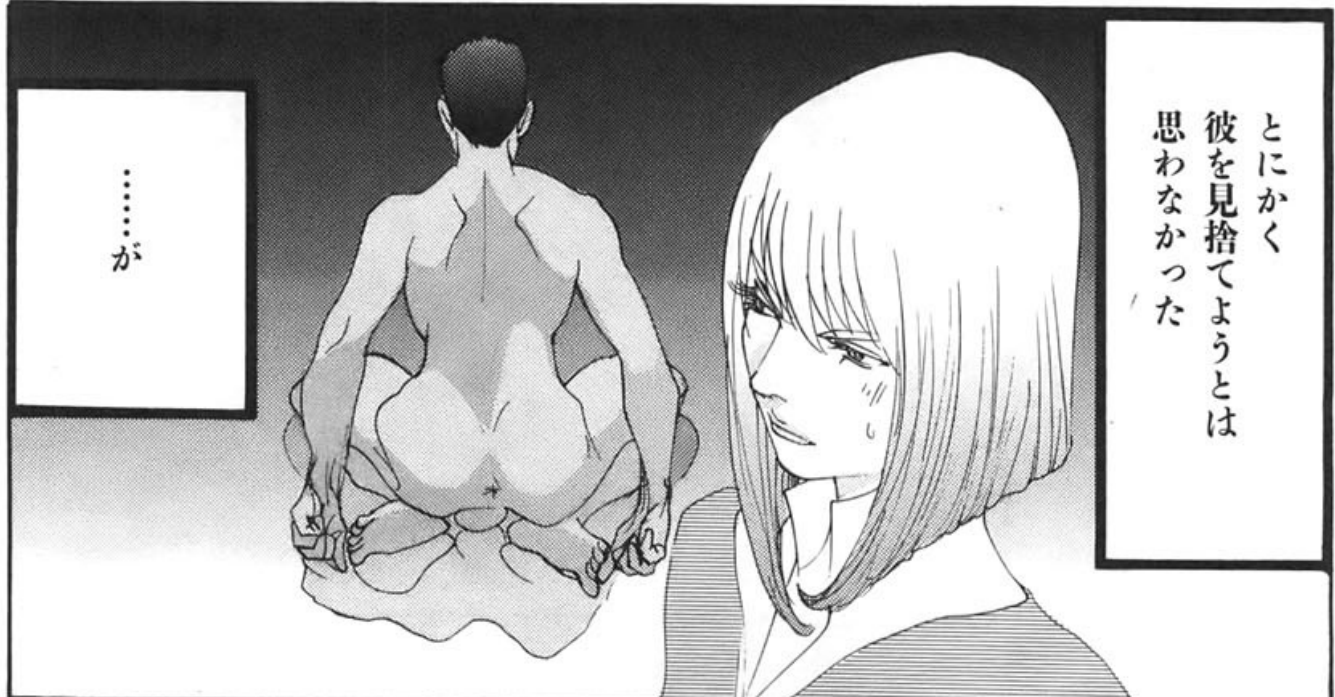






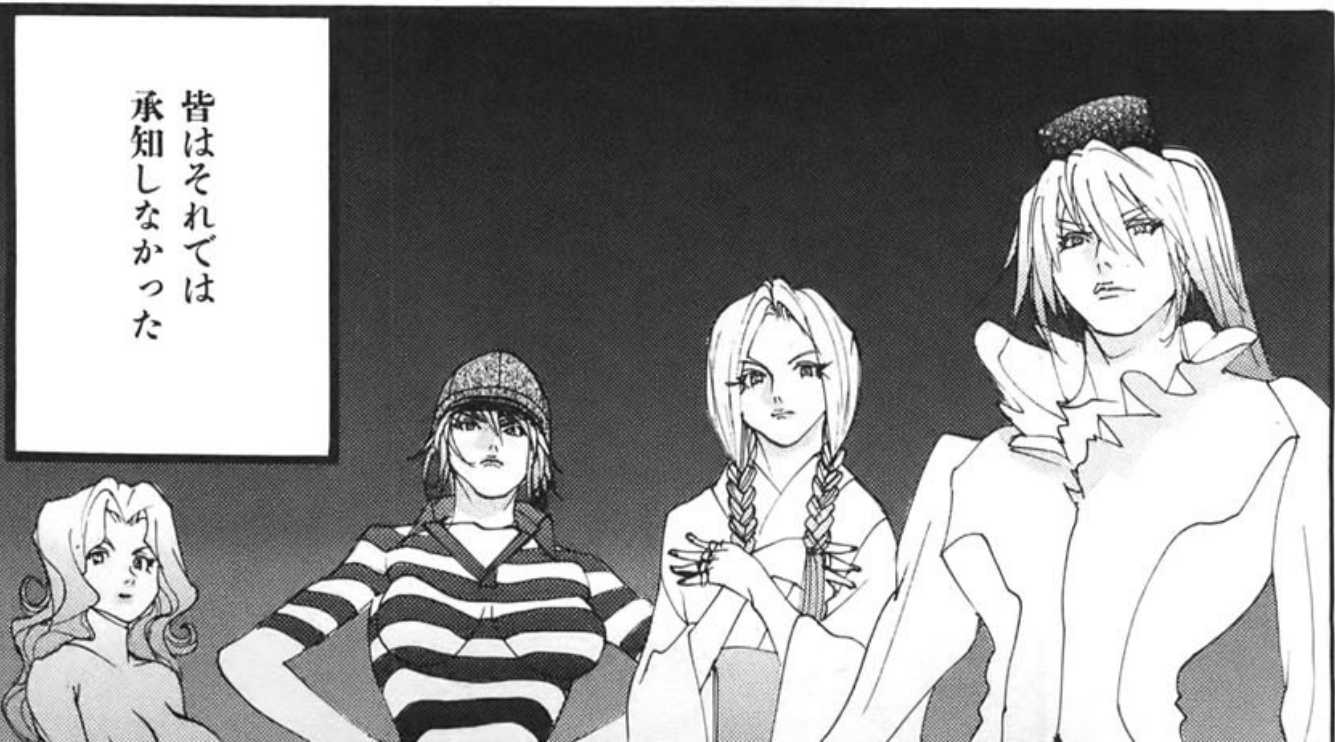
愛情と
いうより

憐憫かも
知れなかったが



とにかく
彼を見捨てようとは
思わなかった

……が



皆はそれでは
承知しなかった

あら
いくら大事
だって

妾たちだけ
引き揚げる
なんてこと
できないわ

とドリス

そうまで
ヤプーに
義理を
立てなく
たって…

第一

お客様の
貴女を
この部屋に
置いて

そばに
居ても
居なくても
同じこと
ですよ

どうせ
注射するまで
変化はないんだし

到着するまで
注射はできないん
だから……

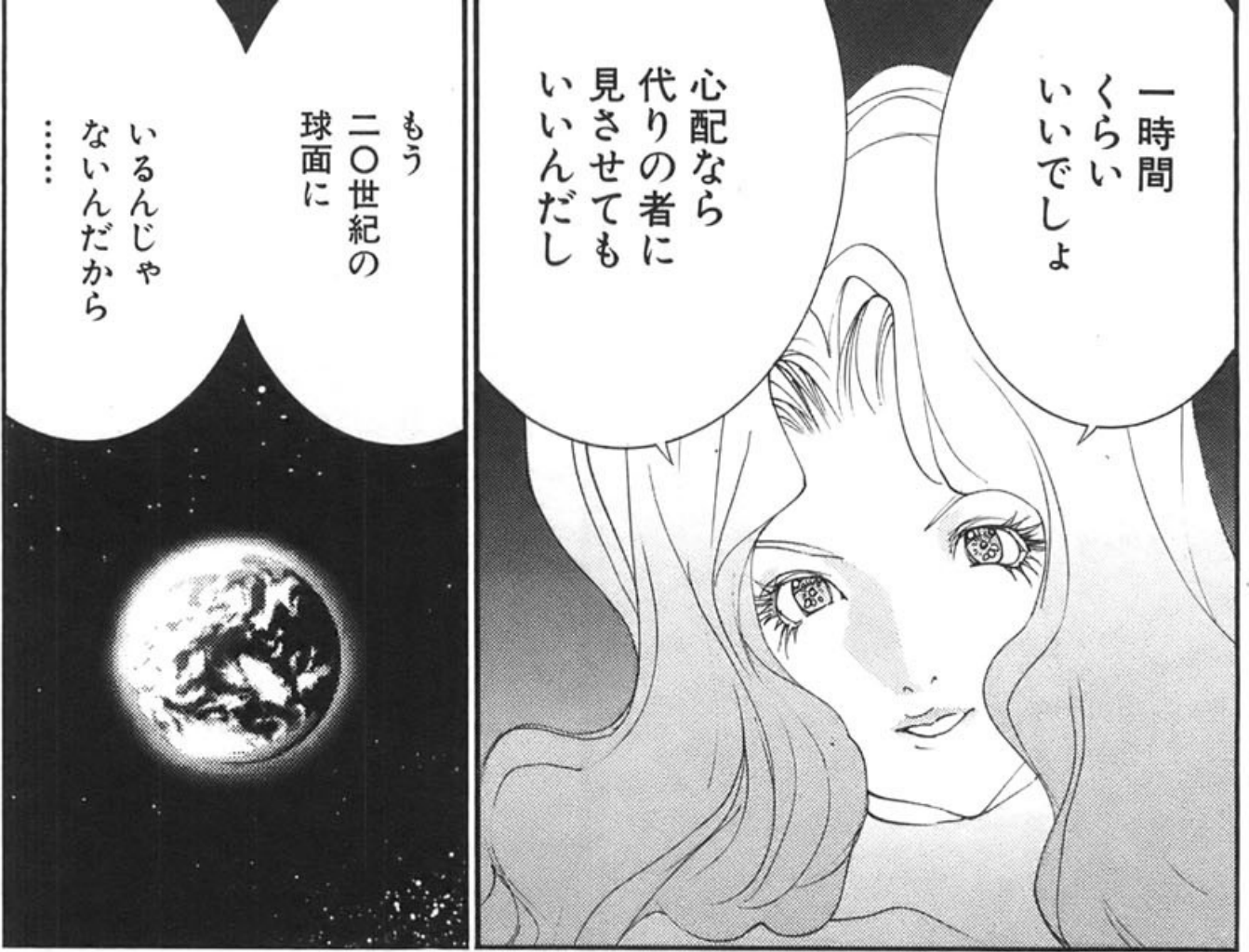
と
これは
ウィリアム
だった

一時間
くらい
いいでしょ

心配なら
代りの者に
見させても
いいんだし

もう
二〇世紀の
球面に

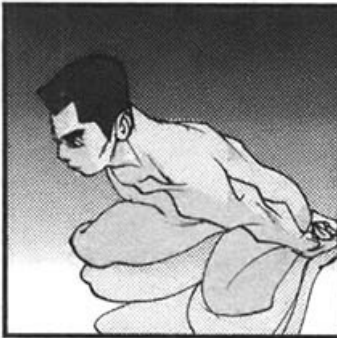
いるんじゃない
ないんだから
……



あまり
躊躇したら
イース人と
思っ
もらえなく
なるぞ

と
いわんばかりに
ポーリーンが
いった

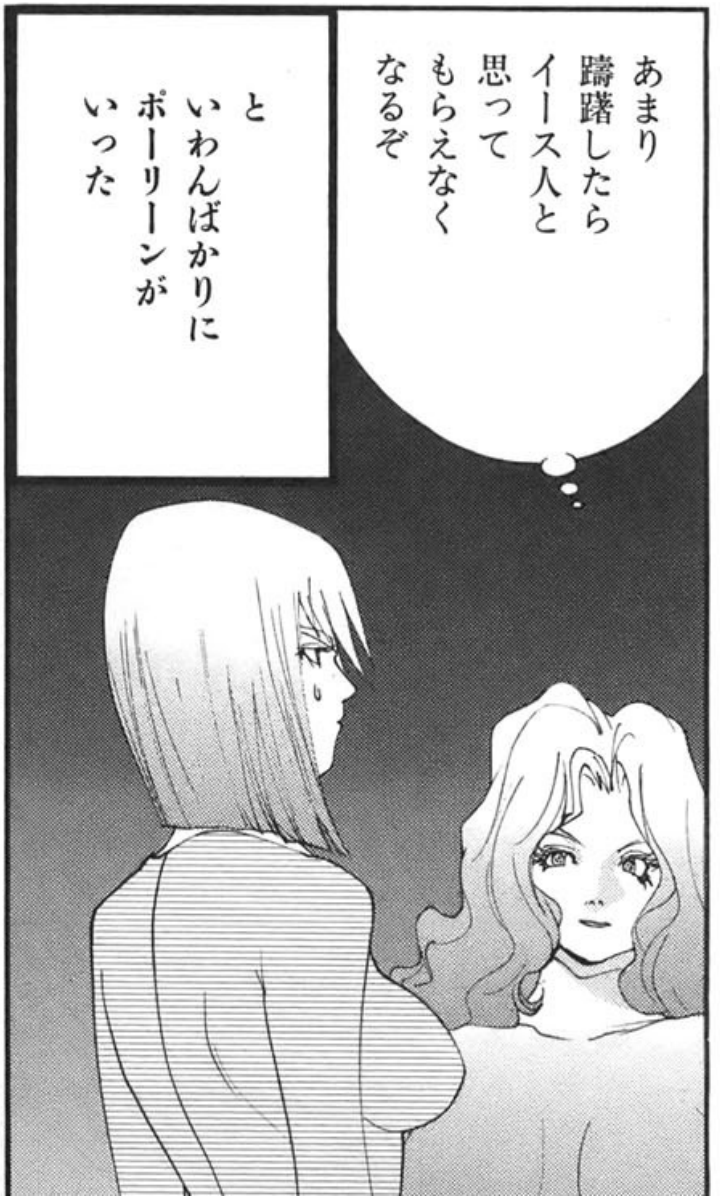
麟一郎を
救うには
どうすれば
賢明なのか



代る代る
勧められて



クララの
気持は
動いた



前史時代人と
見破られては
何にも
ならない



セシルが
女にしても
みたいような
美しい顔を
赤くしながら

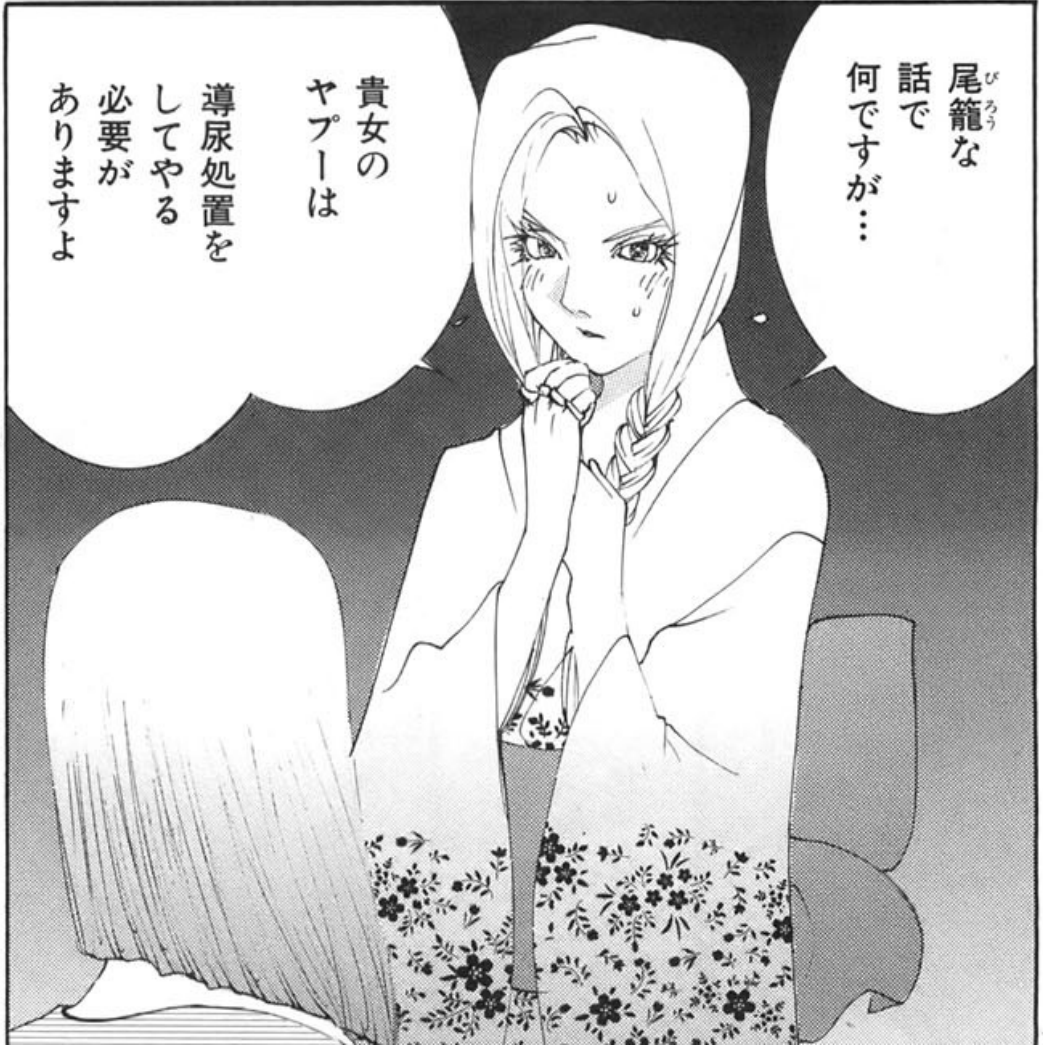
口ごもりつつ
いった

迷っている
ところへ

?!

尾籠^{びろう}な
話で
何ですが…

貴女の
ヤプーは
導尿処置を
してやる
必要が
ありますよ





麻痺させて
あると



土着ヤプーは
私たち人間と
同じような
泌尿排泄を
するわけですが



それが
うまくいかないで
苦しむんです



死んだことが
あって



以前
ネアンデルタール
古石器時代人を
捕獲した



帰りの
船中



膀胱破裂で

それ以来

衝撃牙で
麻痺させた
あとは



それに
土着ヤプーを
裸にしたまま

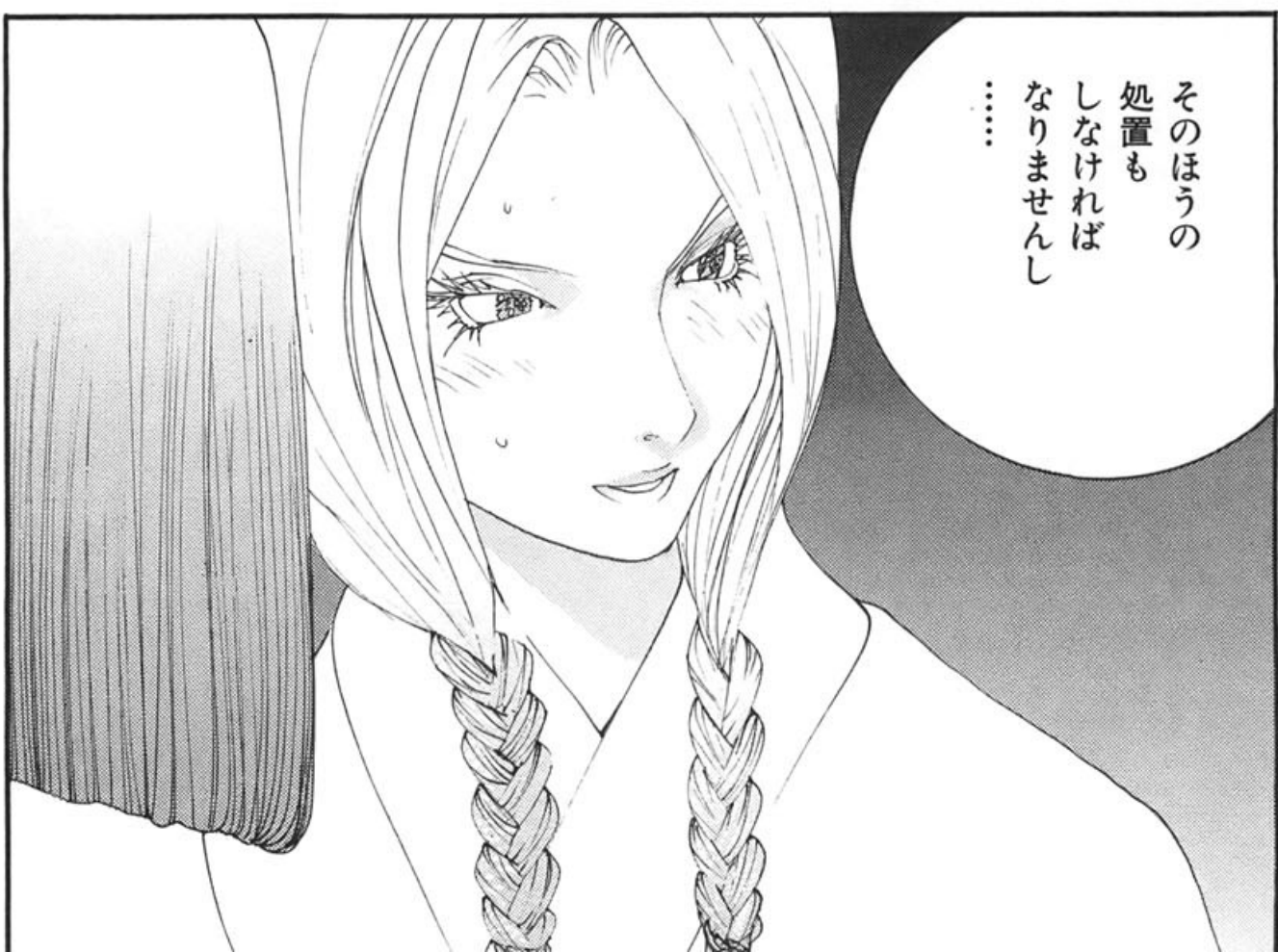
ほっといては
肺炎になっちま
いますから



ヤプーには
カテーテル
導尿管を
挿入するのが
普通になっ
て
るんです



そのほうの
処置も
しなければ
なりませんし
……

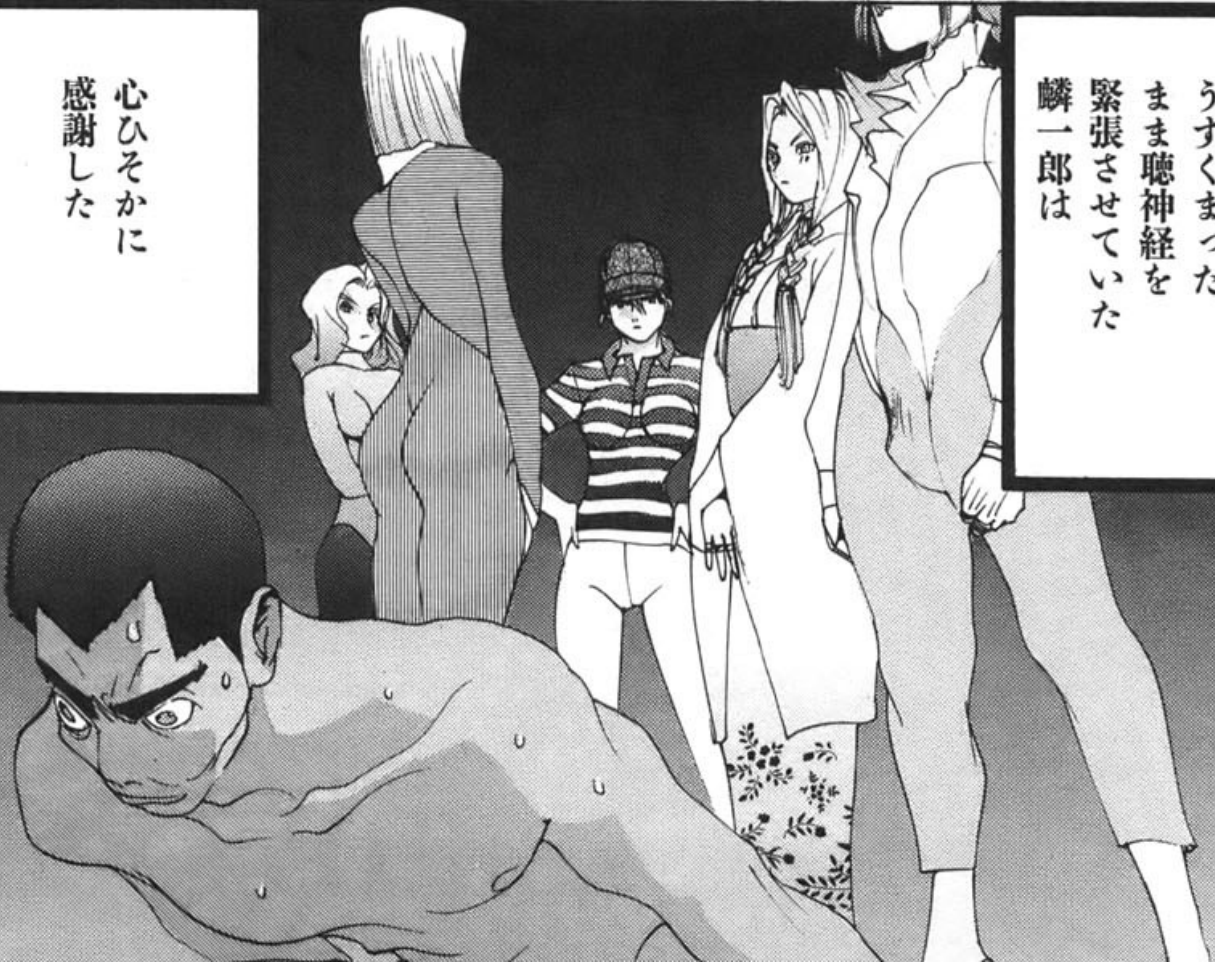


よく気づいて
くれた

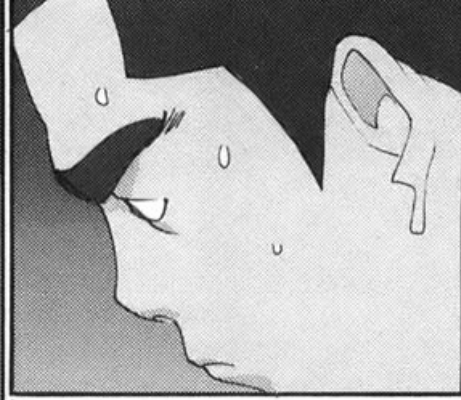


と
うづくまった
まま聴神経を
緊張させていた
鱗一郎は

心ひそかに
感謝した

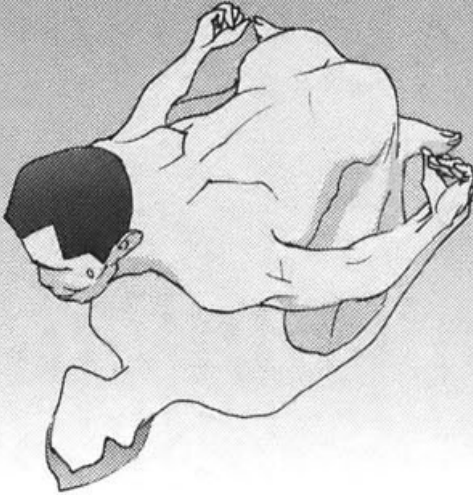
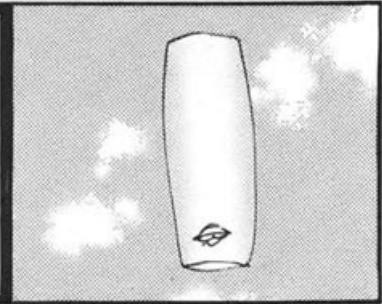


室温が

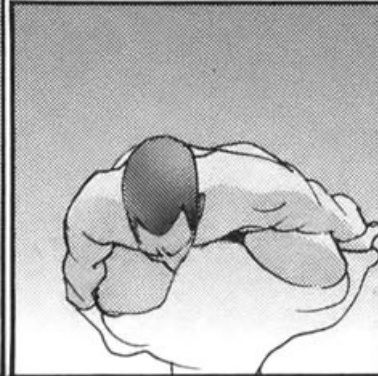


肌寒さを
さつきから
感じていた

艇ボートの格納後



急速に
下降した
らしく

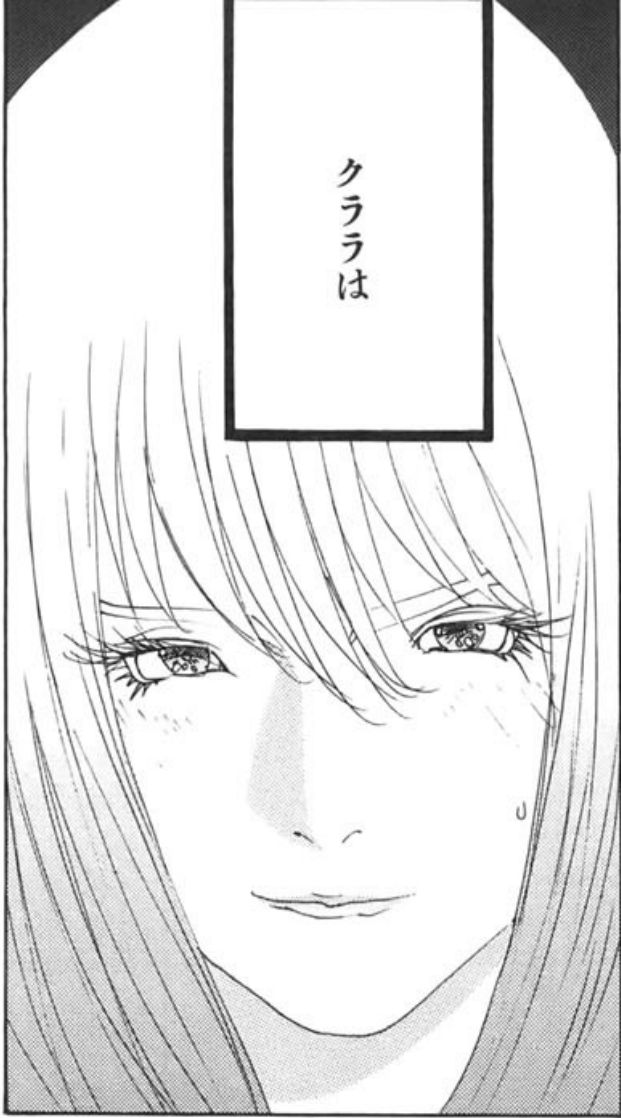


そして
冷えるに
つれて



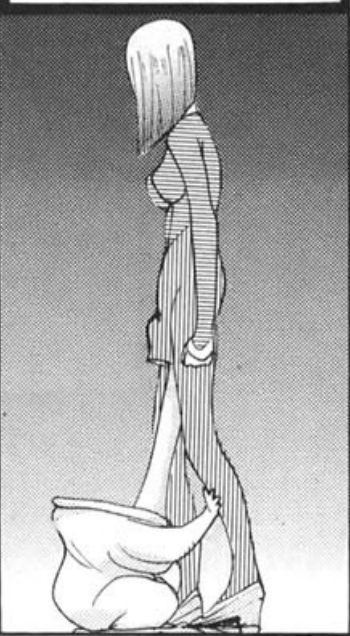
膀胱が
しだいに
充滿して
来ていたのだ



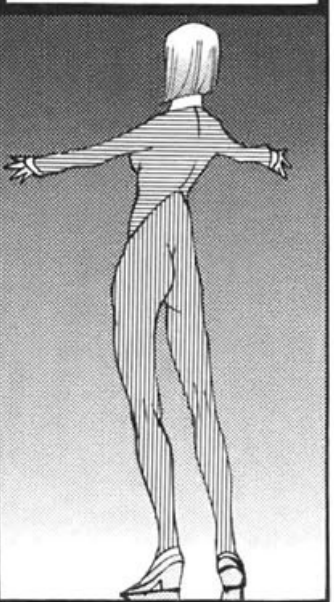


クララは

用便を
済ませた



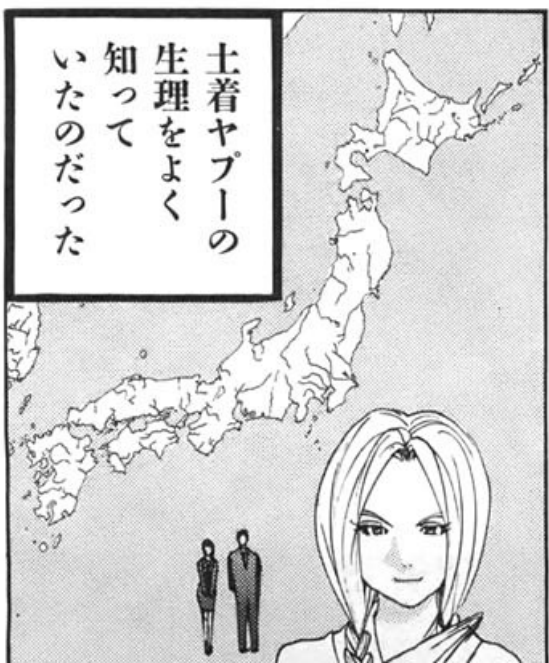
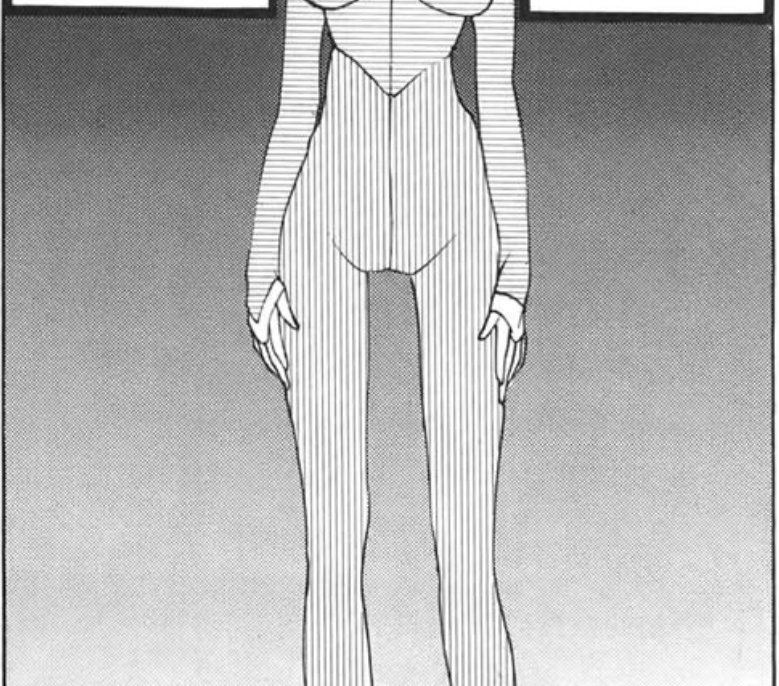
着替えし




セシルは
さすがに
専門家で

そこまで気が
つかなかつたの
だが

自分は
寒さも尿意も
感じないので



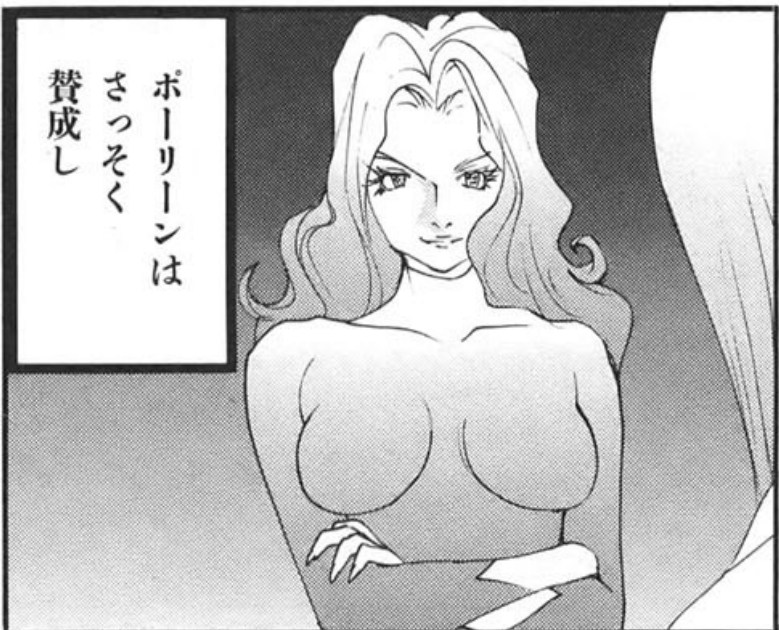
土着ヤプーの
生理をよく
知って
いたのだった



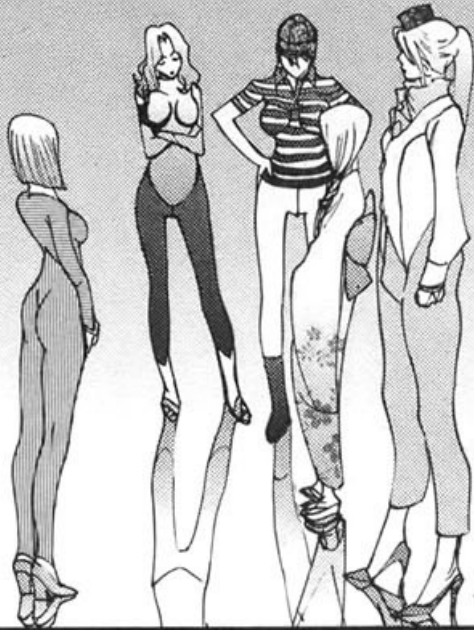
セシル
貴女という
とおりでわ

ほんとうは
自分も忘れて
いたのだが

そこは
取りつくろって
弁明した



ポーリーンは
さつそく
賛成し




妾もね

そう思って
たけど

この
船には

両方
いっしょに
できる

設備がある
はずだから
……



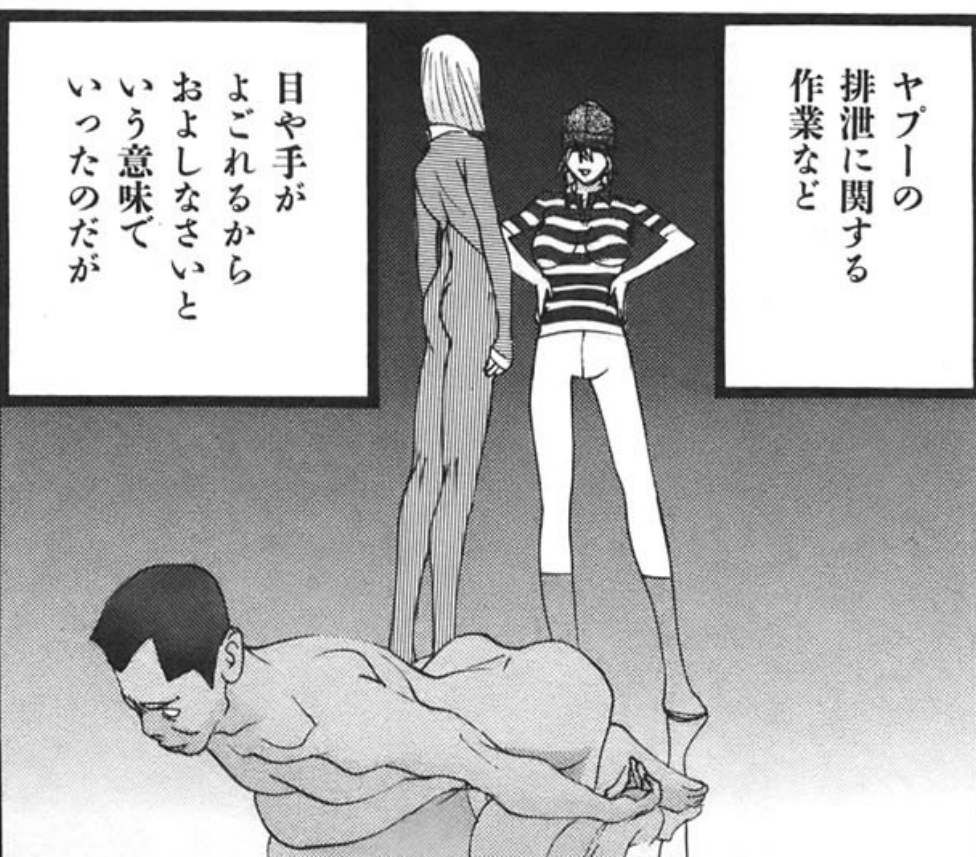
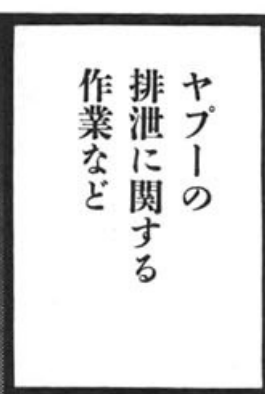
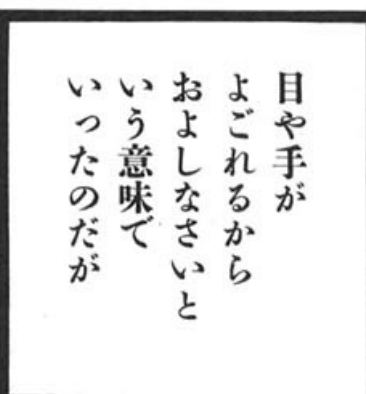
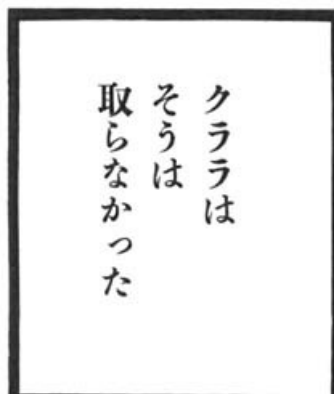
遊歩艇^{ヨット}では
設備はなし

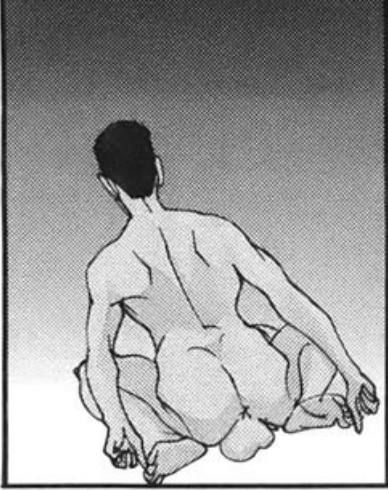
黒奴は
おらずで……



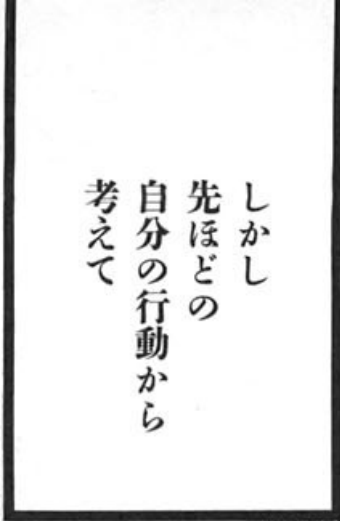
と
ドリスが
結論づけた

すぐ
黒奴に
やらせるわ

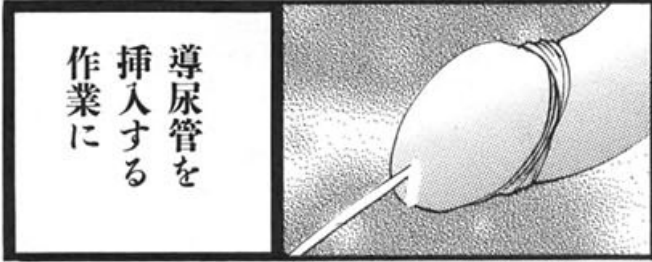




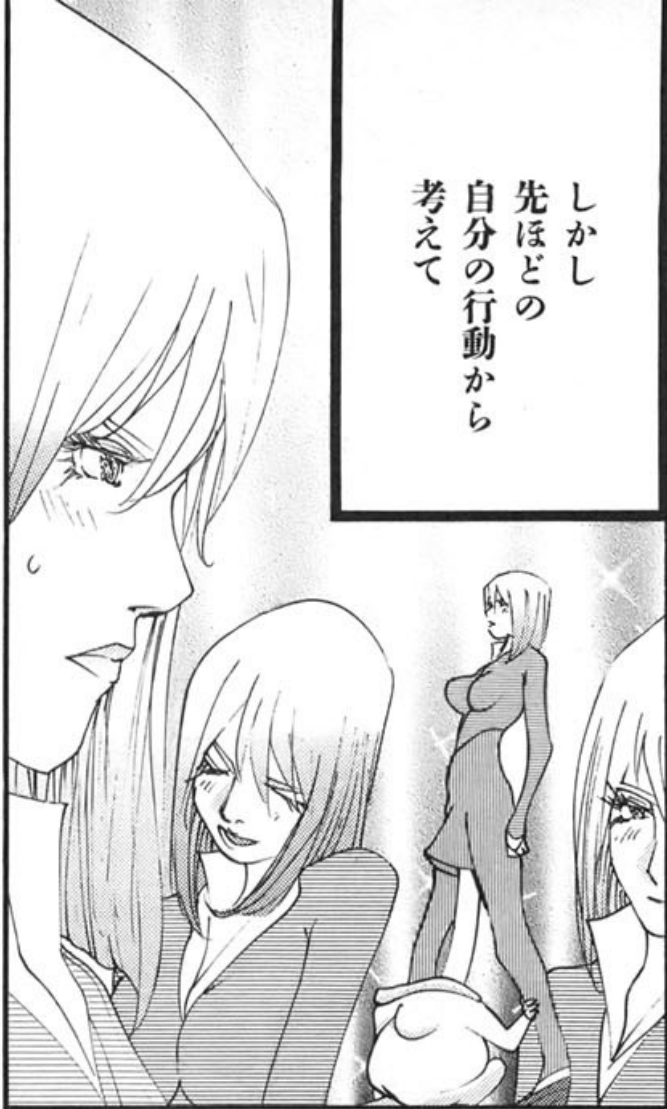
麟一郎にも
生理的必要性は
あると思われた



しかし
先ほどの
自分の行動から
考えて



導尿管を
挿入する
作業に



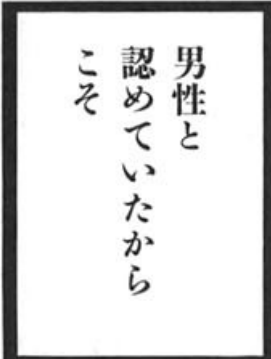
立ち会う
ことは
躊躇された



それを
見るのが
恥ずかし
かったのだ



ドリスの
思ったのとは
反対に



男性と
認めていたから
こそ

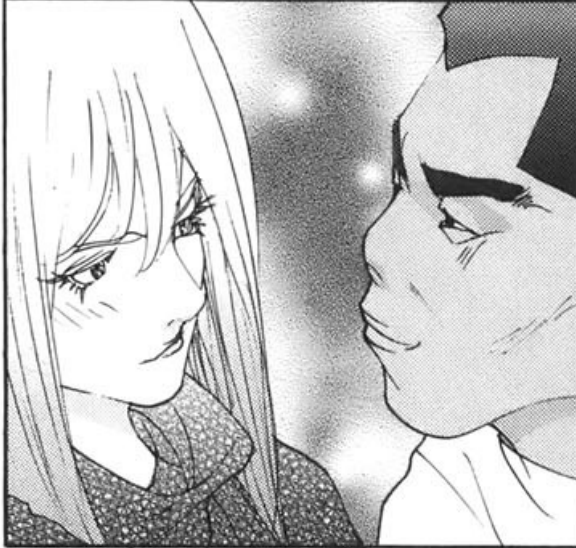
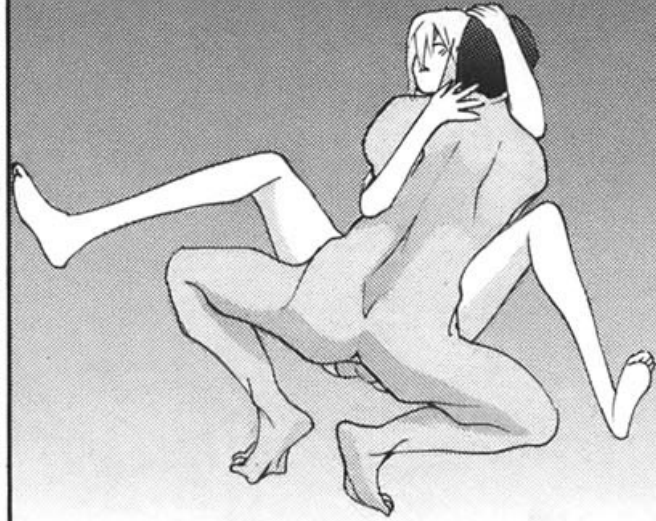


彼女は
麟一郎の人格を
認め

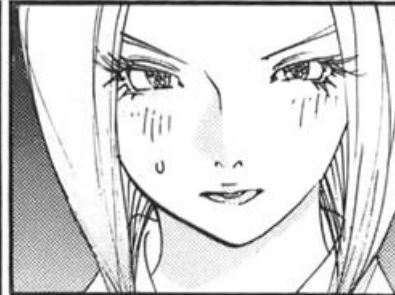
肉体を
知り合った
夫婦なら

そうは
感じなかった
だろうが

净い
恋愛婚約の
間柄でしか
なかった
二人であった



裸で
おいては
肺炎になるから



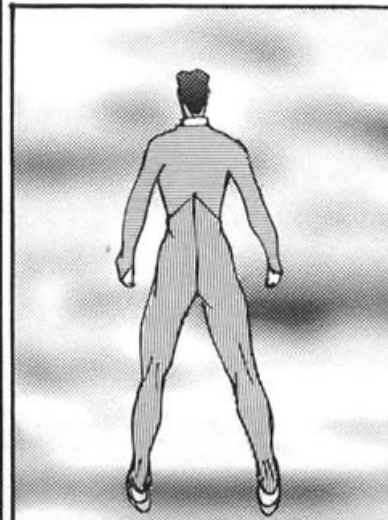
という言葉も
彼女は



その言葉が
何を意味するかを
知ったら

彼女は
別の行動を
取ったかも
しれない

常識的に
彼に服を着せて
くれるのだと
理解した



しかし
ヤブーがすべて
裸でいることなど



全然知らない
彼女が
その真意を
理解できなかつた
のも無理は
なかつた

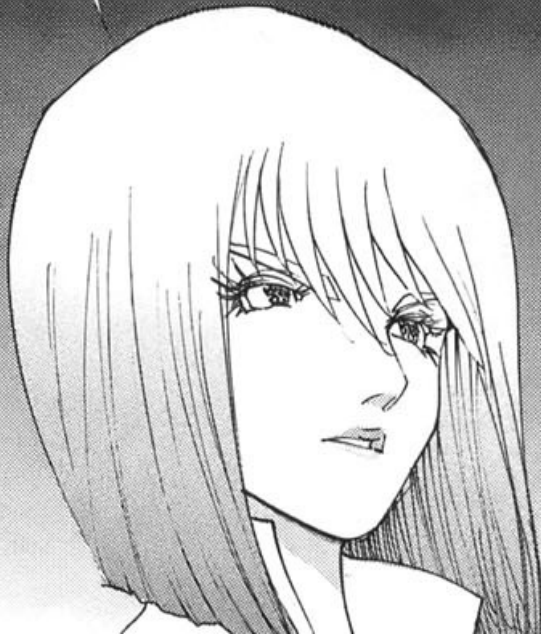
だから
病人を
入院させる
時のような
気持ちで



それじゃ
お任せして

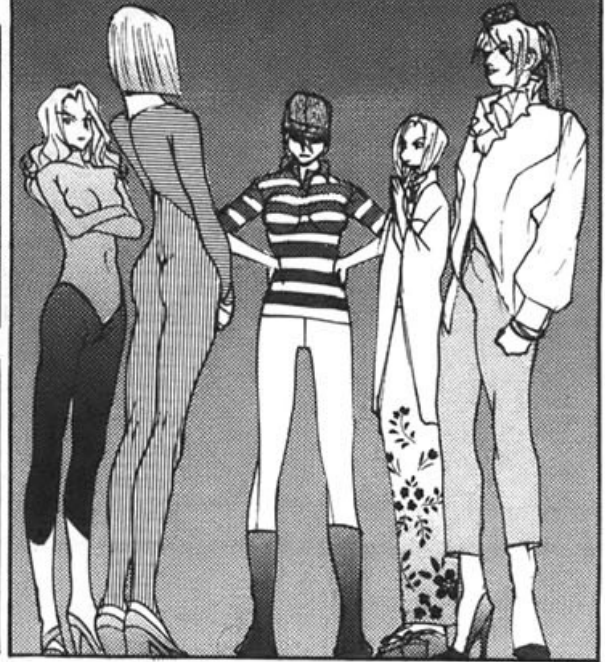
妾は場を
はずし
ますわ

ご案内
いただき
ましょう



と
勧めどおりに
従ったことを
責めるわけには
ゆかない

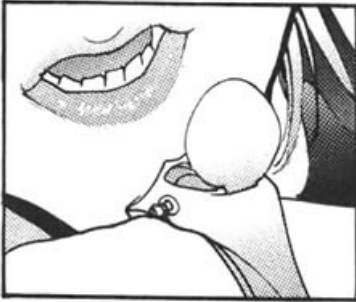
ドリスは
左手首の
腕時計のような
ものの竜頭つぎすを押して
蓋を開くと



口の前に
近寄せ



低い声で
ささやく
ように
いった



今ね

船倉に入れた
円盤の操縦室に
いるんだけど

お客様が
土着ヤプーを
お連れになって

それが
衝撃牙に
やられてる

いつも
ネアンデルタールに
使う棺クラシは積んでる
だろう？

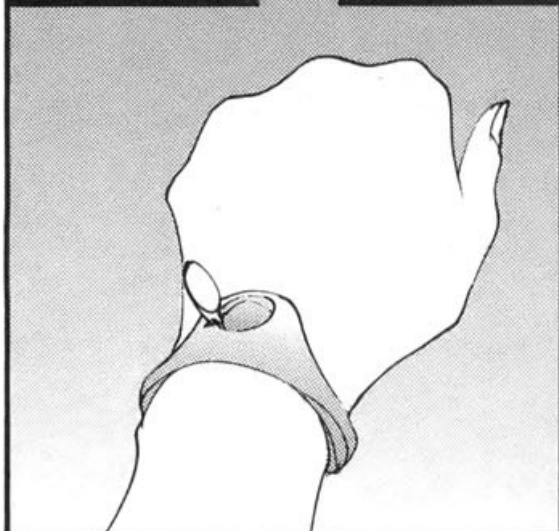


…じゃ

ゲーム・シエツド
獲物置場から
すぐ二人
お寄越し

これは
リスト・マイク
腕送話器という

黒奴使役用の
間接小型指令機で
あった



リビングファニチュア
生体家具の
発達した
今日でも



昔ながらの
生活様式を
維持した面が
上流になると
たくさんあるので

どうしても
生体家具だけでは
用が足りない

貴族は
家庭内に
黒奴を



養って
いる



たとえば
食事などは
給仕人を

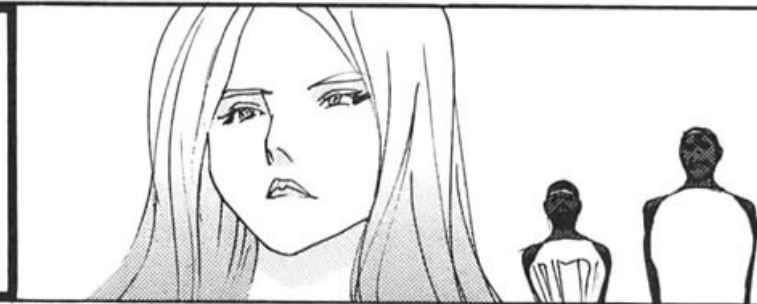


後方に
侍立させるのが
貴族の家庭の
習わしだが

この
給仕人には
ヤブーでなく
黒奴を
使うのだ



こういう
白人家庭内で
使役される
連中は選抜
された



最優秀黒奴で
あつて
これを
召使^{ポリー}いまたは
従僕^{フットマン}と称し

黒奴の
最高階級を
形成していた

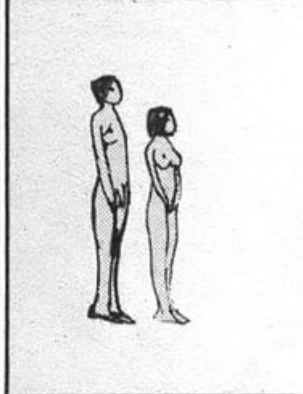


※ また仕掛け得るほどIQの高いのも稀である

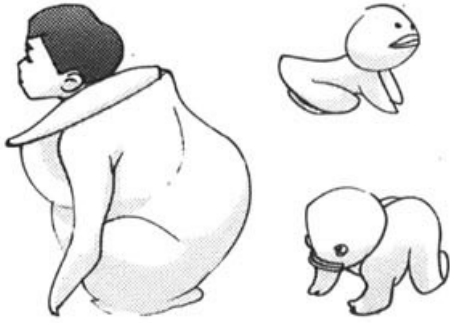
黒奴は
半人間として
ヤプーと違い



多少は人権を
認められて
いるので



※
その肉体に
読心装置を
仕掛けることが
できない



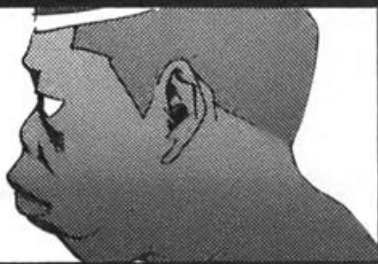
そこで
彼らへの
命令伝達には



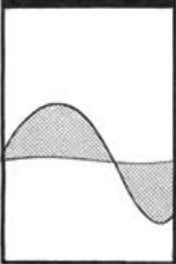
マイクロ・ウェイヴ
超短波放送が
用いられる



召使いは
すべて
脳外科手術に
よって
ビルトイン・イヤホン
内蔵受話器を
耳殻内部外聴道下方に
装置され



固有周波数を
与えられる



指令機という
シガレット・ケース大の
送話器に命令を
吹き込めば



それは
極小型の
放送局になって
いるので
直ちに
電波となり

召使いの
耳の中で



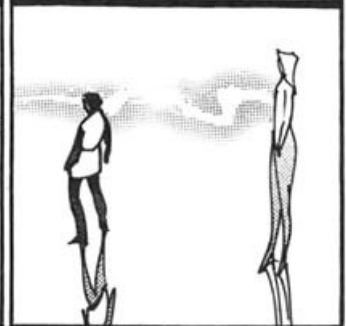
音波に戻って
命令として
響き渡る

特定の
受信者一人を
相手にする
放送だが

召使い側には
受信しない
自由はなく

たとえ
眠っている時でも
命令が耳の中で
鳴り響くのを

どうすることも
できない



これを
頭蓋内臓受話器
という



しかし
命令する
主人の側では

各召使いの
周波数を
覚えたり
発令ごとに
セットしたり
する手間を
面倒くさがって

召使頭に
直接指令機を
持たせ

自分は
間接指令機で
召使頭に
命令するのが
常である



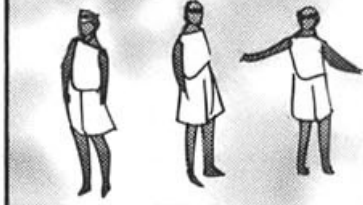
※ この利用は、主人の命令を受けるだけにとどまらない。たとえばイース貴族は健康見張番を持つが、これは主人の心臓の鼓動を短波で受けて増幅したものを四六時中聞かされている従番である

間接指令機は
召使頭たちの
耳の中の
受話器を対象に

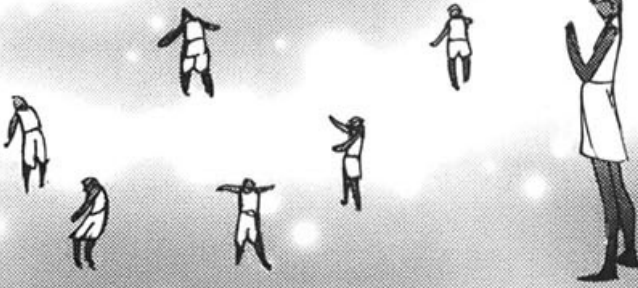


その人数だけの
周波数で足りるので
極小型にできる

これが
腕送話器なので
ある



各召使頭は別に
脳波追跡装置で
輩下十数名の
召使いの
現位置を常に
掌握し



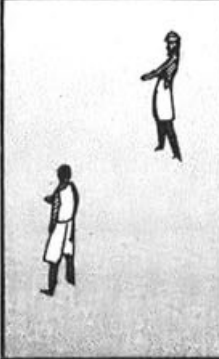
主人の
命令を受けて



適当な
召使いを
選んで



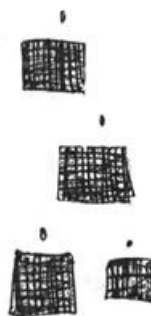
作業させ
監督する



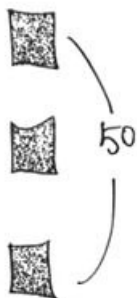
別名を
トランス
中継奴ともいう



普通職場単位に
一組を構成するが



「^{グレイシア}氷河号」にも
五十数名の
黒奴船員がいるので



これが三組に
分かれている



ドリスは
乗り込むと同時に



この船の
腕送話器を
腕につけて
いたのである

ね
クララ嬢



これで
安心してしょ



さあ
皆
上の大広間に
行きましょう



ドリスが
先に立った



ポーリーンが
クララを
促すように
誘ったが



私は
後から…

と譲った

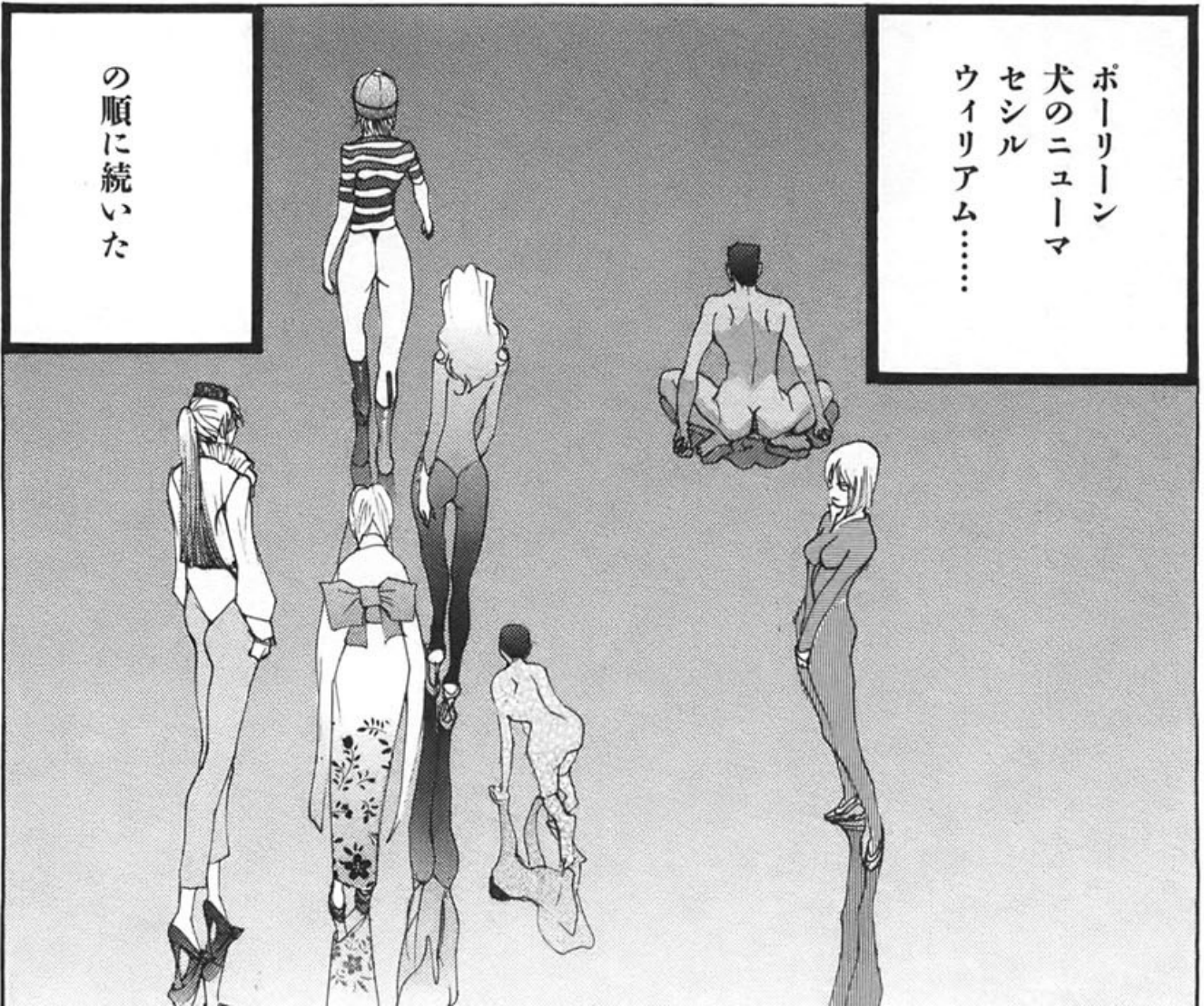


クララは



ポーリーン
犬のニューマ
セシル
ウイリアム……

の順に続いた

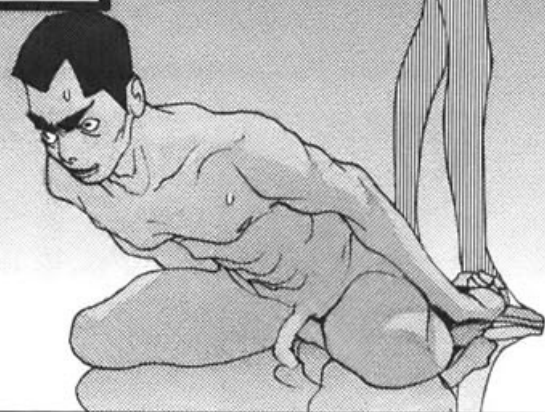


クララは
最後に一人で
麟一郎に

一言慰めと
励ましの
言葉を
かけてから

いっしょに
行こう

と思って
残っていたので



ドレイバア青年が
立ち止り

につこりと
手を差し伸ばして
彼女を待っているのを
見ながら

いったんは
踵を返して
部屋のすみに
近づきかけたのだが

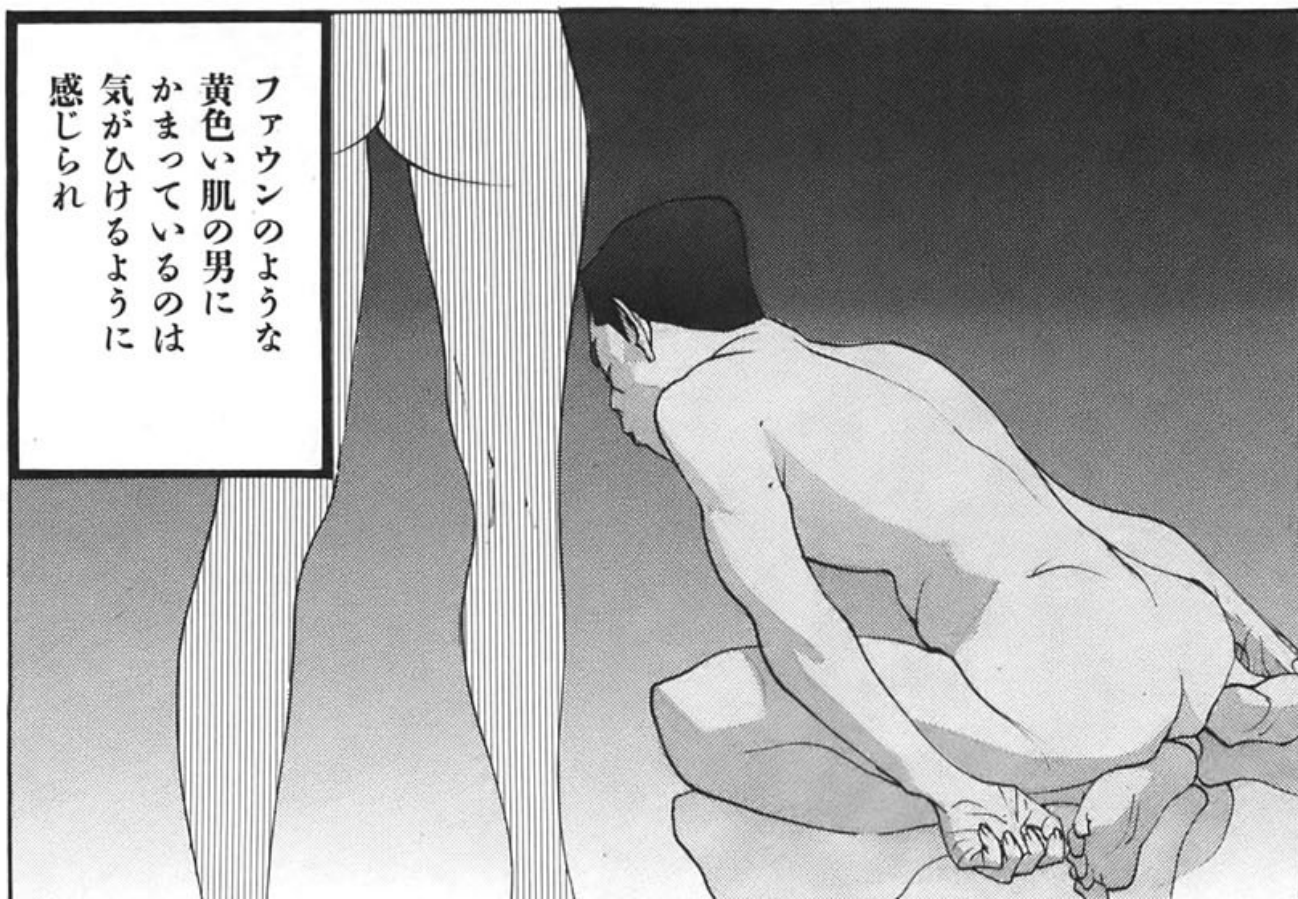




裸のまま
四つん這いに
なった
隣一郎の姿が
目にはいると



アポロのような
美青年を待たせて
おいて



ファウンのような
黄色い肌の男に
かまっているのは
気がひけるように
感じられ

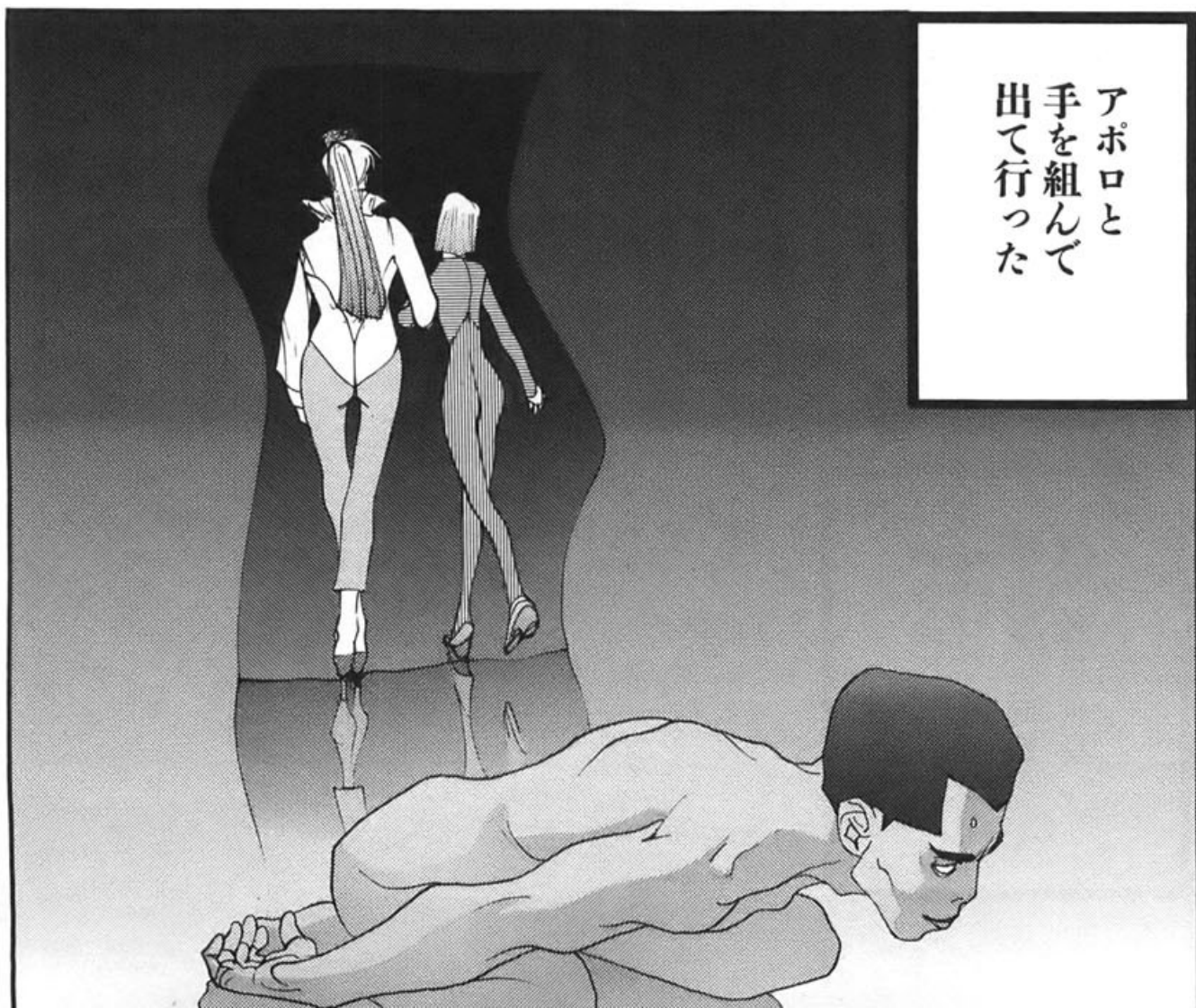
にわかに
思い返すと



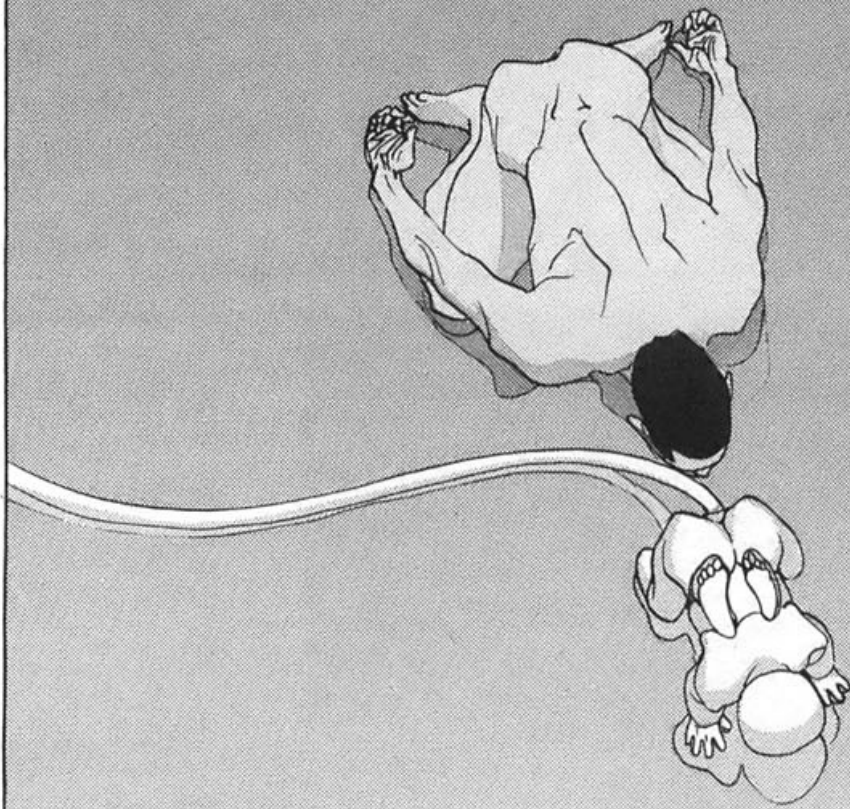
そのまま
言葉を掛けずに
回れ右して



アポロと
手を組んで
出て行った

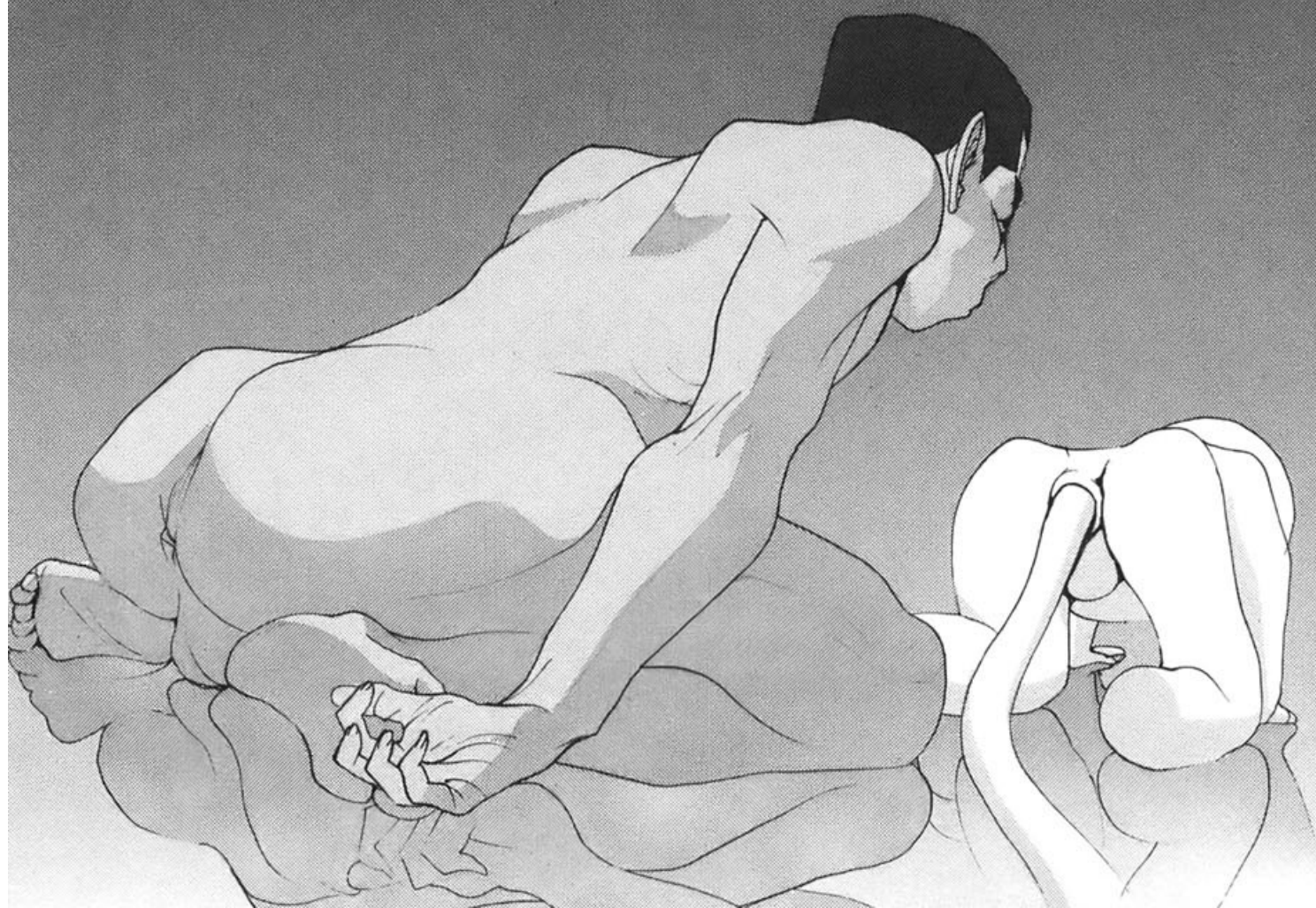


あとには
スツール
肉足台の舌人形と
並んで
カニリンガ




床の上に
這いつくばった
麟一郎が寂しく
取り残された

—クララ
行かないでくれ
僕を見捨てないでくれ



心中必死に
呼びかけたが

唇ひとつ
動かせぬ
もどかしさ…



室内は
ますます冷え
尿意も迫って来た

柔らかい
フレツシー・メタル
肉質金属の
床なので

足音は
少しも
しないが



うずくまつたまま
神経をとぎすませて
いた麟一郎には

人の近づいて来る
気配がわかった

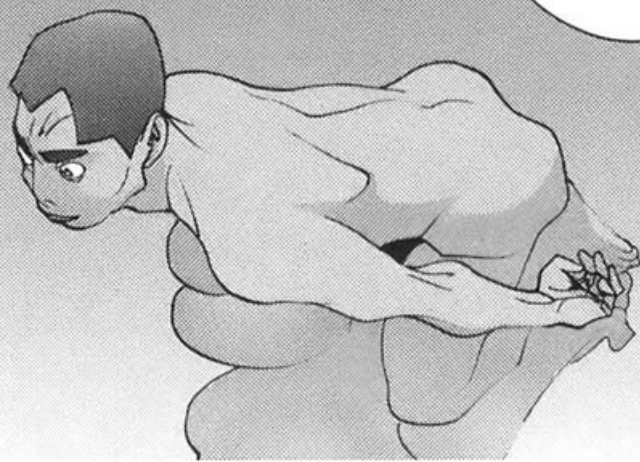
——クララが
帰って来てくれたのか？

と喜んだ時
扉が開いて

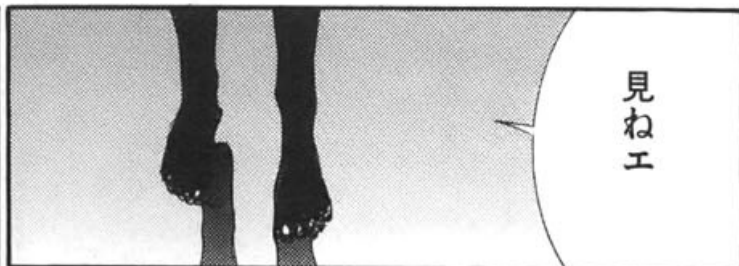
これか

なかなかいい
肉づきじゃ
ねエか

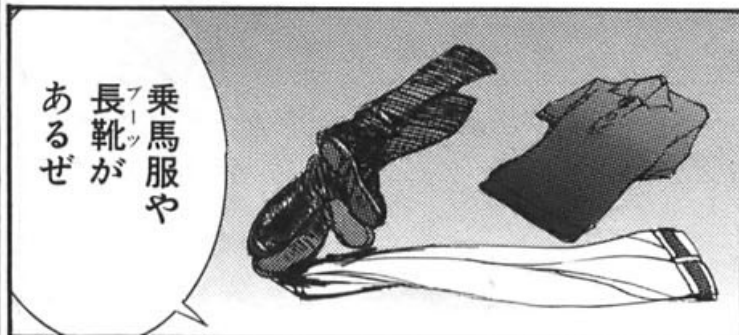
この部屋で
脱がせて
裸にしたらしい



見ねエ



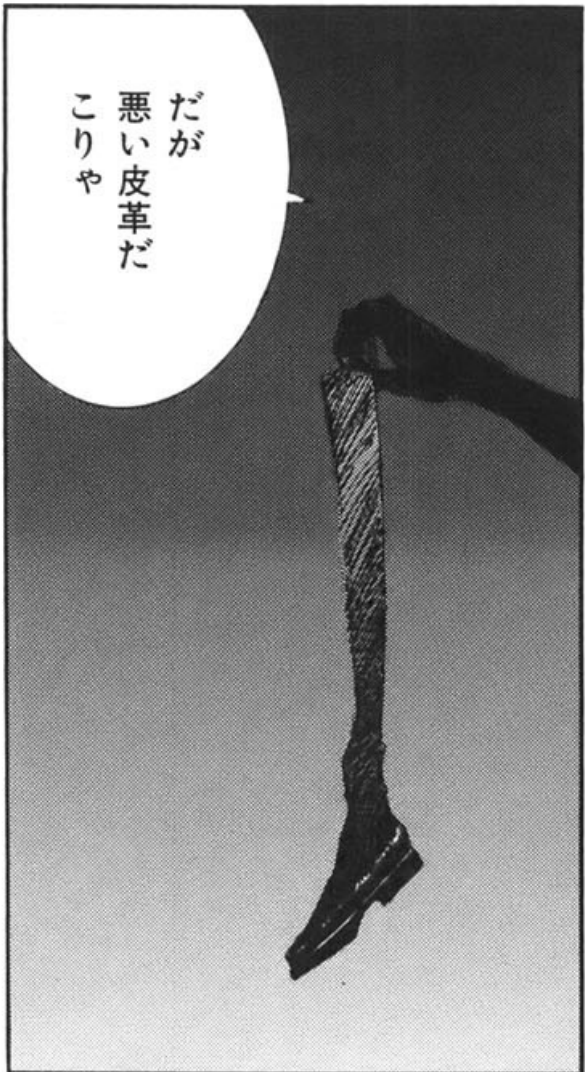
乗馬服や
ブーツが
長靴が
あるぜ



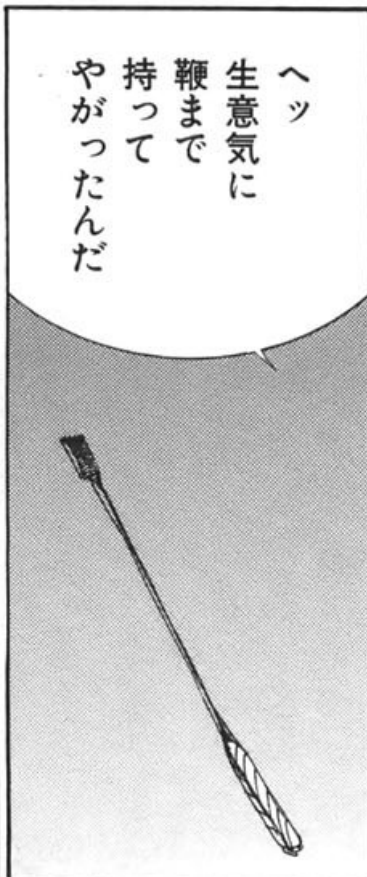
ヤプーの分際で
馬に騎ってたって
わけだな…



だが
悪い皮革だ
こりや



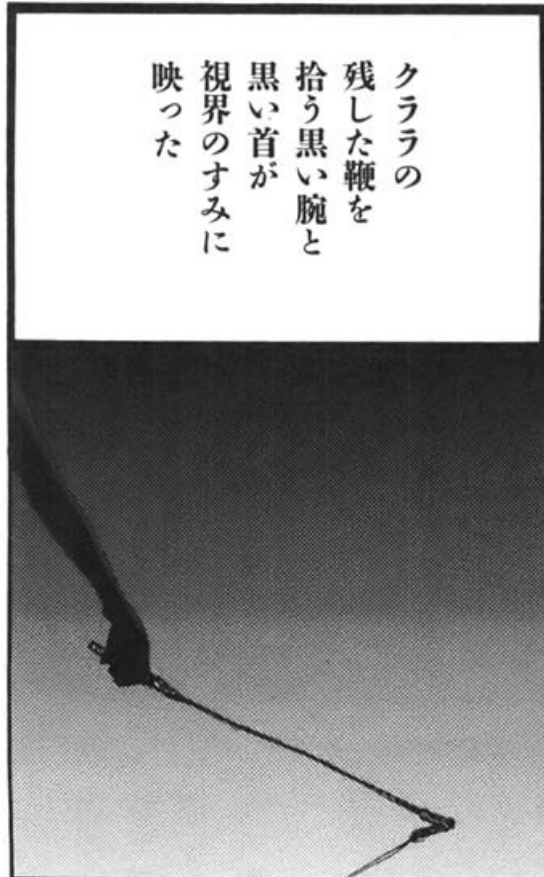
へッ
生意気に
鞭まで
持って
やがったんだ



下品な
言葉づかいの
会話とともに



クララの
残した鞭を
拾う黒い腕と
黒い首が
視界のすみ
に映った



黒人
二人らしい

若奥様が
お獲んなすった
のかと思っただが
そうじゃねえん
だって？

うん
今来る途中で
押んだ中に
お客様が
いらしたろう？


あのお方の
飼ヤプーよ

飼ヤプーたって
首輪してねエ：


見ろ

バカ
これから
登録しようてん
じゃねえか

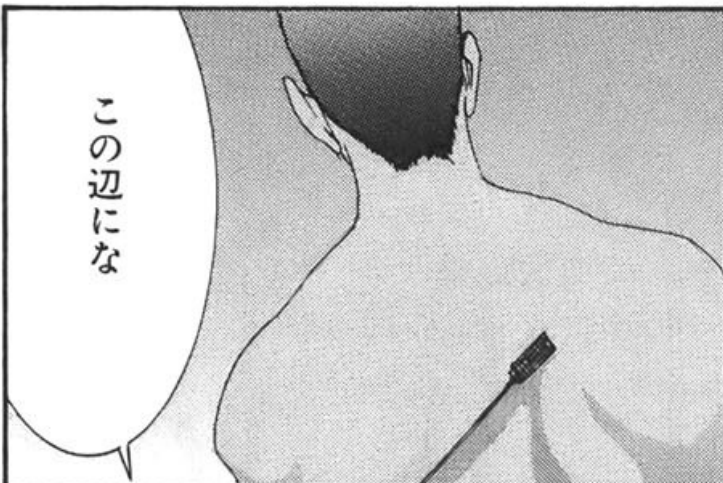
珍棒^{チンゴ}で
飼ヤプーに
慣らそう
てんだよ



背中なのっぺり
してること…



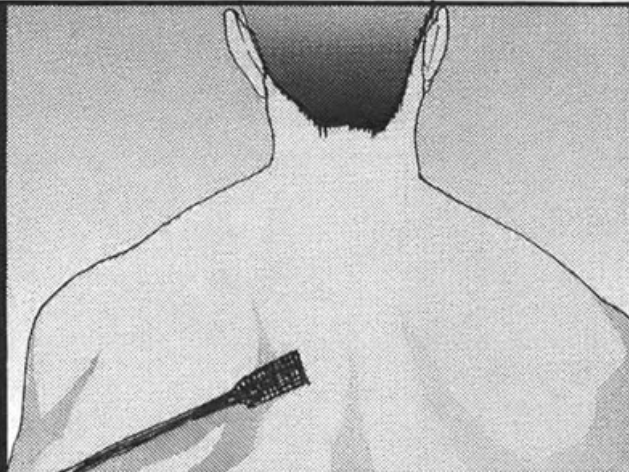
そのうち
あのお方の
お手々で
綺麗な模様
ができるって
わけか



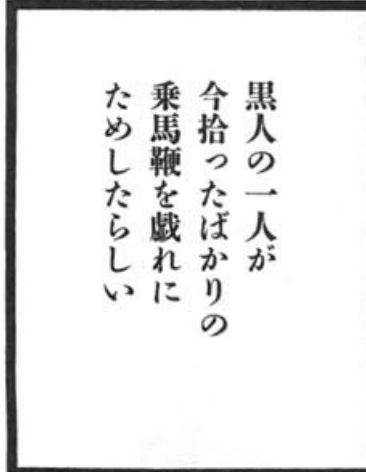
この辺にな



ピシリ



麟一郎の
背中に軽く
鞭が当たった

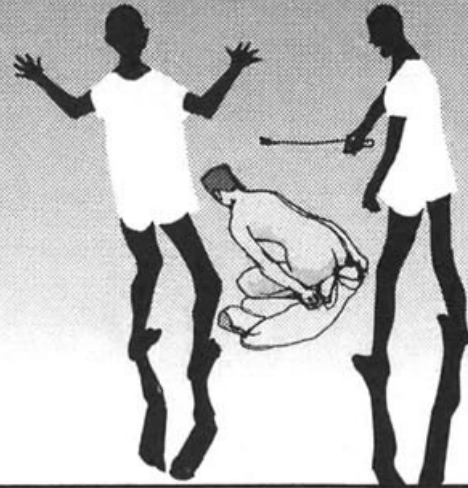


黒人の一人が
今拾ったばかりの
乗馬鞭を戯れに
ためしたらしい

アッ

お前

そんなこと
していいのか



この
土着ヤプーの
背中は
「鞭の処女地」
なんだ

それを
命令も
なしに…

いや
今のは鞭ったん
じゃねエ

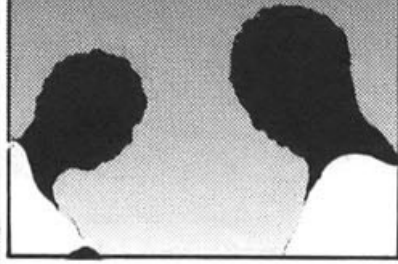
冗談に
当てただけだ

とんでもねエ
断じて鞭ったんじゃ
ねエ…

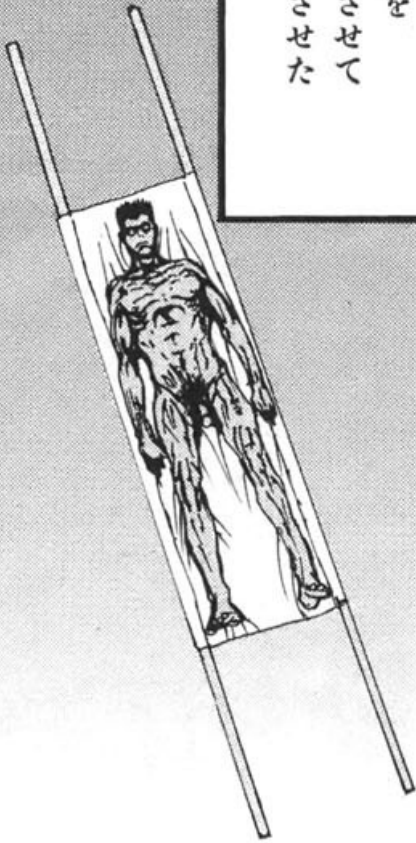
どうだか

とにかく
今日俺は
報告するからな

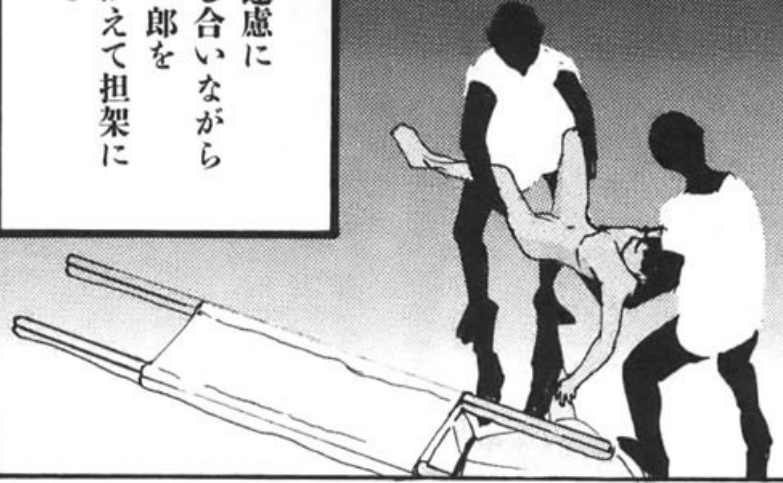
ヤブーには
自分たちの
話はわからぬ
ものと
思い込んでいる
二人は



手足を
伸ばさせて
仰臥させた



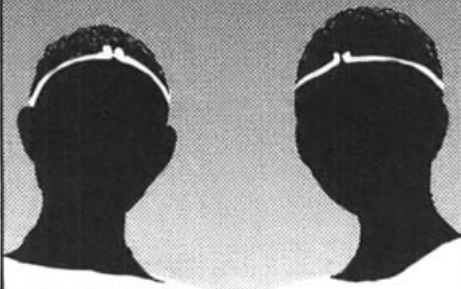
無遠慮に
話し合いながら
鱗一郎を
かかえて担架に
乗せ



目のすみに
見える彼らの
頭部を見て



前額部で
拌み合わさって
短く上にはねた
孫悟空の



鱗一郎は
「西遊記」の
孫悟空を連想した

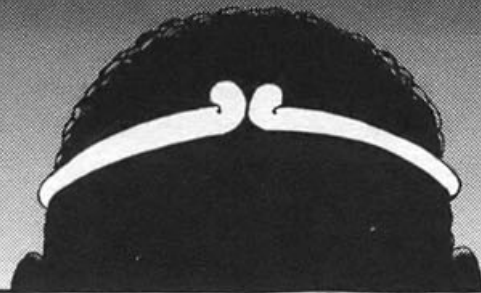


金の鉢巻に
そっくりの
金属輪を
二人とも
巻いていたから
あった



後頭部を
一周した末

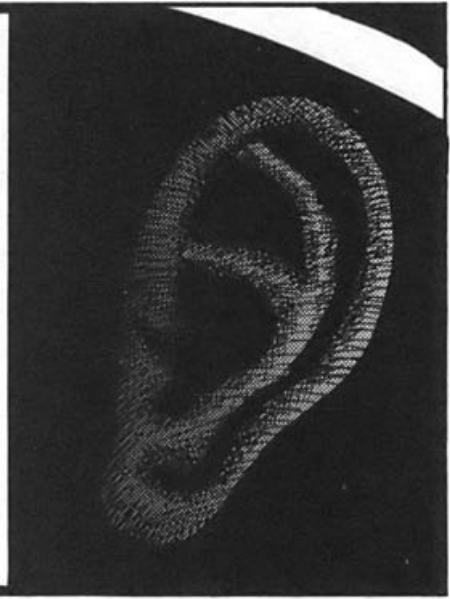
これは
実は



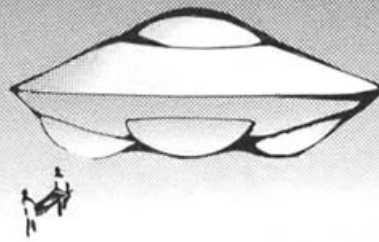
前述の頭蓋内蔵受話器と
ともに召使族の肉体の
一部に化しているものである



彼らの耳内に
存在する
受信装置の
アンテナで



担架は
円盤艇を
出て



半袖シャツ
半ズボンの
白地の制服らしい
背中には



船倉の
高い天井の下に
出た



今さっき
ニューマの額に
彫りつけてあるのを
見た双頭の鷲の紋章が



目の玉が
動かせないので
はつきりとは
見えないが



胸のほうには
何か数字が



各召使いの
固有番号を
示す数字なのだった



見えた



麟一郎には
何とも見当が
つかなかったが



鞭を
ふるったほうが
G 8号

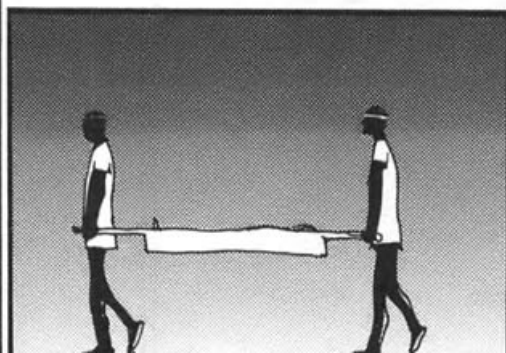


黒奴食料に
含まれている
アルコールリゼン
酒精転化素の
副作用で
平均身長は
百六十五センチ以下に
抑えられているのである

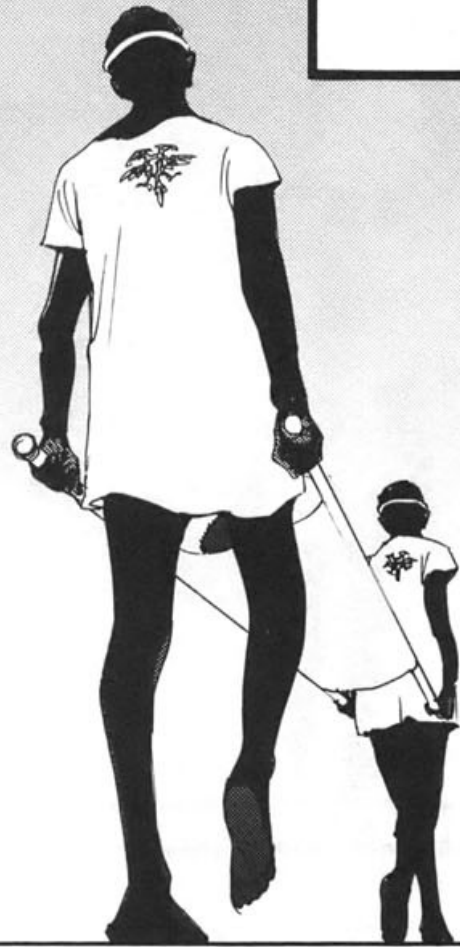
もう一人が
G 13号である



身長はどちらも
百六十センチ前後だ



高い天井が
にわかに低く
なった



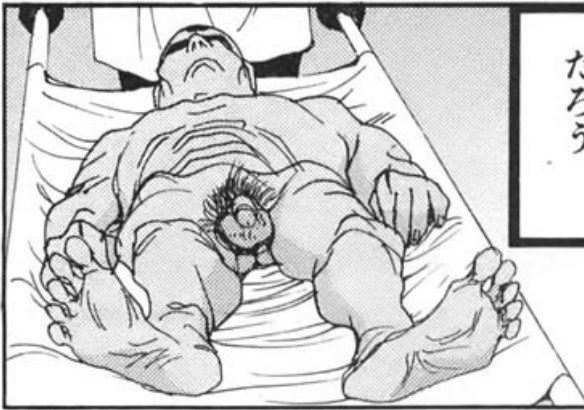
ゲイム・シエツド
獲物置場に
来たのだ



さらに
寒くなってきた



氷点近い
だろう



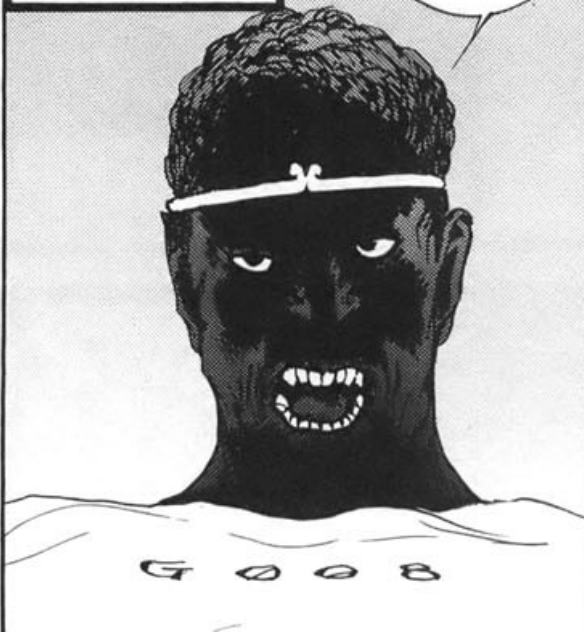
可哀そうに
鳥肌立てて
やがら

すぐ
温かに
してやるって
ことよ…



オイ
ヤプー

急に
日本語になって



手前
今マデハ
人間ミテエニ
着物ヲ着テタン
ダロ

サゾ
面倒クサカッタ
ロウナ

安心シナ
コノ棺ニハイリヤ

ソシナ
面倒ハ
ナクナルン
ダカラ……

G O O B

手前ハ
着物ノ要ラナイ
体ニナルンダ

アリガテエト
思イナ

御主人様ノ
思召シテ

ソノウチニヤ
飲ミ食イモ
無用ニナルツテネ

口々に
毒づきながら
無気味な予言をする

……

担架から
下ろされる時に
視野に周囲の情景が
写ったが

エジプトの
ミイラの棺のような
ものを載せた寝台くらいの高さの台が数脚見えるだけの
殺風景な部屋だった

設備があると
いうのは
この台のことであ
らうか？

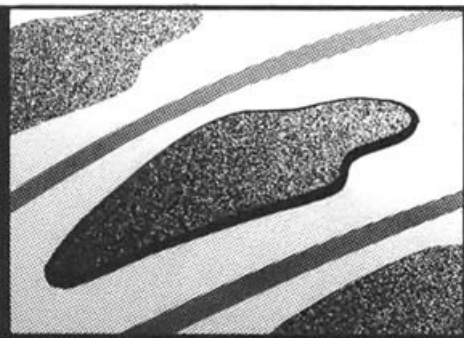
鱗一郎は
知る由も
なかったが



ズボンの下が
割れて
重ね合せに
なっているの

ちょうど下着の
コンビネーションと
同じなのだ

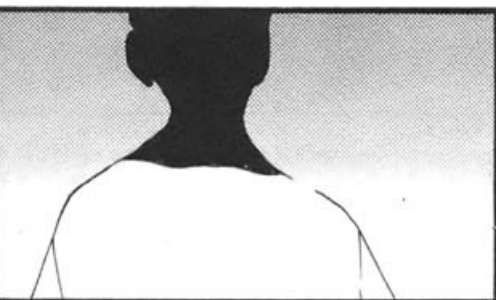
これは
皮膚瘻^{スキンファス}という
ものだった



それより
驚いたのは

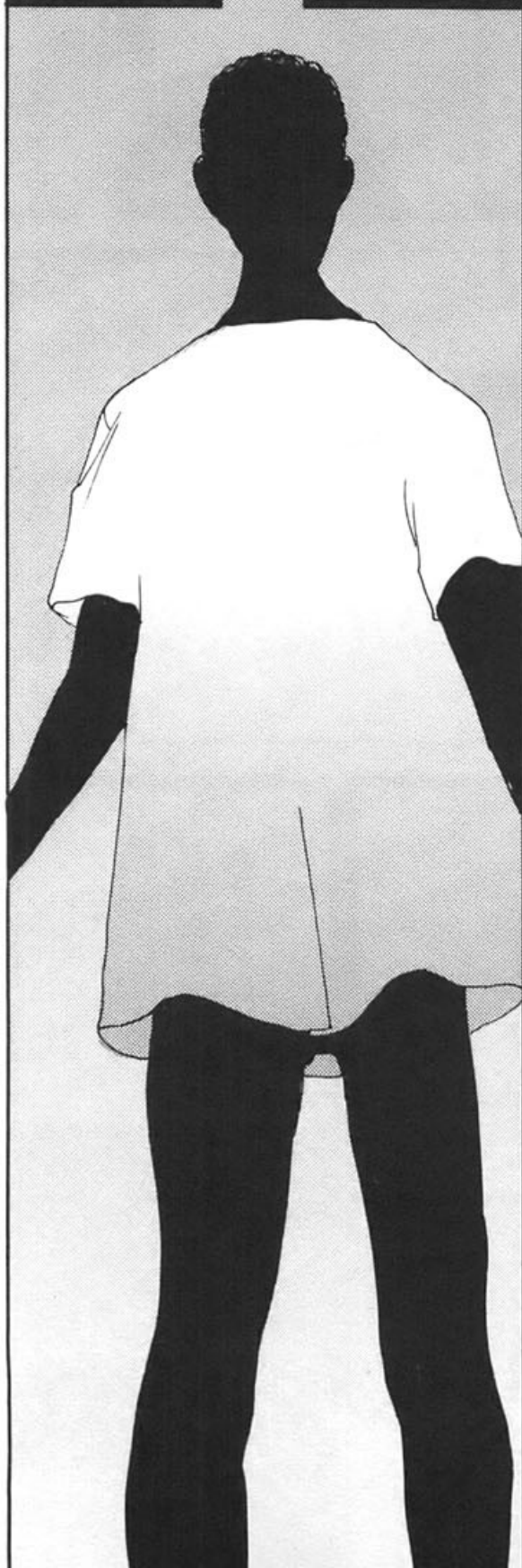


黒人どもの
服であった

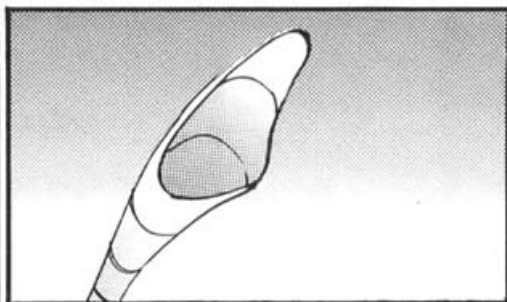


半袖シャツ
半ズボンと
思ったのは

両方連結
していたし



これは
真空便管の
先端器を
使用するのに

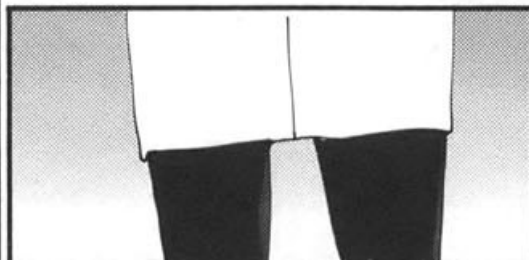


すぐ臀部を
露出させることが
できるように
するにあつた

便利な
ためも
あるが



おもな
ねらいは



バスターネード
懲罰鞭打に
際して



イース中
どこでも
召使族の
お仕着せは

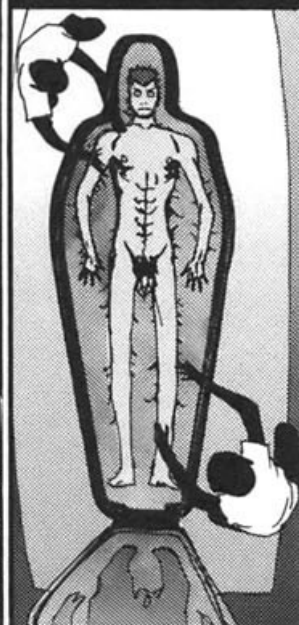
この
コンビネーション仕立の
服と定まっているので
ある

が
よく眺める
暇もなく

麟一郎は
人型の棺の
一つに



入れられて
しまった



内部は
例の肉質金属で
人体に合わせて
えぐってあり



ほとんど
隙間を
感じない



足裏に何か
薬を塗られ



蓋が
閉ざされた



ただでさえ
全身麻痺の身が



耳目も
奪われて



完全に
外界と遮断
されて
しまったのである

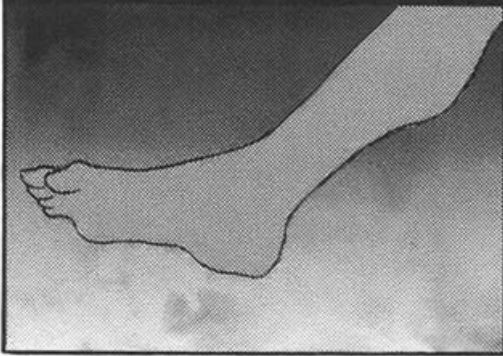


肉壁が
だんだん膨張
してきて

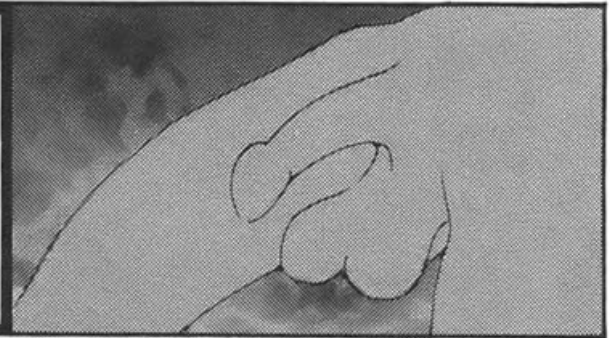


同時に
その温度が
上がって

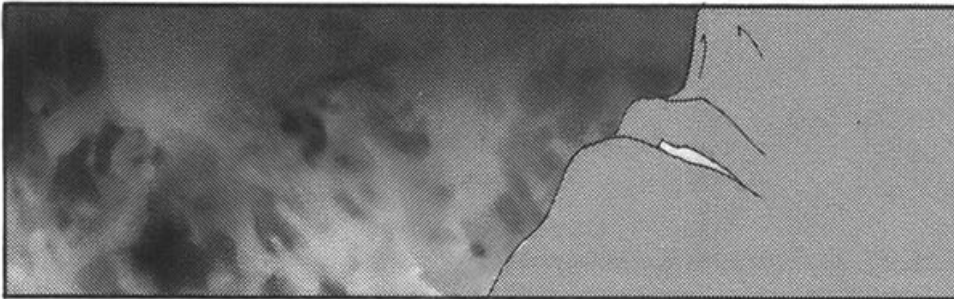
体温と
同じになった



全身の表面を
ピタリと
おおった



呼吸は
何ともない

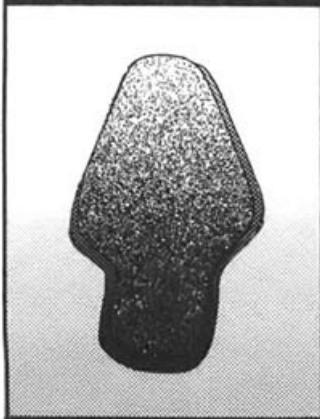


入浴のような
快適さに

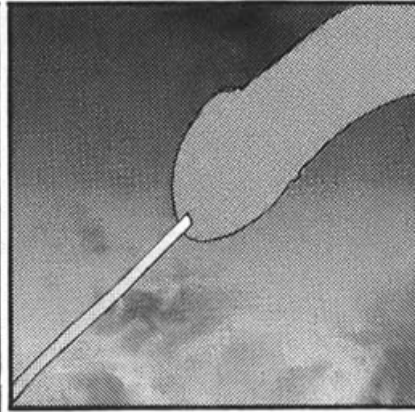
なるほど
この中にはいれば
着物は要るまい

と麟一郎は
先ほどの黒人の
言葉を理解した

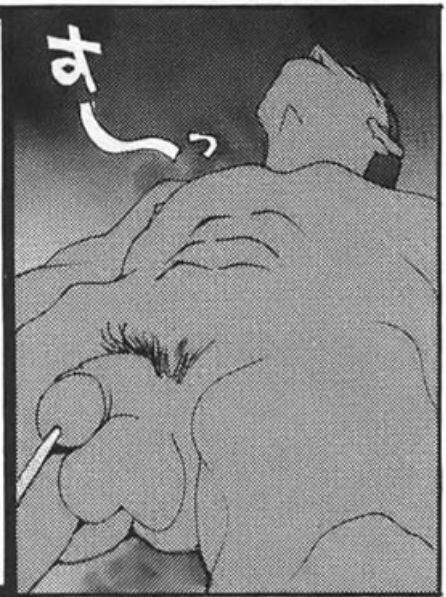
外から
操作する仕掛けでも
あるらしく



その時
そろそろと導尿管が
挿入された



彼は
セシルと称ばれた
白人にひそかに
感謝した



膀胱の緊張が
解けて楽になった時

と
気持の悪いことが
起った



肉壁の膨張で
わずかばかり
押し開けられた
両唇の間から



何か細長いものが
口の中へ
はいつて来たのだ

ちゅるるる



しかも
蠕動していた



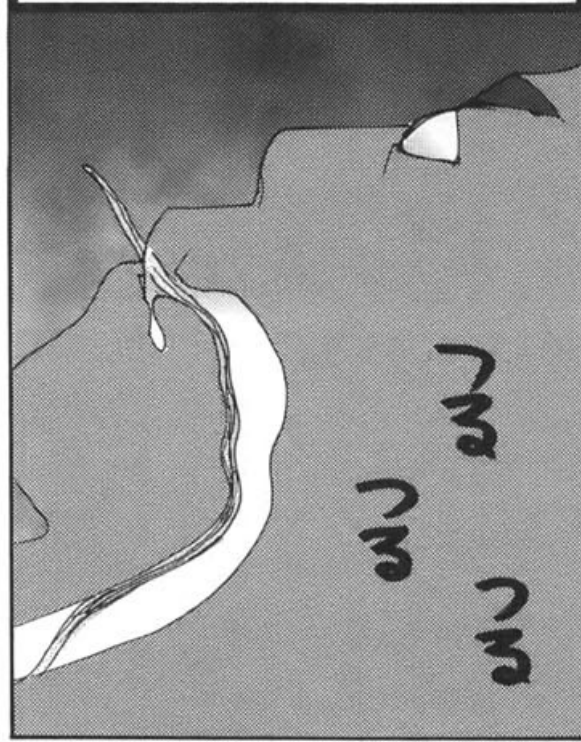
生きているのだ



蚯蚓か
蛭のような
長虫らしかった



それが
麻痺した
舌の上を伝わって
咽喉から
そろそろと
食道のほうに
はいつてゆく



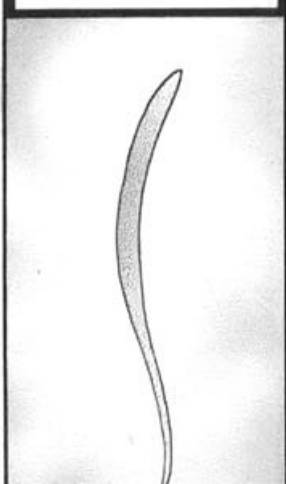
何という
気味悪さ！



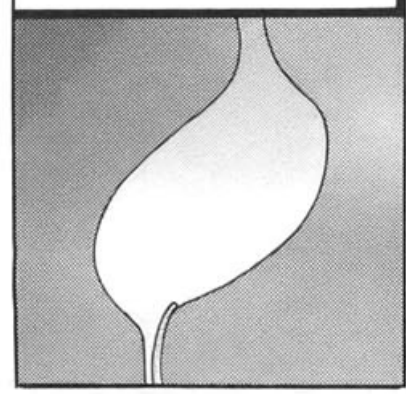
読者諸君には
説明するまでもない



これは
エンジン虫の
幼虫であった



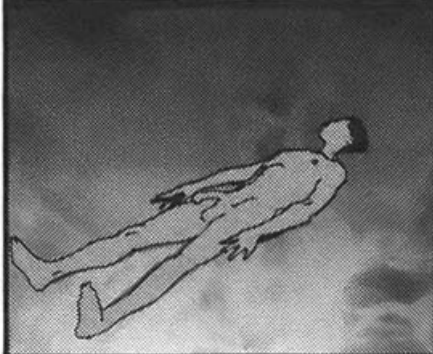
胃にはいり
幽門に取りついて
急速に尾部を
成長させてゆく



ヤブーの
赤ん坊に生後すぐ
吞ませた時で
十時間



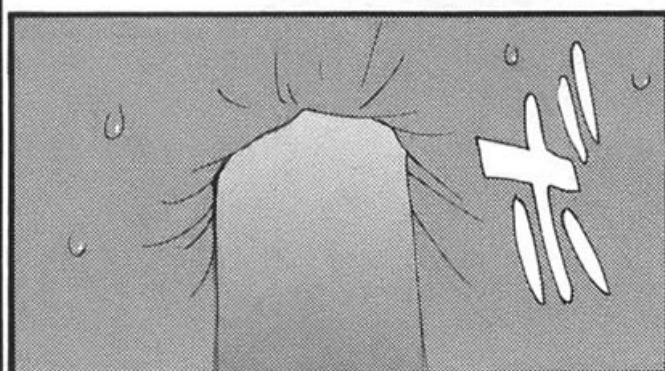
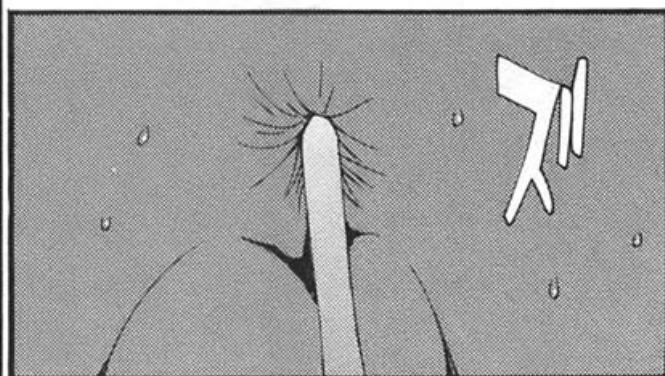
成人ヤブーでは
約百時間が
尾部の成長に
費やされるはずである



…あと百時間の
うちには
いろいろなことが
起るだろうが…



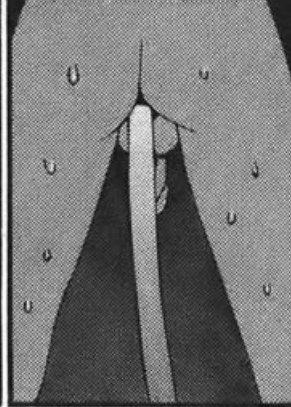
今度は肛門に
何か挿入されるのを
感じた



また虫か？



と
思ったが
今度はそうでなく



細長い管
らしかった



浣腸だろうか？



ただの
クリスタル
浣腸器にしては
ひどく
長いようだ



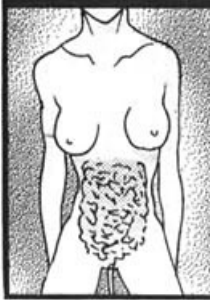
腸内奥深く
はいつてゆく



これが
腸内注入管
と称ばれる
ヤブー用の
投薬具であった



「^{バナシテ}神薬」
以外は腸内注入
するのが



ヤブーへの
投薬の
原則である



腹腔に
何か
温かいものが



あふれるような
感じがし



何を
浣腸したのか？



と
怪しむ間もなく
体中がほてり出した



弾力的にビタリと
全身の皮膚に
密着していた



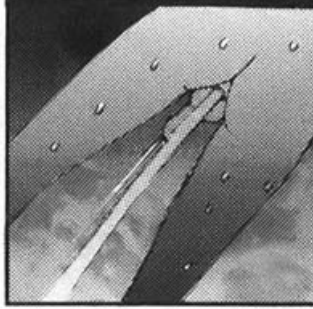
肉質金属の
温度が
だんだん
上昇して
きたのであった



体温を
とうに超し



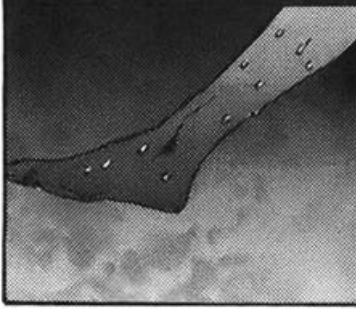
摂氏
四十度以上五十度
にも達したろうか



カッカと
脂汗がにじみ出て



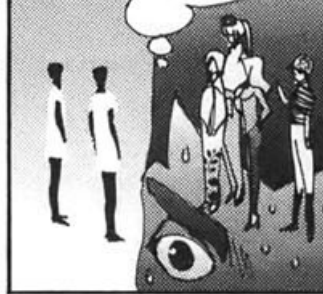
それは
肉質金属に
吸われてゆくのである



——
いったい何事だ？



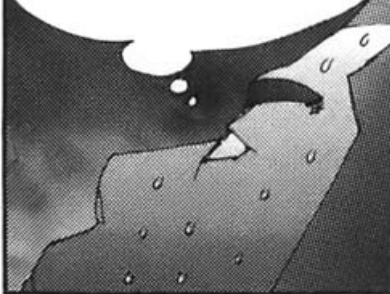
この
黒人たちは
あの白人から



俺を保温気に入れて
温めてやれ
尿をとってやれ



と
命ぜられたのに
違くない



この箱が
その保温気なのだ



ところが
奴らは

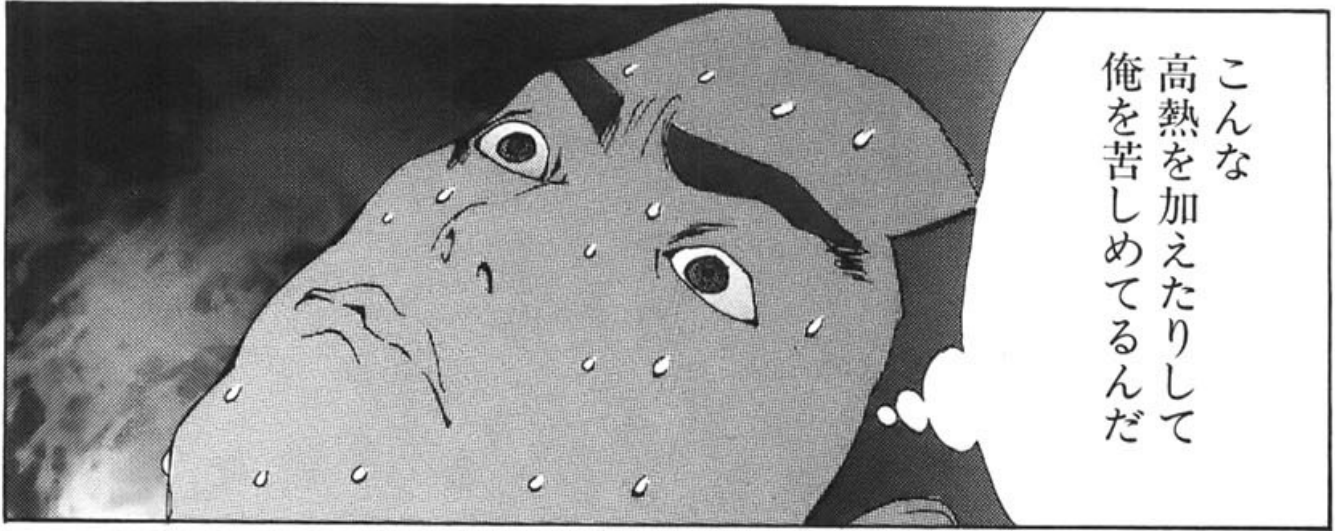


俺に
抵抗力のないのを
いいことに



おもちゃ
玩具にして
気味の悪い虫を
吞ませたり
悪戯の浣腸をしたり





こんな
高熱を加えたりして
俺を苦しめてるんだ



クララ



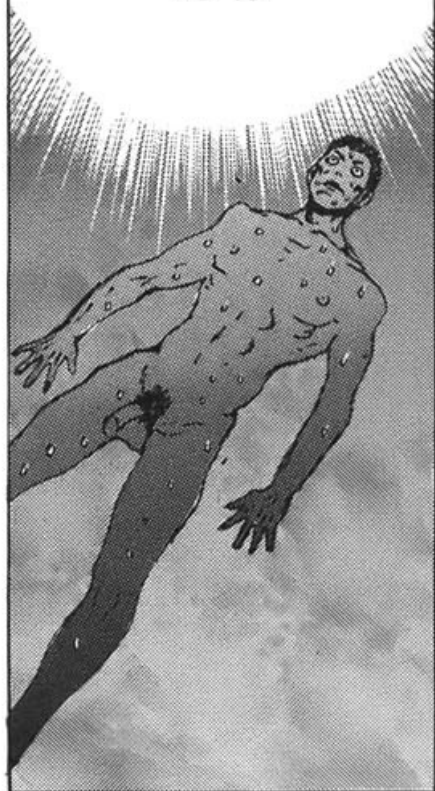
でたらめな黒人たち！
さっきの
あの親切な白人よ

あんたの命令を
黒人は
守ってませんよ

僕の
この苦しみを
知ってるか！
救ってくれ！

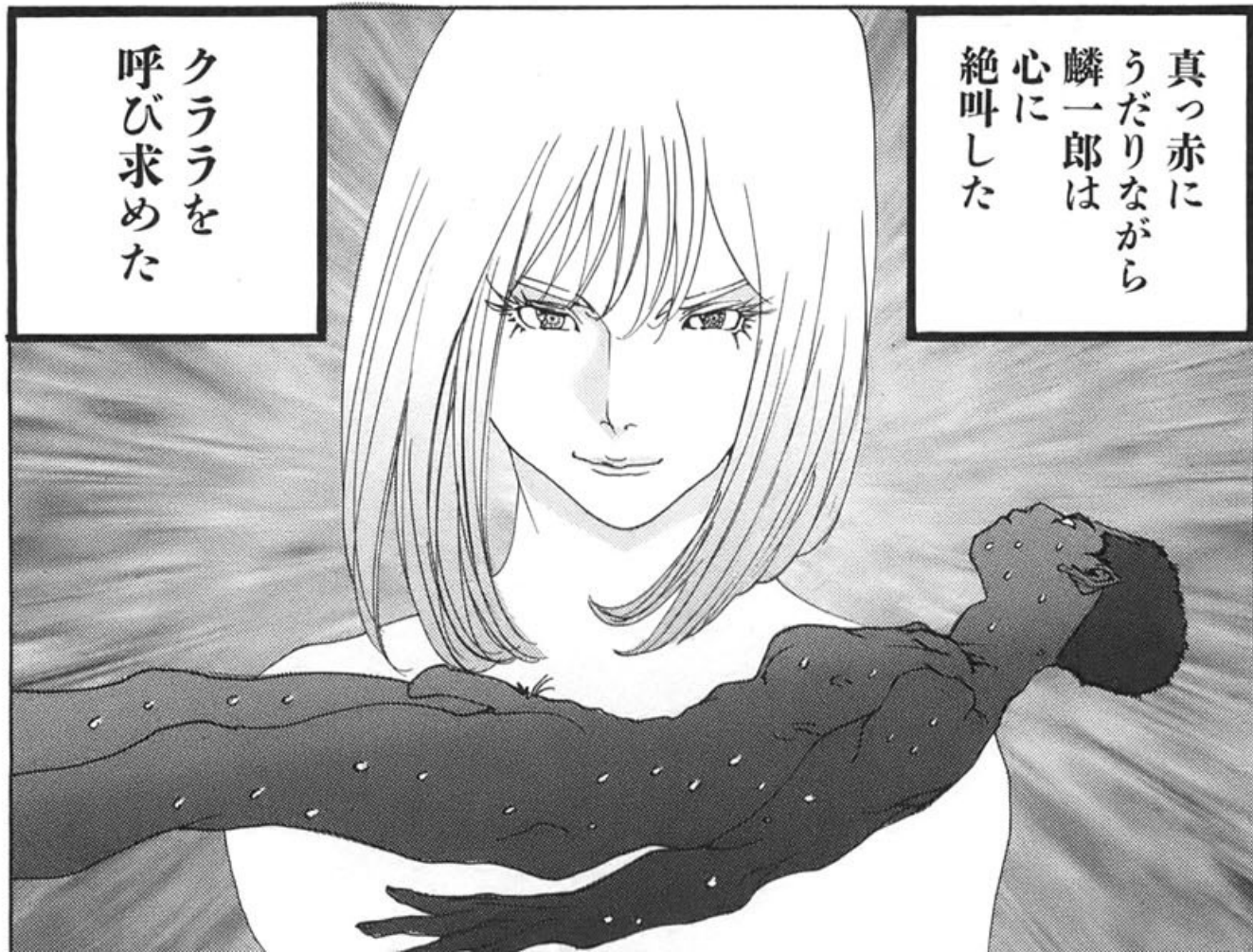
なんで
こんな無意味な
拷問を

僕は受けねば
ならないんだ

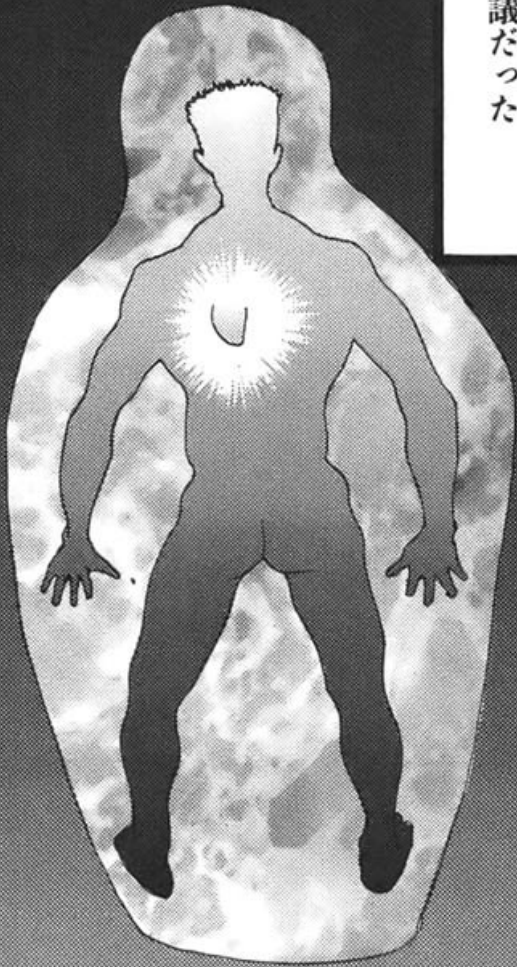


真っ赤に
うだりながら
鱗一郎は
心に
絶叫した

クララを
呼び求めた



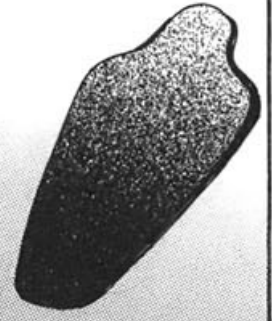
心臓が
破裂しないのが
不思議だった



だが
答えはなしに



温度はかえって
上昇してゆくのが
だった

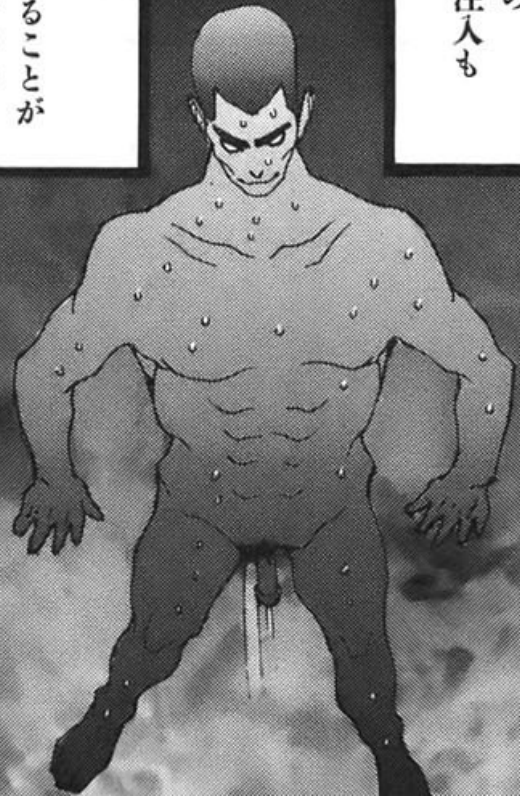


もう
撰氏何度か
わからない

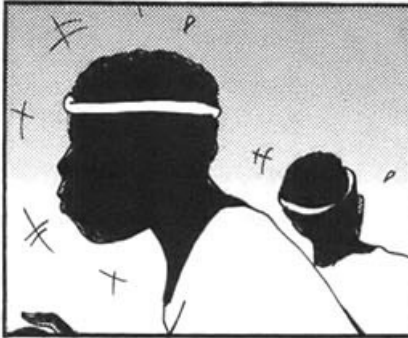


腹腔への
液体の注人も

依然
続いていることが
感じてわかった



窓の外では
黒奴二名が
忙しく作業していた



鱗一郎には
無意味な拷問
と思えたが



実は
拷問でも
無意味でも
なかった



彼らは
決して悪戯を
していたのでもない



新捕獲の
土着ヤプー
一匹が



船倉に入れた
円盤の操縦席にいる

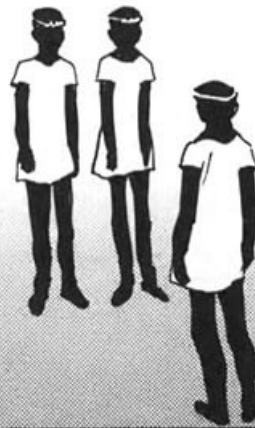


麻痺体

直ちに
受領して
処置せよ



という
召使頭からの
命令を受けて後



獲物置場係の
黒奴として

為慣れた作業を
している
だけであつた



まず窯に入れ
導尿処置をし
エンジン虫を
吞ませ



次に
皮膚強化処置の
最中なのである



皮膚強化処置とは
何か？



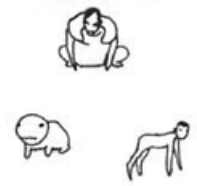
これこそ
エンジン虫寄生と
並んで



ヤプー化に
必須の手続き
である



ヤプーは
完全裸体で
いなければならない



しかし
服を着慣れていた
土着ヤプーを



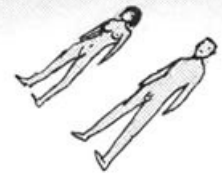
裸にして
放置すれば
肺炎に
なってしまう



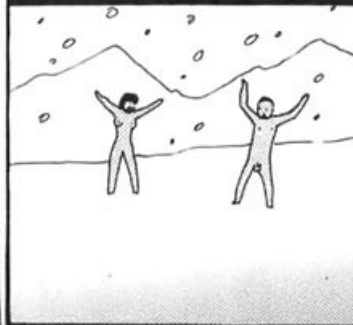
そこで
ヤプーナリ
飼育所では生後直ちに
施行されることに
なっている
皮膚強化処置が



土着ヤプーにも
捕獲後可及的速やかに
施されて



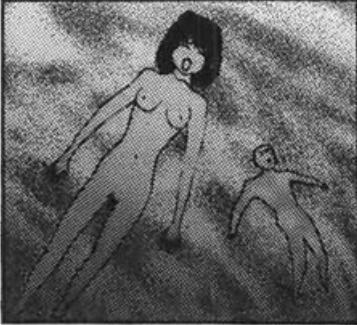
裸のまま
気温の激変に
耐えられるように
するのである



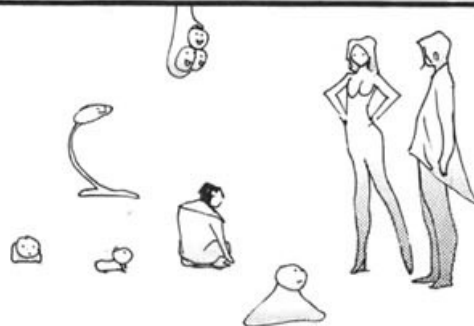
これは
高熱により



非常な
苦痛を
伴うのだが

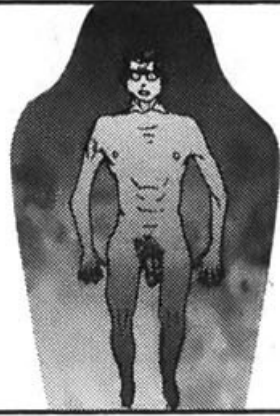


この処置は
ヤプーを使用する
人間にとって
必要にして有益であり



動物は
そのための苦痛を
忍ぶべき
なのだ

その限り
それが
ヤブーたちに
とって



苦痛を伴うか
どうかは
問題にされない

犬の姿を
よくするため



その
苦痛にかまわず
耳をそぎ落として

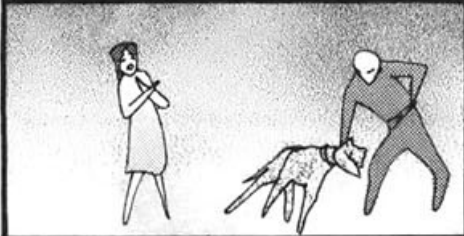


ピンと
立たせるのと
同じ論理である

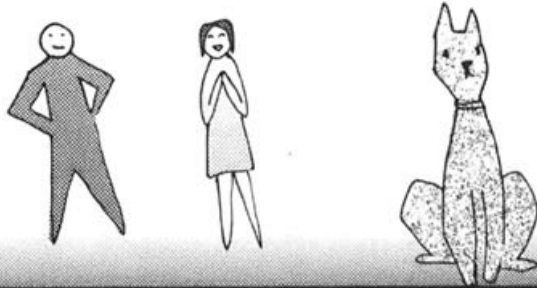


その際
不必要な
加害は

動物愛護の
精神に
反するが



人間に
有用ならしめるために
必要な限りの
加害は
許される



では
この窯内の
高熱は
必要なのか？



然り
必要であつた



これを
説明するためには
血液媒剤 (cosanguinin)
という酵素のことを
述べねばならない



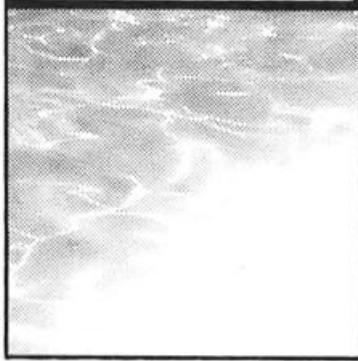
人体の生理を
支配する
酵素の秘密を
解明して
任意に
何ても合成
しうるようになつた



イース生体科学の
成果中ても

酒精転化素と
並んで
利用価値の
特に高いものである

血液中の
異常成分は



すべて肝臓で
吸収されて
しまうのが
人体の
生理であるが

この
コサンギニン
を加えると

異常成分は
肝臓で
吸収されなくなる

一方
皮膚表面を
強く熱して
脂汗を流させると

毛細管現象が
平温の時とは
変化してきて

コサンギニンに
媒介された
異常成分を



皮膚細胞に
定着させる作用を
営むように
なるのである

これは
非常に応用の
広い現象で

各種色素付与の上
定着温度を
調節することて

生体表面の細胞を
自由に
染め分けることができ

電気焼筆は
フレンジイシペン

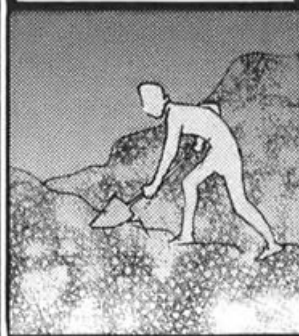
この原理に
基づいて
発明されたものだし



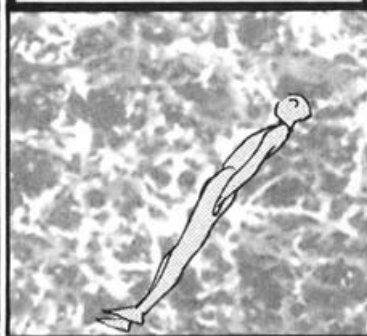
海底や
気圧の異なる
惑星大気内で
作業させるための



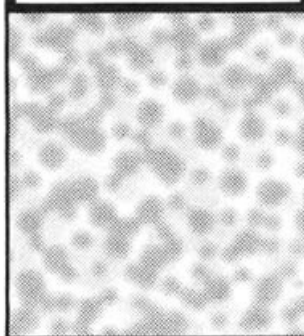
アイアン・クラッド
鉄皮畜人も



生体のまま皮膚細胞を
特殊金属化して
作られるのだ



……が
この種の
血液媒剤の
利用の詳細は



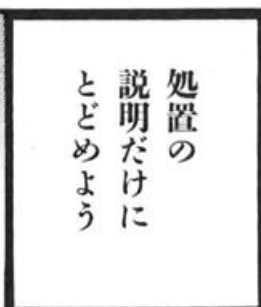
後日
クララが
皮革工場を
視察する日まで
保留し



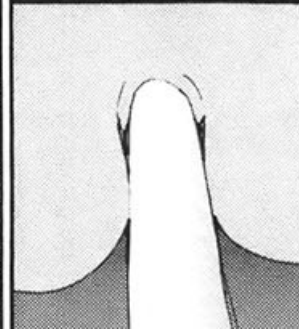
ここでは
鱗一郎の
受けている



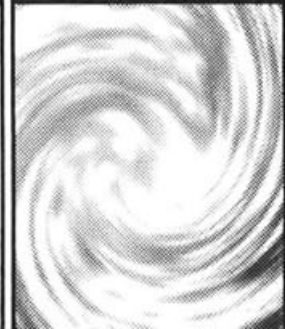
処置の
説明だけに
とどめよう



彼の腸内に注入
されているのは
皮膚強化剤を



血液媒剤に
溶かした
薬液であった



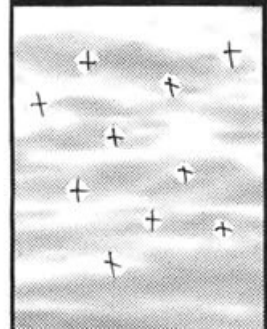
ヤブーの
皮膚から
精製する
有機化合物に



キエーサイウム
皮膚素
というものが
ある



これを
陽イオンで
処理して

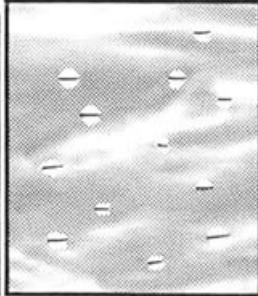
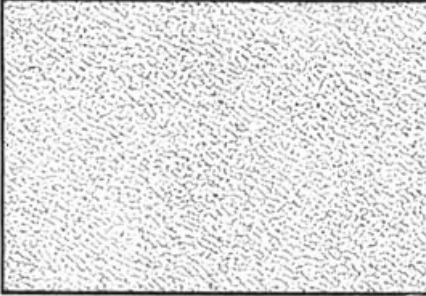


繊維にした
皮膚繊維は
断熱性に富み

服地強化用原料
として
重用されるが

逆に
陰イオンで
処理すると

細胞膜を
冷熱に対して
強くする
皮膚強化剤になる



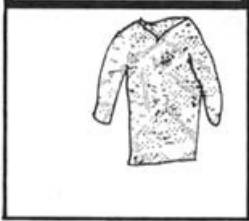
定着熱度
摂氏八十度で

約四十分かけて
これを
皮膚細胞に
沈殿付着させると

ちょうど
皮膚繊維混織の
衣服を

皮膚の内部に
着込んだ
ようになって

極暑・極寒に
耐えられるよう
になる



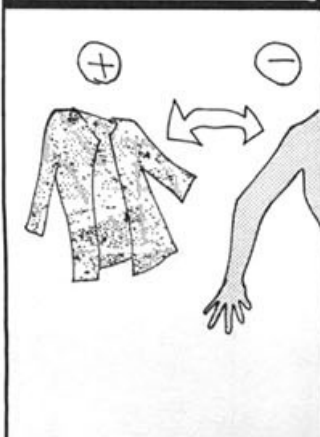
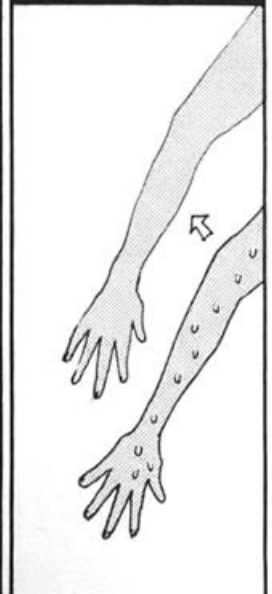
表皮の汗腺も
全部
閉塞されてしまう

発汗性と
断熱性に

変化が
生じるのみで

肌色 肌触り
触覚能力等には
何の
影響もないが

※
皮膚繊維にだけは
陰陽
相引く反応を示し



※ イオン処理が反対なので

長く
皮膚繊維布地に
触れると
皮膚剝離を生じる

ところが
イースでは
服地には

すべて
皮膚繊維を
混織してあるから

デルマトロームによる
皮膚強化処置を受けたら

もう
服を着ることは
できない体に
なってしまうわけだ

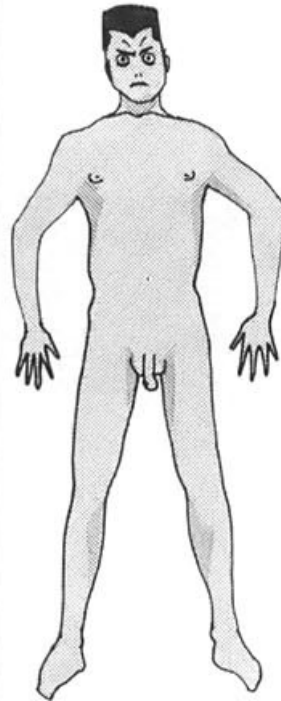


そこで
この処置は

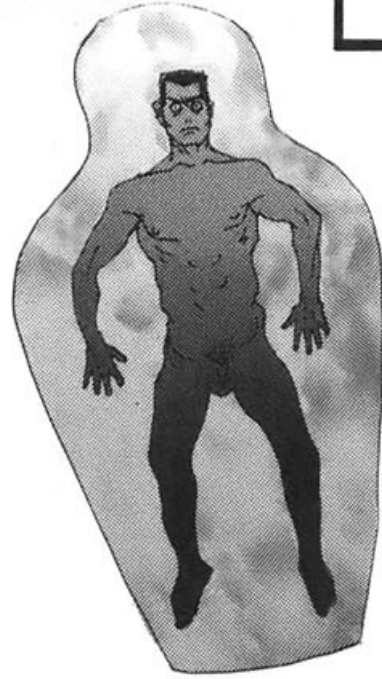
どんな衣服も
着る必要のない
動物であるヤブーに
対してなされるに
とどまり

白人・黒奴には
施されないように
なっていた

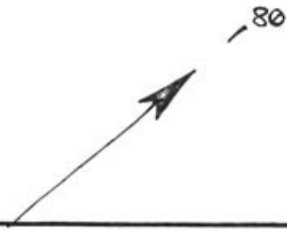
とまれ
鱗一郎は



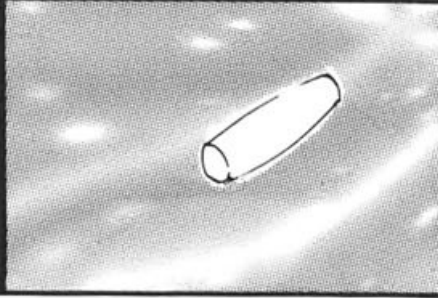
今
その処置を
受けていたのだ



温度計の針は
摂氏八十度で
止った



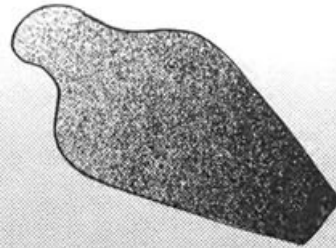
あと四十分
この
航時快速船が



二千年後の
地球面に
到着する直前まで



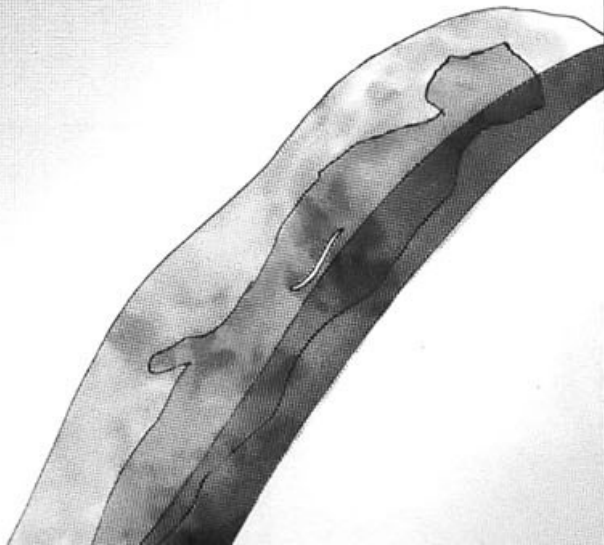
彼は
この棺桶形の窓



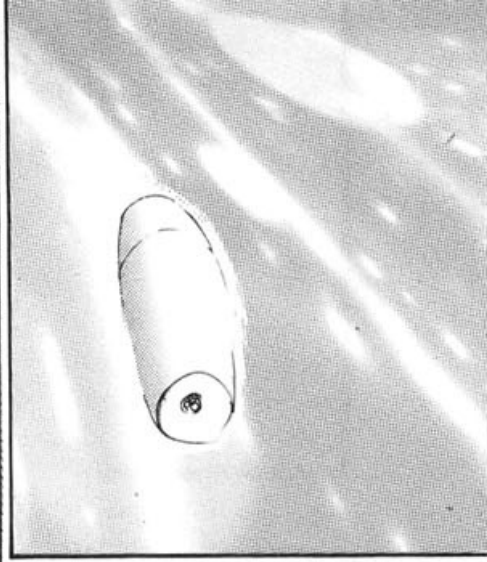
内て身を
焼かれねば
ならないのである

腸内では
エンジン虫の
尾部が
伸び始めた
ことだろう

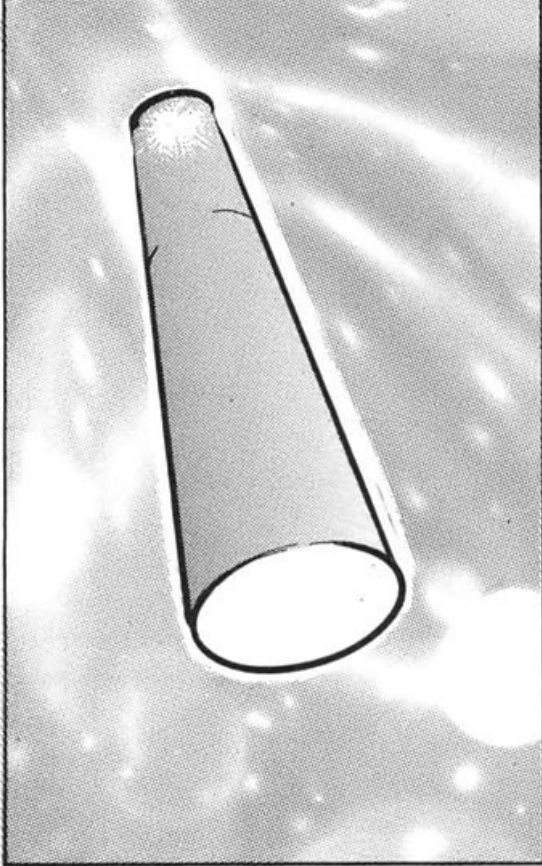
——それはまさに
古い瀬部麟一郎を
葬る棺桶だった——



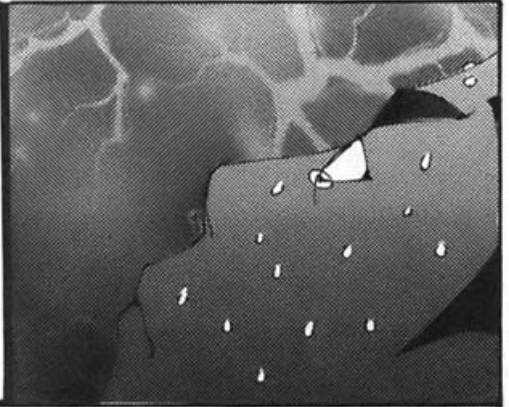
円筒船最低部で
麟一郎が



最上階の
応接用大広間では



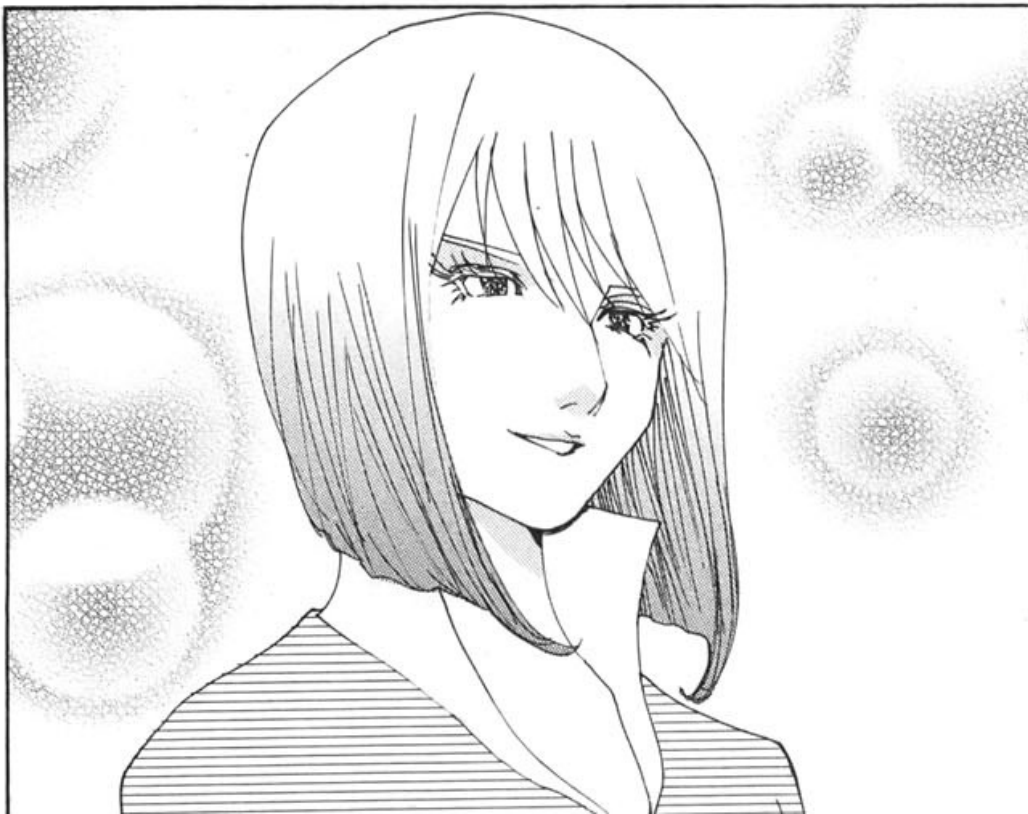
苦悩のあまり
声なき
悲鳴をあげて



クララに
呼びかけて
いたころ



クララが
愉快に
談笑していた



壁には
抽象派の
画が掲げられ



花の異香は
彼女の鼻を
快く
刺激した



すみには
不思議な大輪の花を
咲かせた
鉢植の木があり



その枝には
丸い鳥籠が
かかり



奥の壁に掛っている
電蓄からは
妙なる器楽の音

ドイツ生まれて
音楽の素養の深い
クララも

初めて耳にする
美しい交響曲だった



紫と黄との混った
派手な模様の
羽色をした

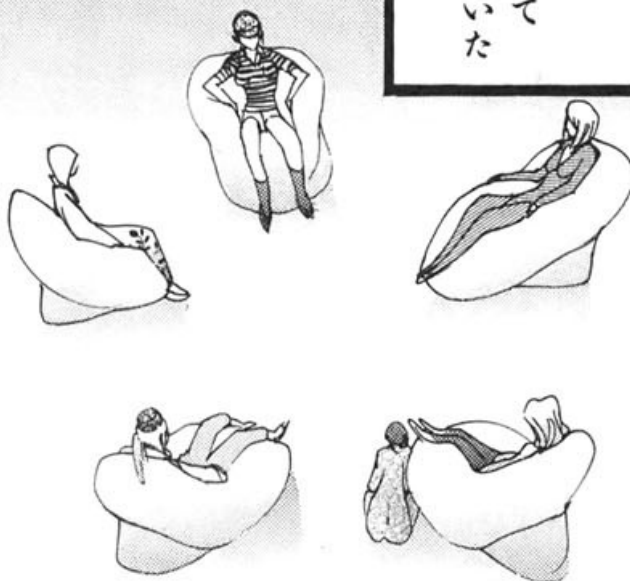


鸚鵡が
首を
かしげつつ

動かぬ目で
彼女を
見ていた



五人は丸く輪になって腰をおろしていた



犬のニューマは



ポーリーンの足元に長々と横たわっていた



初め異様に感じた男たちの派手な服も



慣れれば竜騎兵の制服の赤いのも同じであつともおかしくなく



そういうものとして美しかった



案じていたような気づまりはなかった



ポーリーンはホステスとして主人役として



気を配っていることばもちろんだし



率直明朗なドリスは



齢も同じくらいのクララと



大いに
意気投合して
自分から

貴女とは
古くからの
お知合いみたいなの
気がするわ

貴女は貴族よ
一目みて
わかったわ

私たちも
クララで称ぶから
貴女も名で
称んでちょうだい

——ねえみんな
それでいいわね

と
いい出した
くらしいの
打ち解け方だった

セシルは
古代史通をもって
任じるだけに

二〇世紀球面を
放浪したという
クララには

特に
感心と好意を
もっていたようだし

ウイリアムに至っては
明らかに
好意以上のものを
彼女に示し始めて
ひどく親切だった

さつき
船倉を出てこちらに
上ってくる途中

廊下で
船倉のほうに行く
二人の
黒奴に出会い

彼らが
土下坐して

一行を
避けるのに
答礼しようと
した時

手を組んでいた彼が
ぐつと
クララを引きとめた

そして
人間が半人間に
答礼する
必要は
ないことを

彼女に
思い出させてくれた

無知からする
そんな妙な
言動のたびに

彼女は矯正され
記憶を回復するの
だった

——知識のうえでは
この人たちとの間に
二千年の隔たりが
あるわけだけど

まるで
親友の家庭に
招かれたような
くつろいだ気分
でいられる……

そう
クララは
思った

声をかけずに
来てしまったのが
気がかりに
なっていた
隣一郎のことも

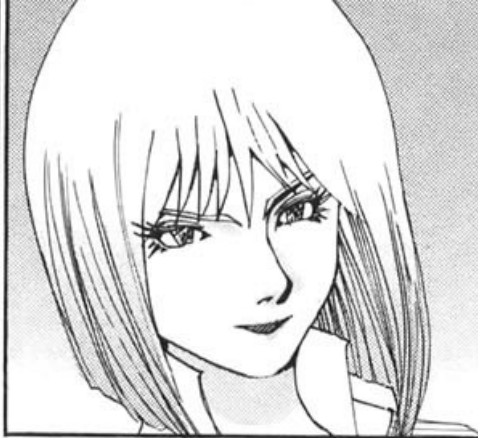
もう
服を着せられて
寝かされているに
違いはない

と考えて
無理にも
安心した後は
念頭から
去ってしまった

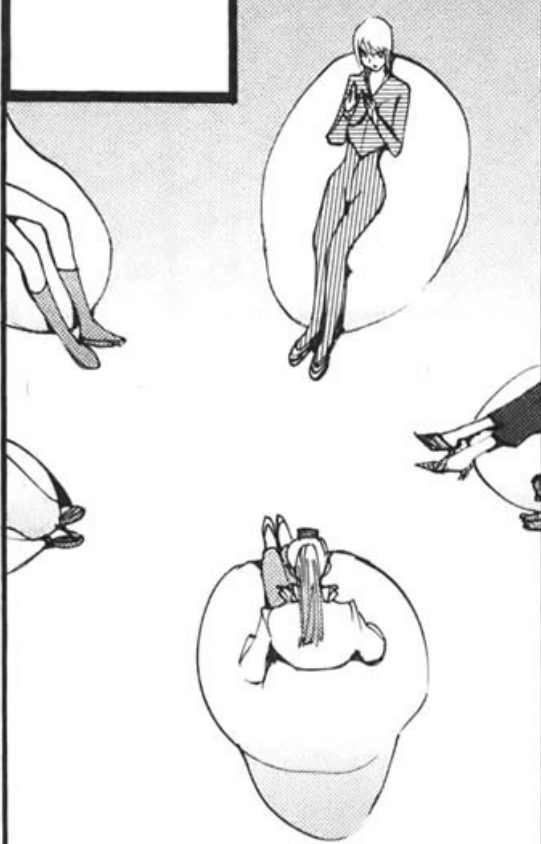
代わって
ウィリアムの
男性的魅力が

しだいに
彼女の心を
領し始めていた

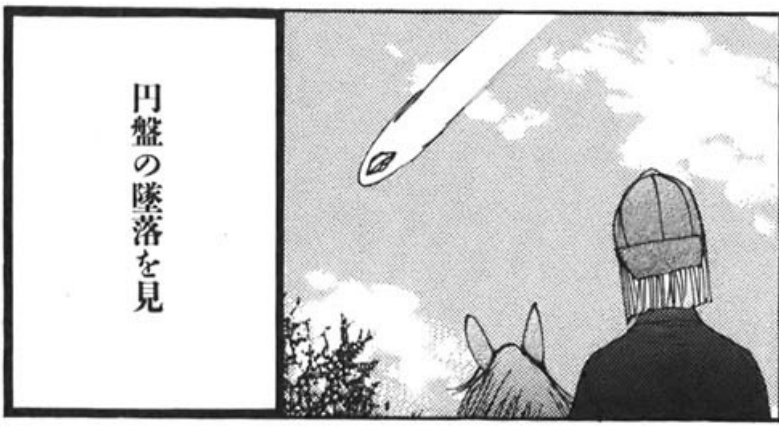
彼女は



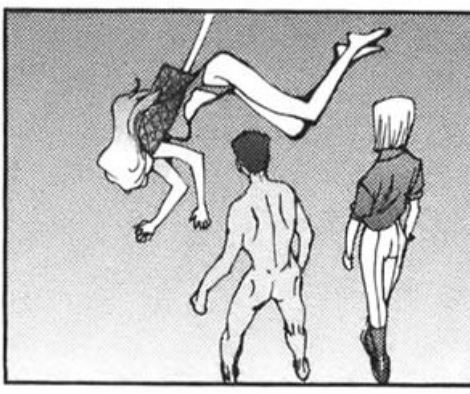
話したが



円盤の墜落を見



中に
ボーリオンを
発見した顛末を



意識的にか
無意識的にか

彼女一人の
行動を述べ



隣一郎の名に
触れなかったから



第九章 別々になつて
——第二話——

聞くほうには
ポーリーンを
正気づけたのも

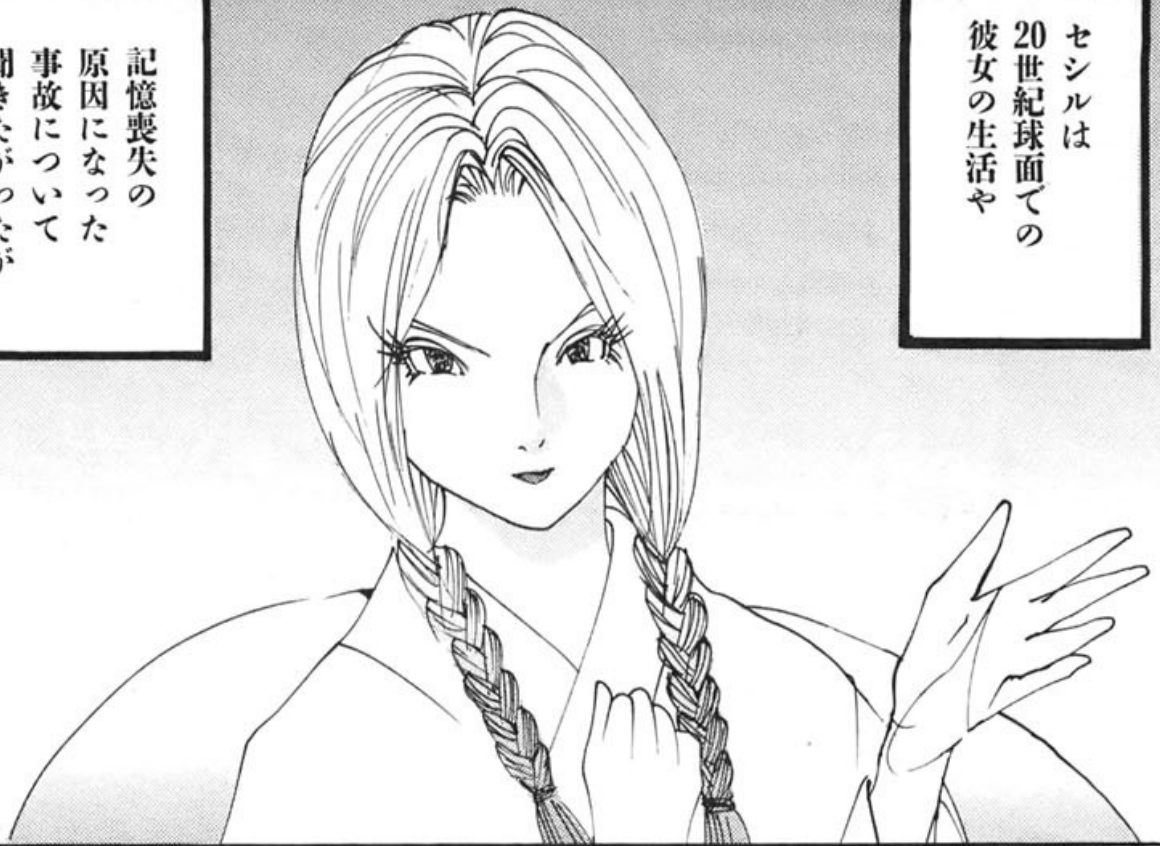


彼女であるように
聞えたことだろう



セシルは
20世紀球面での
彼女の生活や

記憶喪失の
原因になった
事故について
聞きたがったが



ポーリーンが

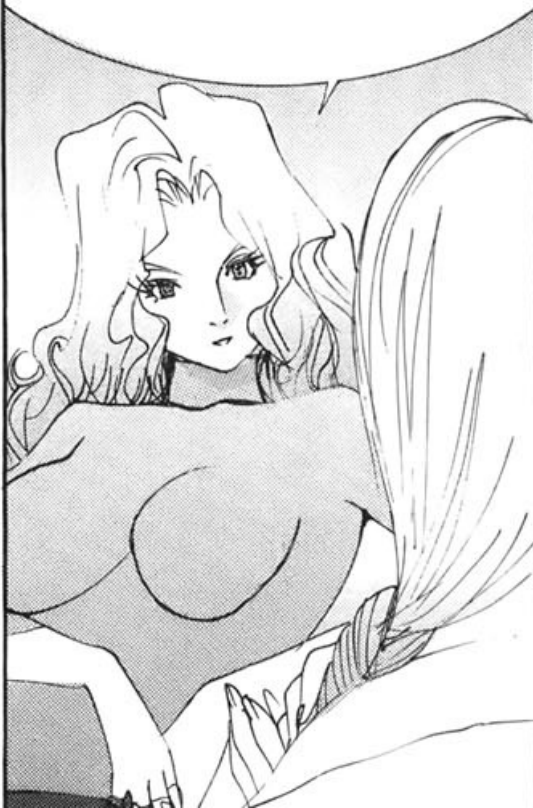
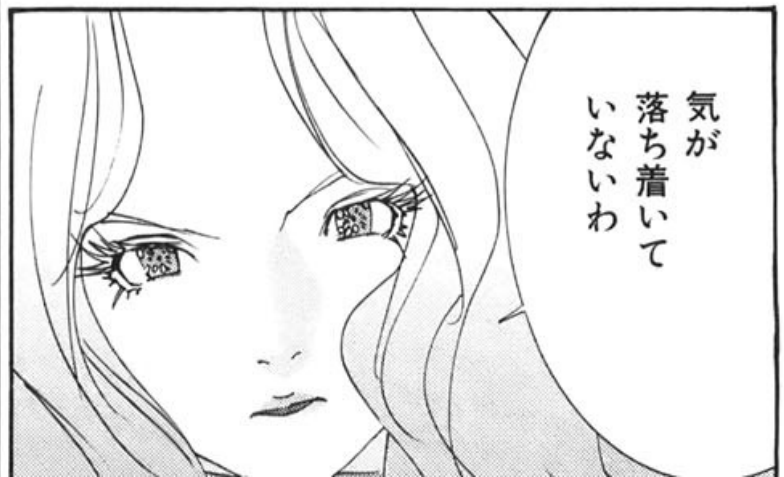


記憶が
回復してから
彼女が
充分自分を
客観視できる
ようになってから
聞くほうが
いいんじゃない？

クララは
まだそれを
話すことが
できるほど



気が
落ち着いて
いないわ



と
押し留め

そう

それより
クララの
生国の惑星を
探すのが先決だよ

ウイリアムも
さからわずに

僕
捜しますよ
クララ

と
真剣な顔で
いうのだった

ありがとう
皆様のお力添えで
生国星に帰れましたら
どんなに
うれしいでしょう

地球での
事故のことは
今全然お答え
できませんの

今は
疲れていますから……

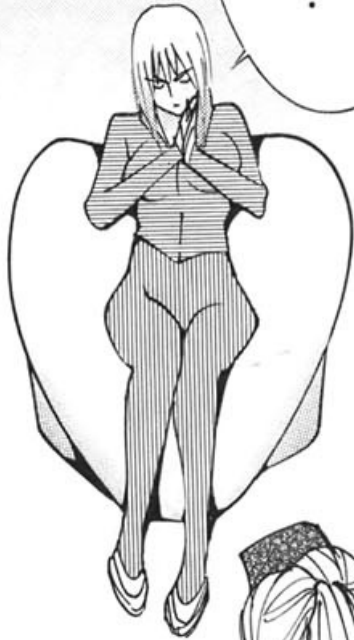
放浪中のことは
話せませす

いずれ
詳しくお話しする
機会が来ると
思いますけど

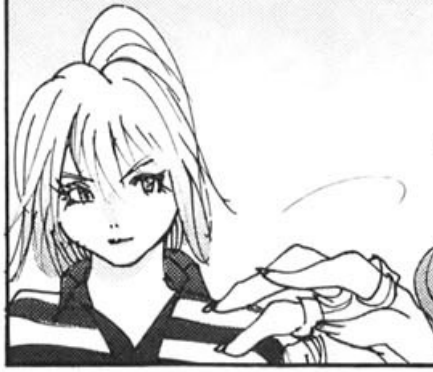
クララが
そういうと
ポーリーンは

ソーマ
靈液 (soma)
を飲みましょう

体力とともに
記憶のほうも
回復するでしょうよ



と
ドリスに
合図した



配膳盆を
ささげた
召使いが
はいつて来た

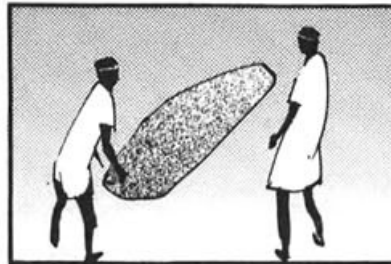
ドリスが
心得て
腕送話器に
ささやいた



ソーマを
持つといで



鱗一郎を
処置している
黒奴と



胸の数字が
違う以外は



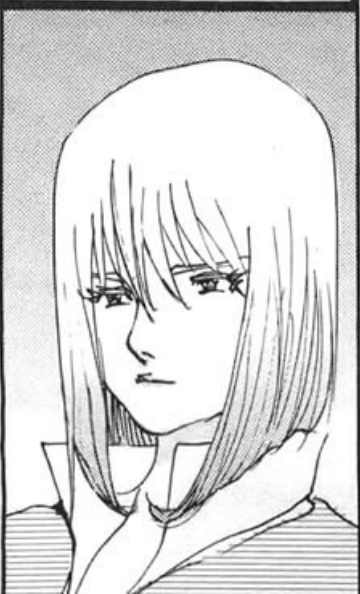
これは
胸番号2番だった



まったく
同様の
姿勢 形姿である



と
交響曲の快い
響きを破って
突然横から



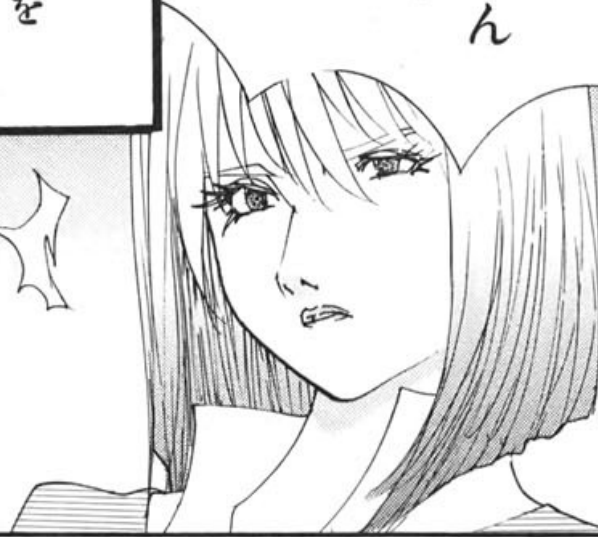
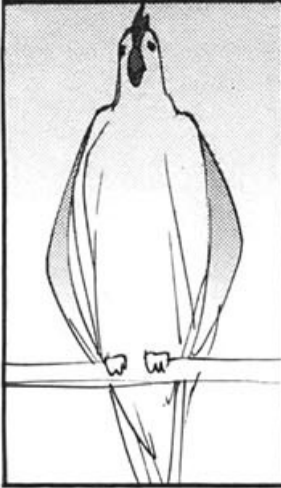
おうむ
鸚鵡
だった

金切声が
クララの耳を
驚かした

ソーマ

の
じかん
です

ソーマ
ソーマ
ソーマ



丸く座していた
五人の中央に
ピタリと静止した

ソーマ
とは何かしら？

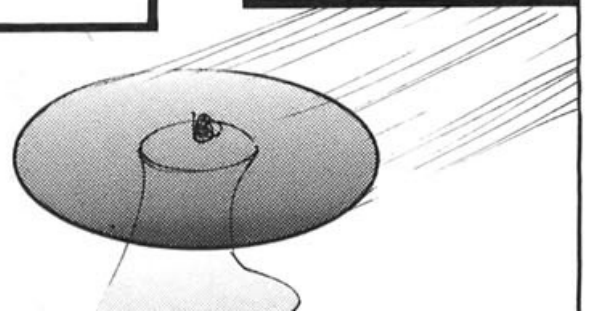
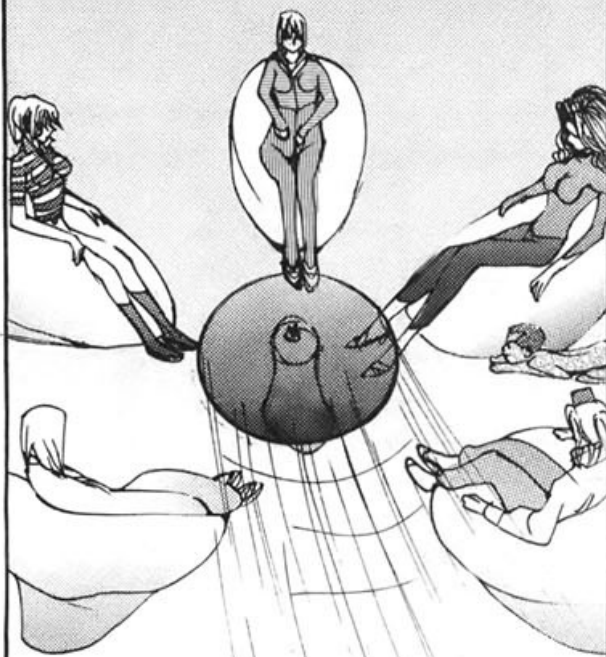


飲物
らしいが？



一台の
丸形茶卓が
すべるように
動いて来て

——と
思った時
どこからか
ひとりてに



卓の中央に
マツチ棒ほど細く

鉛筆ほど
長い棒が立ち

高さ
十四センチほどの
人形が
その横に
立っていた

卓上装飾用の
サンタクロースだ



それを
右手で
槓桿状に握り

左手では
背中にかついだ
大きな袋の
口を押えた



白の顎鬚は
植えたのだろうか



赤い三角帽子
赤い外套
白毛皮の縁取り
そして
黒い長靴



このままの
寸法で

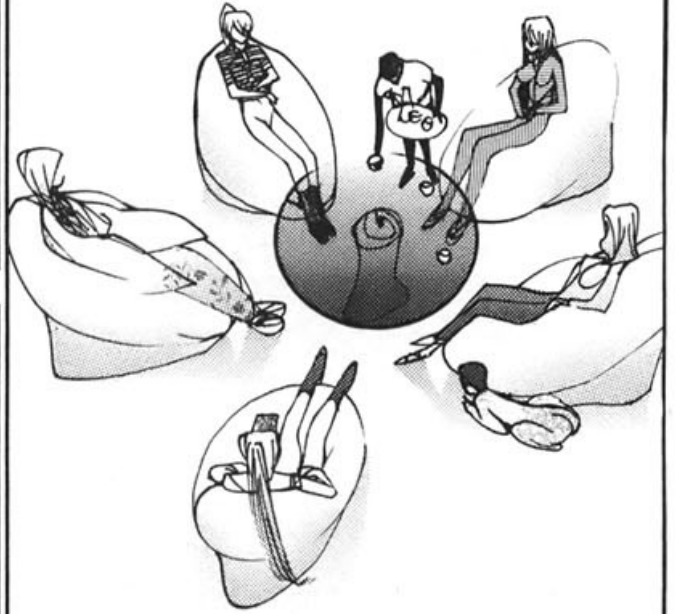


全体を
十二倍ほども
したら

まるで
本物ではないか



召使いが卓上に
五つの空コップを
配った



すると
サンタ人形は



右手に
握っていた
棒を放して



つと
前に進み出て来た



動作に
少しも人形らしい
ぎこちなさが
なかった



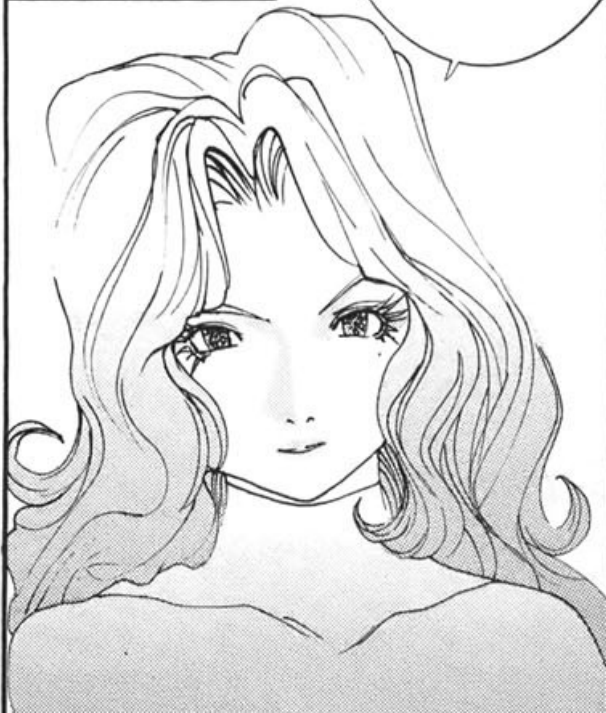
妾は二つ
お客様には
三つがいいわ

と
ポーリーンが
いった

何という
精巧な
自動人形だろう



と
クララは
感服した



人形は
白鬚を
揺るがせつつ
一礼すると



二人の
コップに
その数だけ
入れた



背中に
背負った
白い袋から

丸い
錠剤を
取り出し



妾二つ

と
ドリス

僕も

と
セシル

僕は
要らない

と
ウィリアム



コーヒーに
入れる
角砂糖みたいに

各人の
好みに
よるらしい

人形は
いちいち
お辞儀して



注文の
粒数だけを
コップに
入れてゆく



待っていたように
召使いが
ポットを傾けて



湯気の立つ
緑色の液体を
注いだ



ソーマのこと
思い出しましたか？

汗の匂いを
よくするため
誰でも飲むでしょう



馥郁^{ふよく}たる
香氣が
部屋一面に
漂った

ぷん



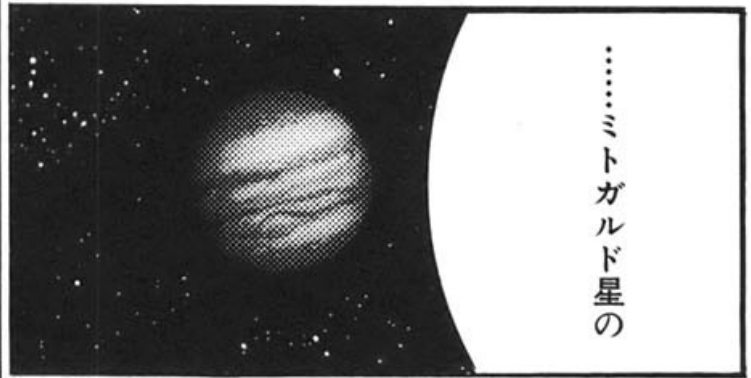
ウイリアムは
一口二口
すすりながら



別名を
ヒュマニティハニー
人類愛の蜜という
霊液です



……ミトガルド星の



巨樹イグドラジルに
年に一度
数万の花が開く時



エアロ・ビクミリス
空中矮人達に
花の蜜を
集めさせて……



ああ
ああ
記憶が戻った
ようです



で
お好きですか？

ドレイパア朗らんが
心配している
わけはね

ポーリーンが
笑いながらいった

彼は
貴女の生国星を
捜しに

貴女と
いっしょに
イース中
回るつもりで
いるからよ

彼は
ソーマなしでは
一日も
暮らせない男なの

もともと
好きといたら

旅行中
一日に五度も
付き合って
飲まされる
覚悟でなきやア……

だから
貴女がこれを
嫌いといったら

彼は
閉口するわけよ

クララは
こわごわ
一口すすってから



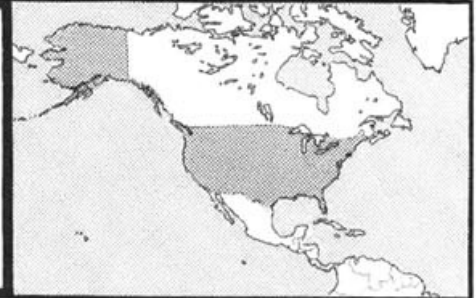
ぐっと
飲み干した



西独が連合軍に
占領されて以後



米国から
はいつて来て
なじみになった



コカ・コーラに
ちよつと
似ていて



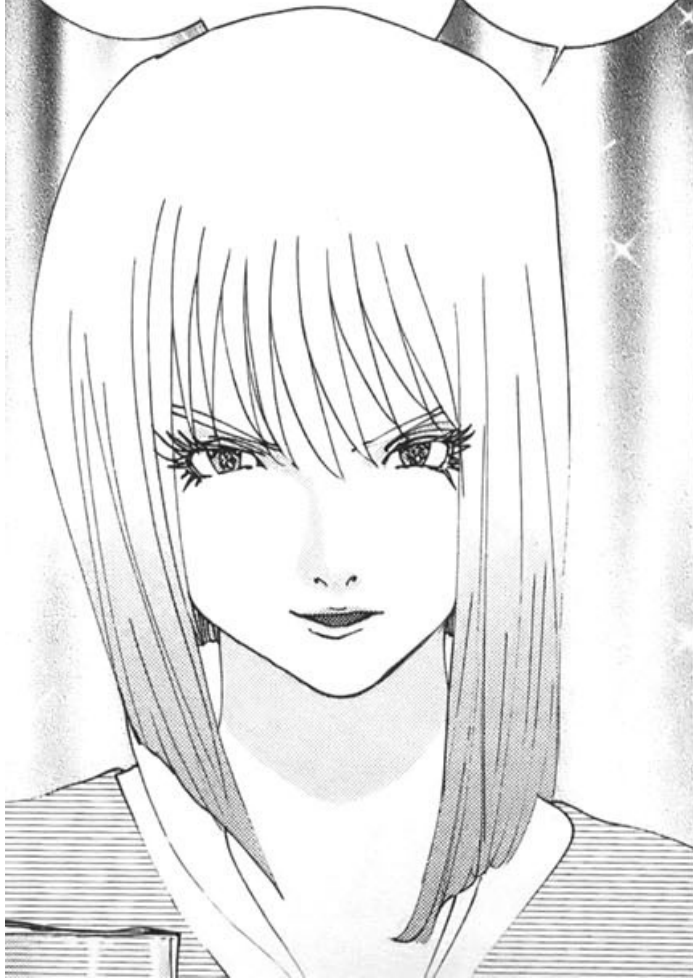
はるかに
微妙な縹渺たる
趣のある味だった



妾
好きでしたし

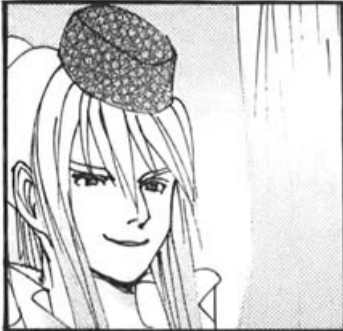
飲んでみて
はつきり
思い出しましたわ
ソーマの味

今
飲んでみて
懐かしくて……






今でも好きよ




そばの
美青年を
願みて

ソーマに祝福あれ
貴女にも

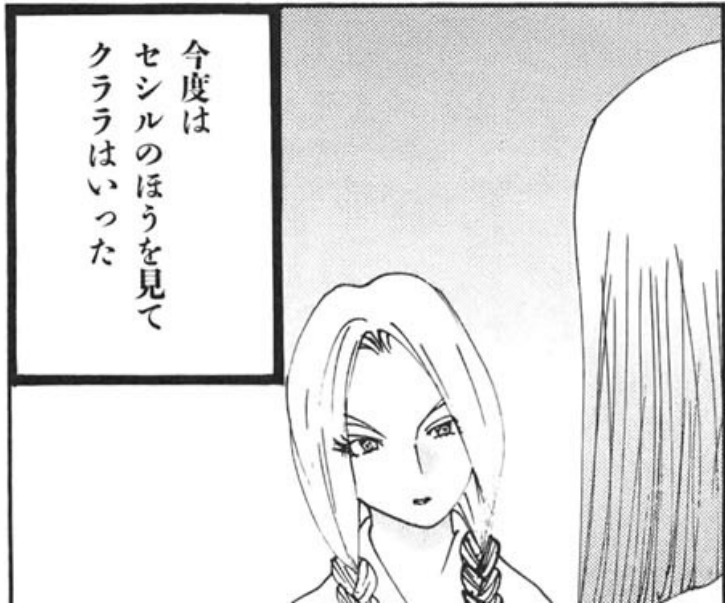
目を細くして
ウイリアムは
叫んだ




微笑みながら
彼女はいった




二十世紀人なら
コカ・コーラに
似ていると
いったでしょう




今度は
セシルのほうを見て
クララはいった




コカ・コーラ？




他の人には
わからなかったが



そう
前史時代末期に




コカ・コーラ
という飲物が
流行ったのでしたね



貴女が
放浪中それを
味わわれたとは
貴重な経験でした

そうですか？
ソーマに
似てますか？……



私は文献で
知ってるのですが

セシルは
古代史の
知識をひけらかす
機会を喜ぶように

しかし
ココ・コーラは
ソーマほど日常生活に
はいつてないんじゃない
ですか？

味の点を
離れていえば

ココアとか
コーヒーとか
紅茶とかのほうに
近いんじゃないかな？

お茶の時間
という言葉が

ソーマ・タイム
霊液の時間
という言葉に
取って代わられたと
国語学者は
いつてますからね

おっしゃる
とおりですわ

それで妾は
ソーマがどんなに
日常的な飲物
だったかを

やっと
思い出しました

苦しい
返事だった

この時
卓上の人形が



少し動いて
鬚が揺れた

また
何か間違った
のかしら

と
思った時

この人形は
ずいぶん精巧な
機械仕掛
ですね



皆が
妙な表情を
したのに
気がついて



ウィリアムの
陽に灼けた手が



手掌を
開いた

人形を
驚づかみにし



彼女の
目の前に
持って来て



機械じゃ
ありませんよ



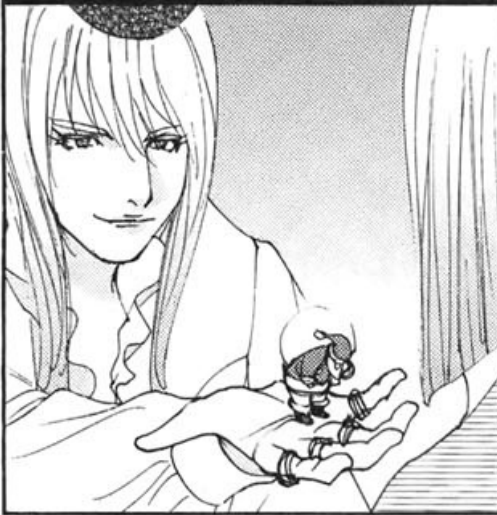
(薬味)袋持ちとか
スライス
薬味サンタとかいう
ディフル・ビクミー
食卓矮人の一種ですよ



ソーマを飲むとき
薬味錠を入れるのに
使う道具です

白い大きな
手掌の上で
赤外套を着た
人形は
立ち上がって
向き直ると
最敬礼をした

思い出し
ませんか？



その動作
白い顎鬚と
目尻や
額の皺との
見事な調和から
かもし出される
豊かな表情……



小人なのだ

これを
食卓矮人と
いうのか？

さつきは
空中矮人という
言葉を聞いた

人形にしては
精巧すぎる



生きて
いるのだ



その時は
蜜蜂のような
ものかと
思っていたのだが

「ガリバー旅行記」に
出て来る小人島リリパットの
住人たちと
同じような
人間の縮小体…

こういう小人を
pigmyと
称ぶのだろうか？

二千年後の
世界には

この人たちが
そこから
来たという

何と
空想的な生物が
いることだろう

遠い
シリウスの
世界には

こんな小人が
住む星が
あるのだろうか？

ええ
だんだん思い出して
来ましたわ

矮人……

他にもいろいろ
使うんじゃないかと？

と
ハツタリて
いうと

もちろん
矮人たちの
用途は
無限ですよ

ウィリアムの
声を
聞きながら

この
サンタクロースの
扮装をした
小人の

鬚のある
立派な
顔の肌色が

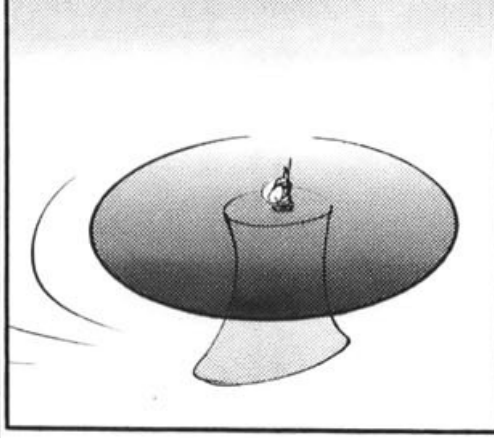
ふと
心を曇らせた

黄色味を
帯びていることに
クララは
気づいて

美青年の手が
小人を
卓上に戻すと

彼は
チョコチョコと
中央の
棒のところ
走り寄った

と
丸型茶卓は
ひとりてに――



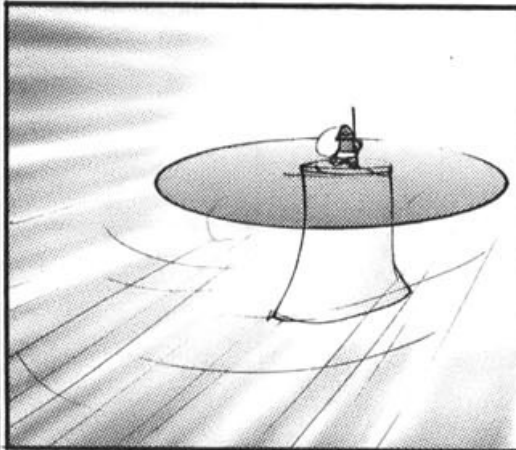
ここにも
いてよ

ポーリーンが
鸚鵡の籠を
下げて来て
クララに見せた



いや
槓桿を握った
小人に
操縦されながら

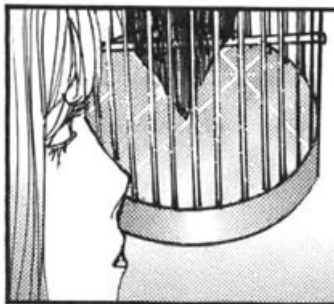
走り去って
行くのだった



これは
ケイジ・スレイブ
鳥籠奴隷って
いうの

今
雌しか
見えないけど

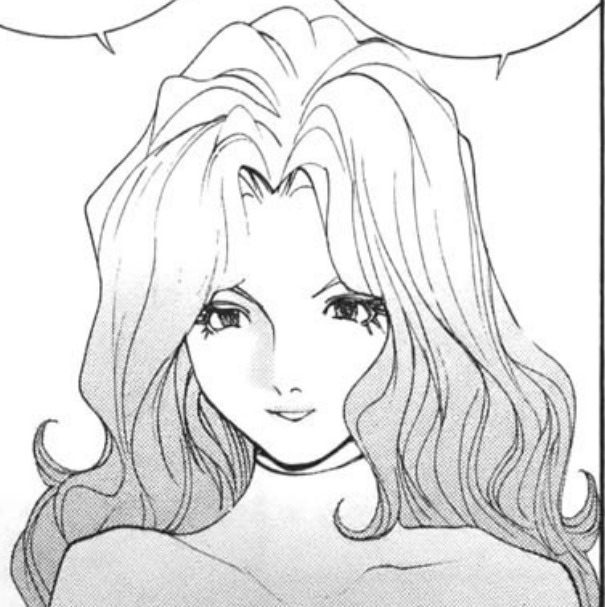
鳥籠の底は
たいてい
汚らしい
ものだが



これは
ピカピカに
光っていた



籠の底に
鳥の羽色に
合わせたらしい



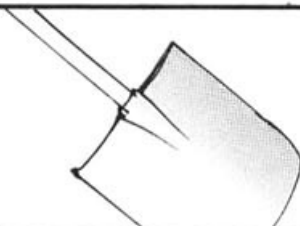
紫と黄とに
塗り分けた



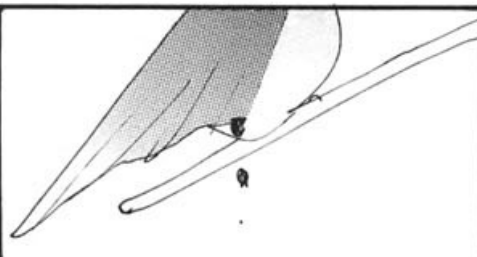
中世騎士の
甲冑のようなものを
着込んだ
同じ大きさの
小人が見えた

掃除を
していた

ままごとの
匙さじくらいの
シヤベルで



今しがた
鳥の
お尻から
落ちた



柔らかな
糞をすくって
横の穴に入れ

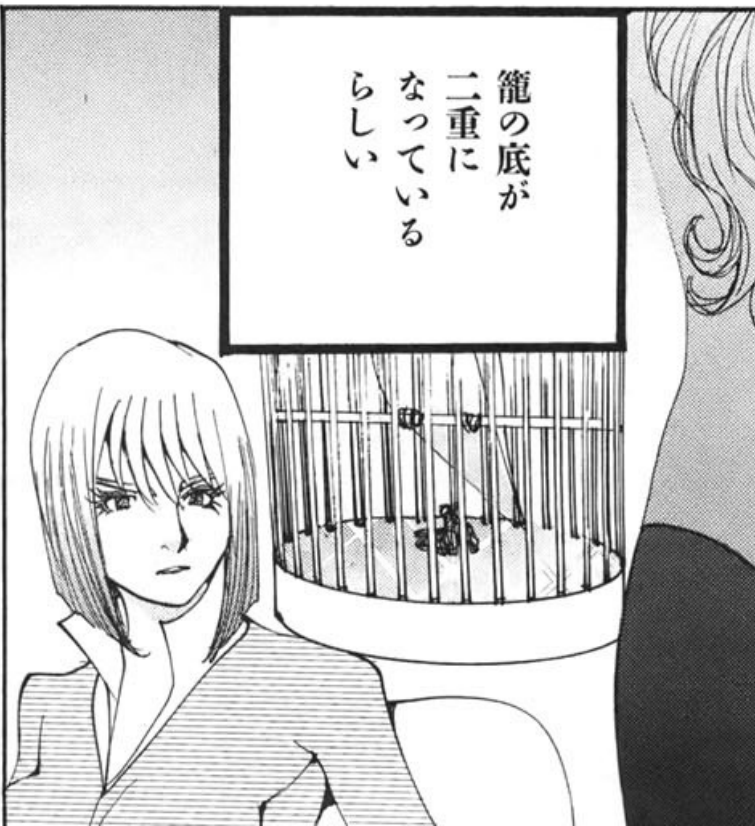


籠の底が
二重に
なっている
らしい

鳥の糞と
いっても
この小人に
とっては



ちよつとした
一推積ひとやまで
大作業だった

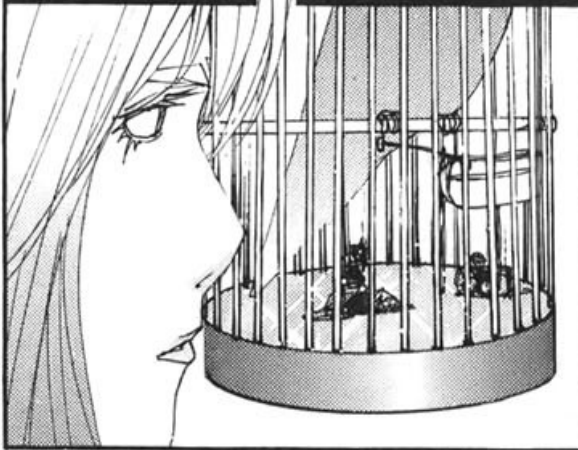


……と
底のすみに
別の穴が
あき

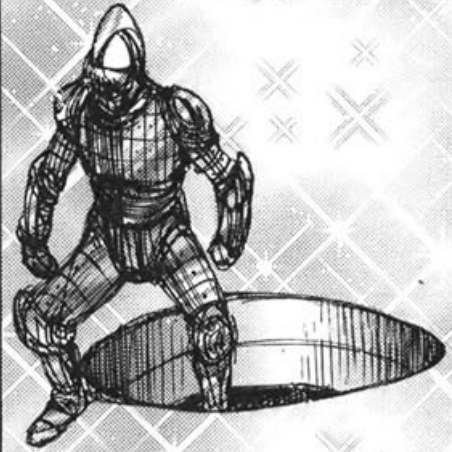


はねつるべ
撥釣瓶のような
仕掛けを使って

下の蛇口から
出る水を
桶に入れ



同じなりの
雄が
もう一匹
出て来て

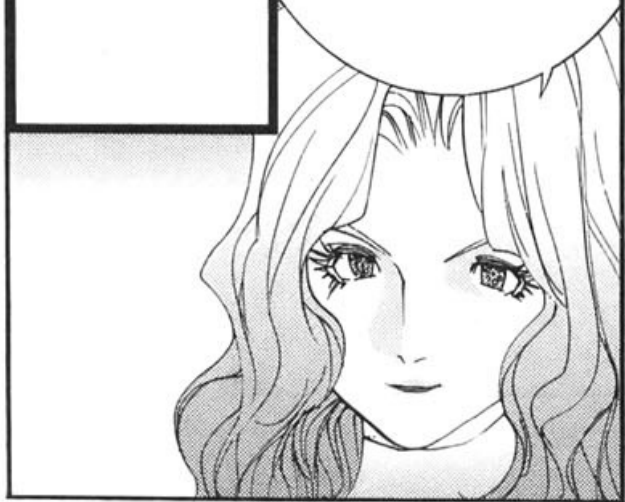


うんうん
力みつつ
引き上げて

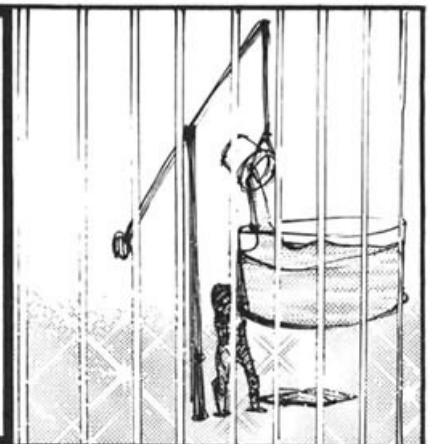


めおと
雌雄で
この鸚鵡に
仕えている
奴隷だけれど

その鸚鵡の
飼主が
説明した



上方の
水飲器を
満たし始めた

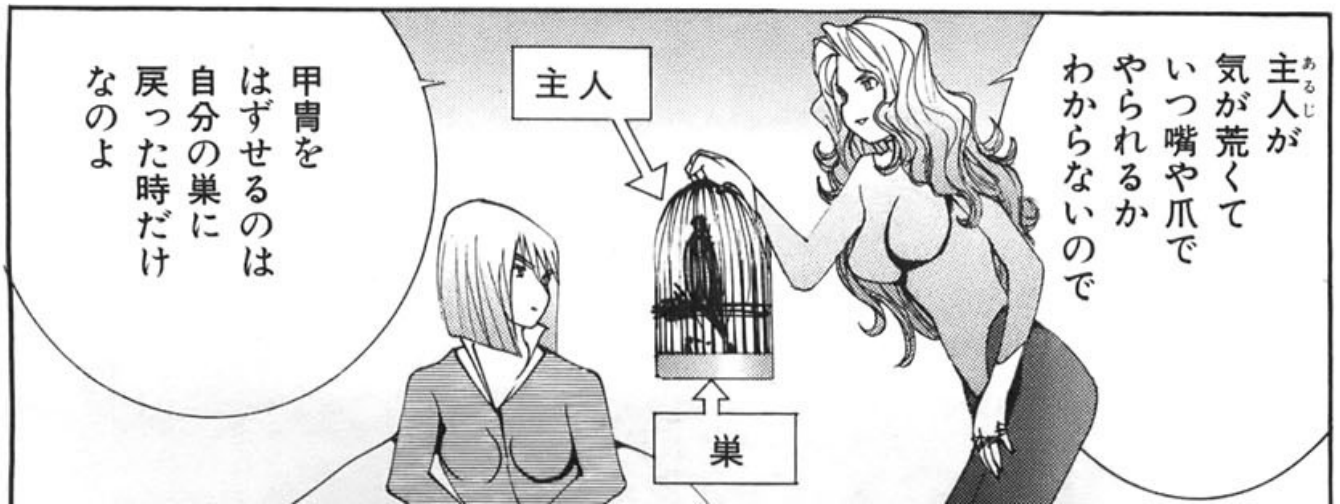


あるし
主人が
気が荒くて
いつ嘴や爪で
やられるか
わからないので

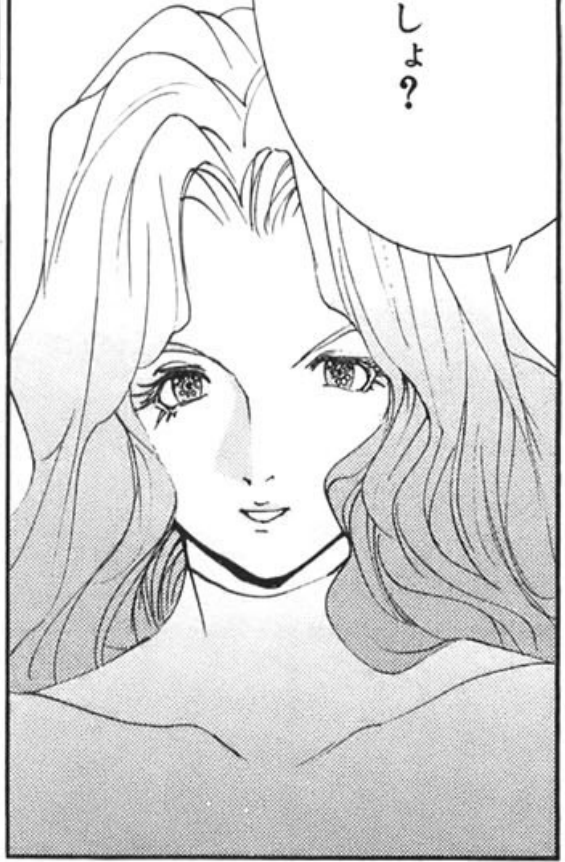
主人

甲冑を
はずせるのは
自分の巣に
戻った時だけ
なのよ

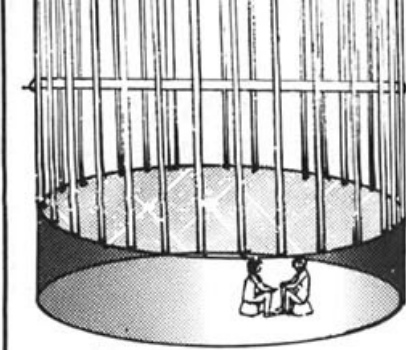
巢



どう
思い出すでしょ？



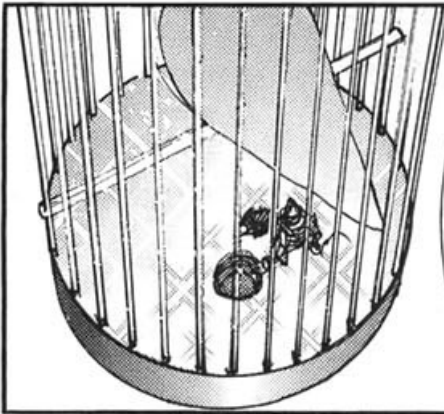
鳥糞を
落とす
二重底の中に
巣を営んで



主人たる
鸚鵡に
隷属しつつ



その
身辺の世話を
する鳥籠の
奴隷……



仕事振りからは

知性を備えた
人間の縮小体ミニチュアに
違いないが



あの
植木鉢にも
奴隷が
住んでますよ

フラワー・ピクシー
花矮人と
いいましてね



それを
こんなところで
こんな風に
飼うとは……



と
セシルが
つけ加えた





その驚きを
面白がるかの
ように

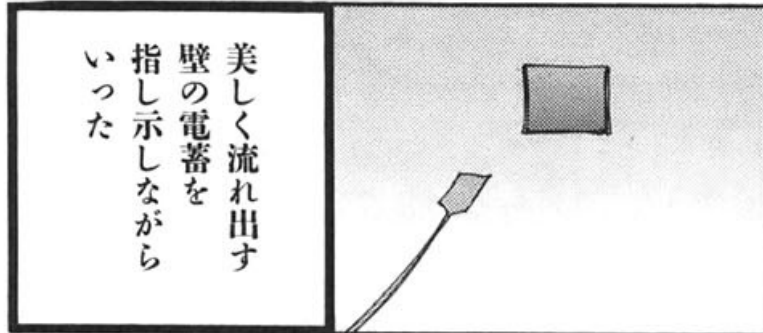
クララは
度肝を抜かれて
返事の声も
出なかったが



ドリスは
ブーツの
長靴の胴から
抜き持った
天馬鞭で



今しも
第三楽章に
かかった
交響曲の



美しく流れ出す
壁の電蓄を
指し示しながら
いった



あの
ポークアップル・オーケストラ
携帯用管弦楽団
だって
そうなのよ

あの電蓄——
ラジオかしら……

まあ
ラジオだと
思ってたの

と
ドリスは
笑って



いつの間にか
例の腕送話器を
使っていた
らしく



その箱を
下ろさせ



ちょうど
この時

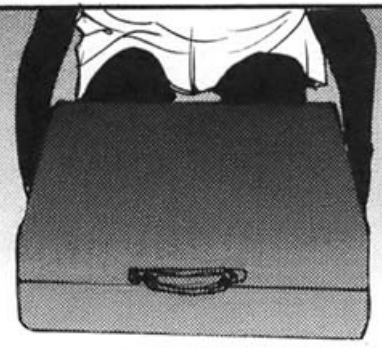


腕力の
強そうな
召使いが
入って来たのに
命じて

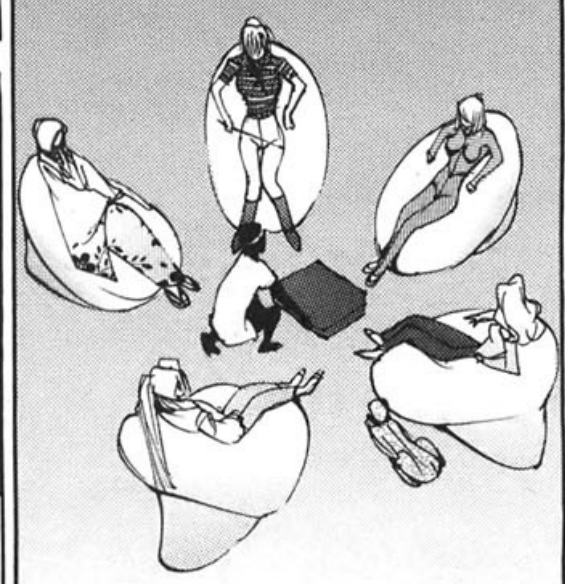


クララの前に
持って来て
開かせた

大型の
トランクに
似て取手が
付いていた



蓋が
開かれ……

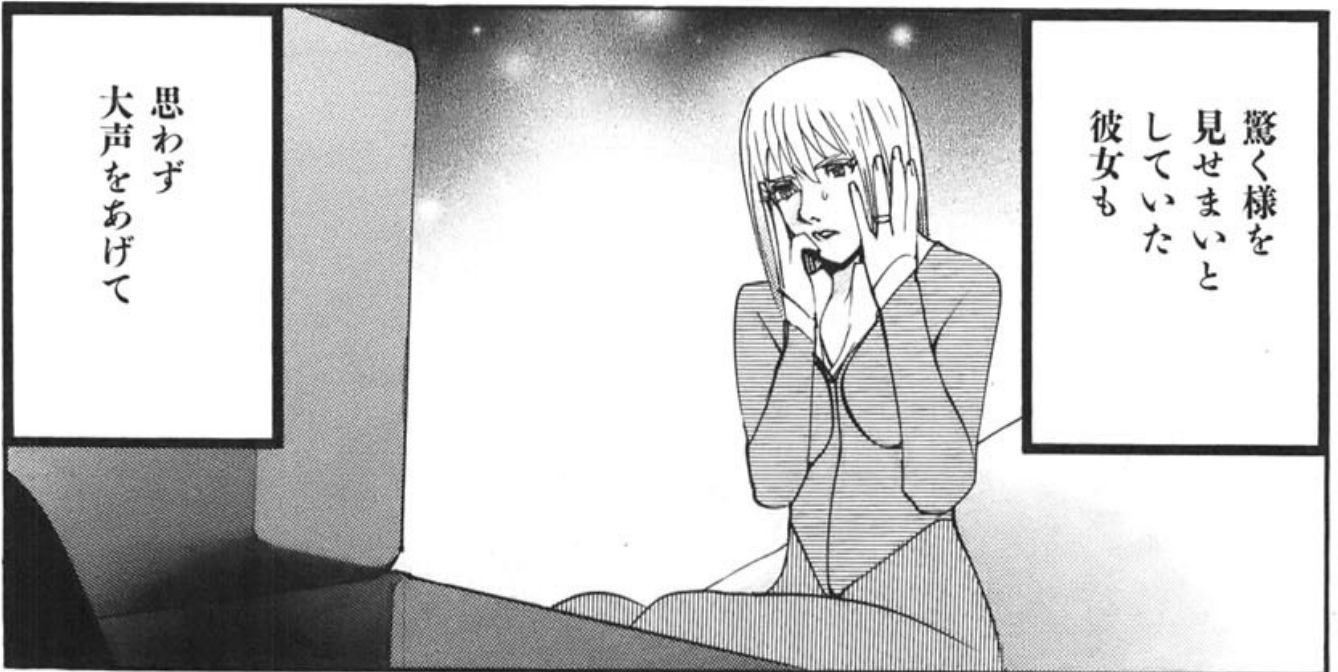




あらッ！

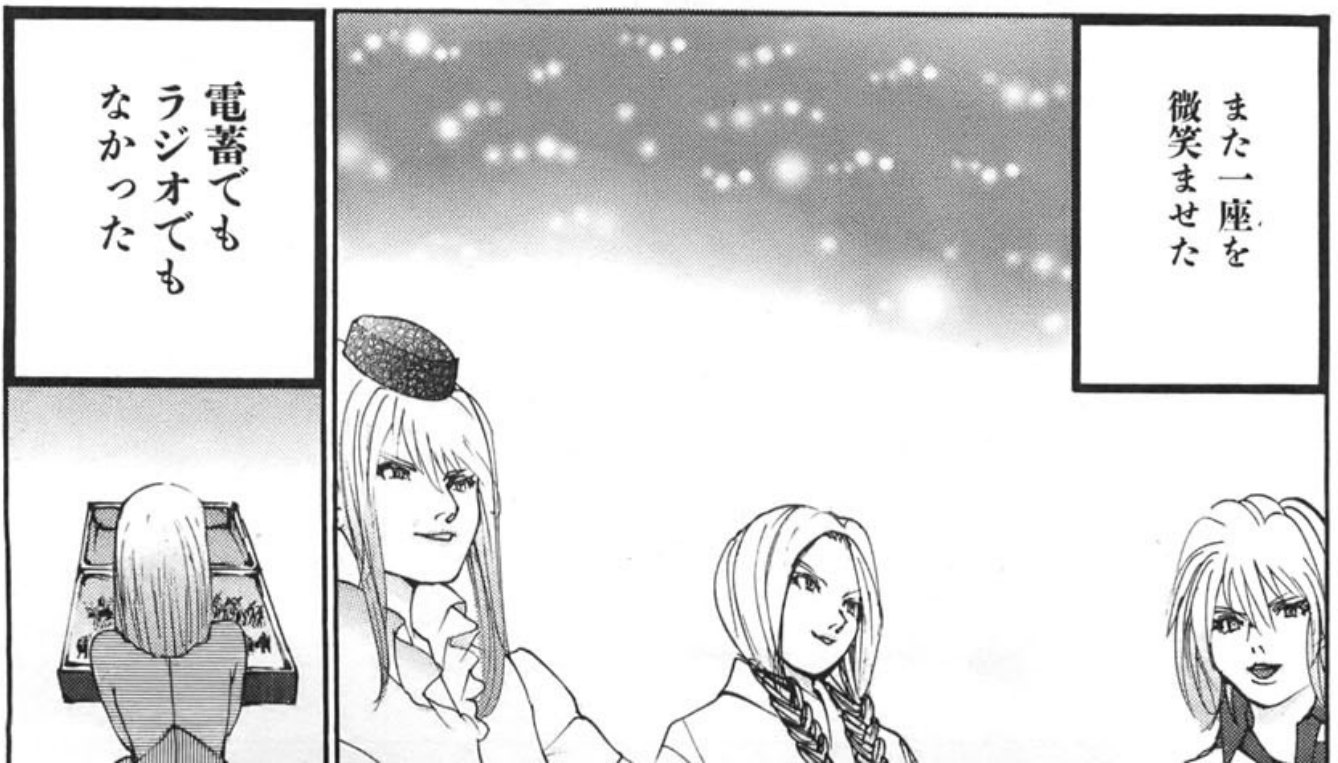


ほら
リトル・ミルシヤンス
小伶人達



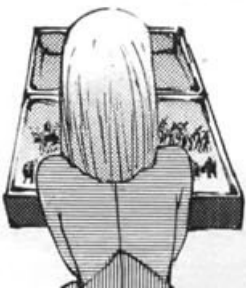
驚く様を
見せまいと
していた
彼女も

思わず
大声をあげて



また一座を
微笑ませた

電蓄でも
ラジオでも
なかった



箱の中には
礼服を着た
小人の楽人
五十人くらいが
それぞれ
席につき

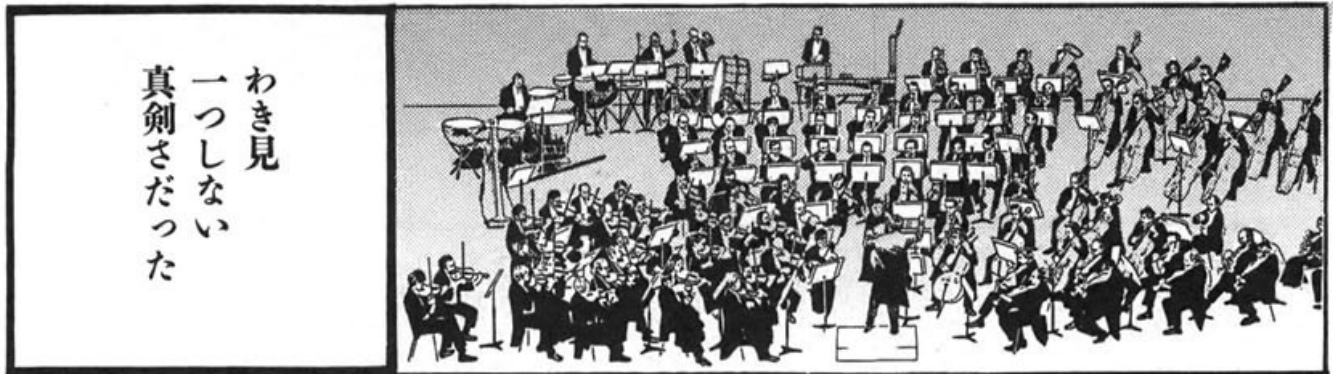


楽器を持ち
指揮者の
タクトに従って
整然と
演奏をしていた
のだ





天上蓋が開いて
五人の顔が
上から
のぞいたのにも



わき見
一つしない
真剣さだった

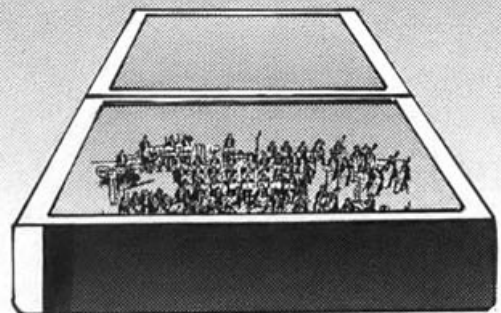


どう？
思い出した？

トランクの
中に詰った
小人たちの
管弦楽団……



ドリスは
クララに
目で笑いかけながら



鞭の
手真似て
召使いに
それを元通りに
させた

蓋が
閉じられ



思わず

あつ
横にして
いいのかしら
中の
小人たちが
下のほうに
ずり落ち

押しつぶされは
しないか

黒奴の
太い手が
取手を握って



箱は横に
ぶらさげられる



と
心配したのだが

この
船だって
そうです

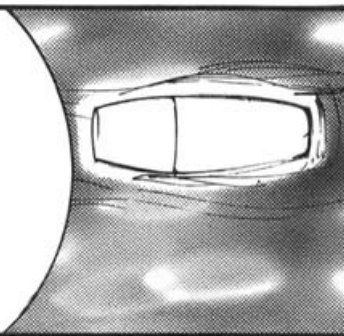


底に
引力版が
張って
ありましてね

どう傾いでも
平気なんです

横から
ウィリアムが
説明してくれた

宇宙船は皆
床に引力版を
使っているのです



そうでしたわね
引力版という言葉に
記憶がありますわ

と
クララは苦しい
受け止め方をした



矮人の事を
思い出した
すっかり？

と
ポーリーン

でも彼らが
どこの星で
生まれたのか
伺いたいわ
そんな
小人島のような
星が……

変なことを
いい出される前に
説明する
つもりらしい

多少は

まあ
思い出したじゃない
釣堀フッシングの

ほんとうの名前を
その調子

と
ドリスが
喜んだ

そう
矮人族の最大生産地は
小人島の牧場よ
ほんとうによく
思い出したわね

星の名と
『ガリヴァー旅行記』

との関係※を知らない
ポーリーンは

クララが
イース人ではないと
わかっているだけに

と
この的※中が
不思議だったが

どうして
わかったか



これ幸いと
語を継いで

ビグミ・パスチユア
矮人牧場と

いうだけなら

外にも

星はあるけど

小人島には

ワイルド・ビグミー
野生矮人が

いる

貴女が
覚えてたのは

きつと

前にそこで

矮人釣をしたことが

あったのね

クララが
貴族だということは
今や一点の疑いも
ないね

と
ウイリアムは
うれしそう
だった

この小ささは
何から？

と
クララが
訊くと

アミラシキ
縮小ヤプーが
変種として
固定したものです

縮小……
元は人間なのが
縮んだ……

人間じゃ
ありませんよ
全然——

あら妾めかけ
元はヤプーなのががって
いうつもりだったの……

ヤプーが
縮んだんだった
わね

※「ジョナサン・スイフト(1667-1745)は、航時旅行者からイース文明のことを聞きかじっていたらしい。「ガリヴァー旅行記」の小人国「リリパット」、飛行島「ラビユータ」、畜人「ヤプー」(Yapoo)など、いずれもそれを推測させる。スイフトが火星の二衛星発見に先立つ百年前にこの二衛星のことを詳しく知っていたことは今も謎とされているが、実は未来人からその知識を得たのであろう」
(「フリタニカ」の「スイフト」の項)

そうです
十二分の一に

縮んだ
ということの
ほうに
気を取られて

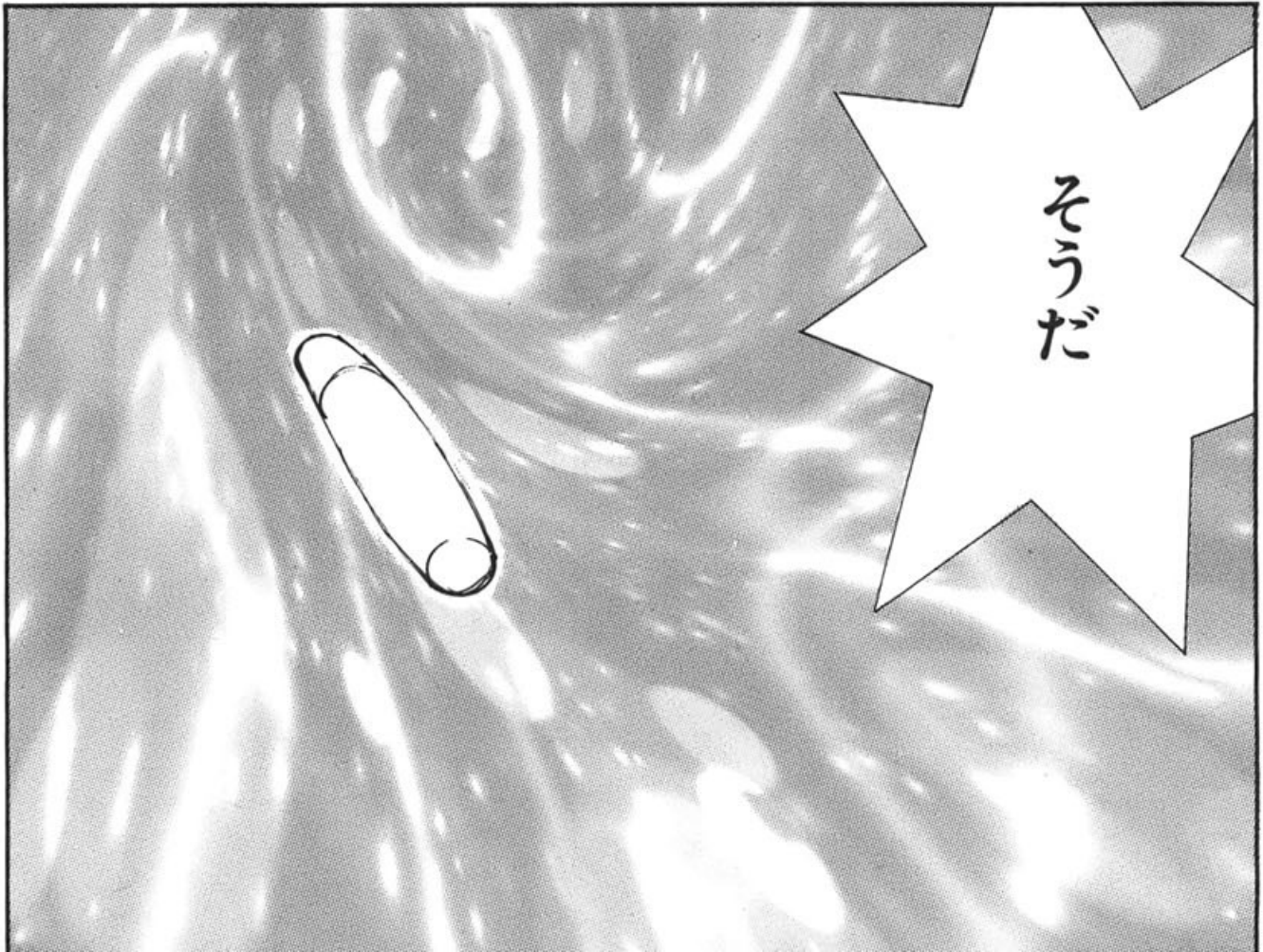
クララは
無心に
訂正したが

いつの間にか
人間とは別の
ヤプー
という動物の
存在を認めて
しゃべっているのを



自分では意識
しなかった

そうだ



バースコミックス

家畜人ヤプー④

2004年9月24日 第1刷発行

著者

えがわたつや
江川達也

ぬま しょうぞう
沼正三

発行人

伊藤嘉彦

発行元

株式会社 幻冬舎コミックス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6431(編集)

発売元

株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6222(営業)

振替00120-8-767643

印刷・製本所

大日本印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©Egawa Tatsuya, Numa Shozo, GENTOSHA COMICS 2004

ISBN4-344-80451-1 C9979 Printed in Japan

幻冬舎コミックスホームページ <http://www.gentosha-comics.net>

この本に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は、comics@gentosha.co.jpまで。

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

